

# 米 国 古 典 簿 記 書 の 研 究

久 野 秀 男

## 目 次

まえがき

### 第 1 部 論 説

序論；前世紀米 国 簿 記 書 の 系 譜 と 課 題

#### I 勘定分類にみられるダイナミズム

- (1) 伝統的な勘定分類とその問題点
- (2) 伝統的な勘定分類からの離脱
- (3) 勘定学説と勘定分類

#### II 単式簿記の覚書

- (1) 設 題
- (2) 単式簿記の展開過程；資本勘定と純損益
- (3) 再び「単式簿記」の定義について

#### III 仕訳帳金額欄の諸形式

- (1) 設 題
- (2) 米書にみられる金額欄への関心

#### IV 米書にみられる「簿記小史」

#### V 「テキスト(教材)」としての簿記書の定型

- (1) 設 題
- (2) 米書にみられる「テキスト」の定型

#### VI 現金式仕訳帳制の展開

- (1) 設 題
- (2) ブライヤント (John Collins Bryant, 1821—1901) の簿記書の General Journal
- (3) リリブリッジ・ルーズ (D. R. Lillibridge, 1839—1869. F. F. Roose, 1855—?) の簿記書の Cash-Journal

#### VII 残高勘定の覚書

- (1) 残高勘定の伝統
- (2) 残高勘定の形骸化
- (3) 残高勘定の消滅

#### VIII 再び締切記入 (closing entry) について ——英米式決算法の発展——

- (1) 伝統的な元帳総括 (general balancing) の手順
- (2) 残高勘定の機能
- (3) closing entry は final entry である

#### IX 財務(諸)表への道

- (1) 勘定 (account) から財務表 (Financial Statement) へ——Bryant & Stratton's Counting House Book-Keeping の場合——
- (2) two Sheets or two Statements の機能
- (3) Financial (or Yearly) Statements と会計責任——Modern Commercial Bookkeeping, etc., by A. W. Dudley の場合——

#### X 第2試算表 (Second Trial Balance) について

#### XI “account” の覚書

#### XII 「財政状態」 (financial condition, or position) の覚書

- (1) 設 題
- (2) 財政状態とは何か

#### XIII C. C. Marsh の減価償却

#### XIV Ira Myhew の繰延資産

第2部 解題(太字の分を追補)

ミッチェル(William Mitchell)の簿記書(1796)  
ディルワース(Thomas Dilworth)の簿記書(1777 in London, 1803 in New York)  
**a Citizen of Philadelphia**の簿記書(1809)  
ジャクソン(William Jackson)の簿記書(1785 in Dublin, 1811 in New York)  
シェイス(B. Sheys)の簿記書(1818)  
ジェス(Zachariah Jess)の簿記書(1818)  
デビス(Benjamin Davies)の簿記書(1813, 2nd. ed., 1819)  
ベネット(James Bennett)の簿記書(1820)  
プレストン(Lyman Preston)の2種の簿記書(1829 ; 1851)  
マルシュ(C. C. Marsh)の初期の簿記書(1832)  
コルト(J. C. Colt)の簿記書(1837)  
フォスター(B. F. Foster)の簿記書(1836, 3rd. ed., 1839)  
プレストン(Lyman Preston)の簿記書(1831, another ed., 1842)  
ハリス(Nicholas Harris)の簿記書(1838, another ed., 1845)  
フォスター(B. W. Foster)の簿記書(1843, 4th. ed., 1845)  
クリテンデン(A. F. & S. W. Crittenden)の簿記書(1846)  
リッチモンド(Wellington H. Richmond)の簿記書(1846)  
カマー(G. N. Comer)の2種の簿記書(1846, 2nd. ed., 1847 ; 1869, 48th. ed., 1875)  
フルトン・イーストマン(Levi S. Fulton & Geo. W. Eastman)の簿記書(1848, 6th. ed., 1853)  
アダムス(D. Adams)の簿記書(1849, another ed., 1854)  
クリテンデン(S. W. Crittenden)の2

種の簿記書(1850 ; 1853)  
メイヒュー(Ira Myhew)の2種の簿記書(60th. ed., 1860 ; 1851, 1852)  
バルマー(Joseph H. Palmer)の簿記書(1853, 8th. ed., 1855)  
ブライヤント・ストラットン・バックカードの3部作とその新訂版(1860;1861;1863)(1878 ; 1881)  
ブライヤント・ストラットン・バックカードの簿記書(“Counting House” edition, 1863)  
ハナフォード・ペyson(L. B. Hanaford & J. W. Payson)の簿記書(1859, another ed., 1864)  
フェアバンクス(Lorenzo Fairbanks)の簿記書(1866)  
エルスワース(H. W. Ellsworth)の簿記書(1868)  
オル(William Orr)の簿記書(1872)  
フォルソム(Ezekiel Gilman Folsom)の簿記書(1873)  
メサーベイ(A. B. Meservey)の簿記書(1875)  
マルシュ(C. C. Marsh)の簿記書(improved ed., 1877)  
グッドウィン(Joseph Henry Goodwin)の簿記書(1881, 17th. ed., 1895)  
ギール(George P. Geer)の簿記書(1882)  
イートン・バーネット(A. H. Eaton & E. Burnett)の簿記書(1882)  
ブライヤント(John Collins Bryant)の簿記書(8th. ed., 1882)  
ウィリヤムス・ロジャース(L. L. Williams & F. E. Rogers)の簿記書(1882, revised ed., 1889)  
リブリッジ・ルーズ(D. R. Lillibridge & F. F. Roose)の簿記書(1886, 2nd. ed., 1888)  
ダドレー(A. W. Dudley)の簿記書(1903)  
スプラーグ(Charles Ezra Sprague)の簿記書(1907)

(参考資料) : ウェストン(William Weston)の簿記書(1754, 英書)

## まえがき

英書を中心とした書誌的・発展史的な調査研究として、この「経済論集」に補遺編をふくめ数回にわたって拙論を発表してきた。また、粗放な論考であったが『英米(加)古典簿記書の発展史的研究』(学習院学術研究叢書、第一法規刊、以下単に『研究』という)を公刊し、その要旨は、『体系近代会計学』(第6巻、中央経済社刊)にも収録してある。

『研究』でものべておいたが、わが国の簿記(教科)書に圧倒的な影響力をもったのは、英書ではなくむしろ米書であった。これには色々事情もあるが、最も明白な事実、時の大先進国の英国の、しかも、実務面に深く根をおろした彼の国のレベルの高い簿記書が、短時日で手っ取り早くこの技法を身につけようとした日本人に向かないということ、また当時の後進国の米国で、前世紀を通じ次第に洗練され完成の域に達してきた簿記の「テキスト」の定型につき、程度に応じて(例えば、初級・中級・上級)選択して取りこんだ方が便利であると考えられたのである。わが国で最初の簿記書『帳合之法』(明治6・7年)の原典が、Bryant and Stratton's Book-Keepingの3部作のうちの初級編“Common School Edition”であったことは、まさしく、象徴的な出来事である。

米書については、マイクロフィルム版ないしゼロックス版の便宜も少ないので、いきおいオリジナル版に依存せざるを得ず、今日の日本でこれらのオリジナル版の入手は必ずしも容易ではない。また、相当数の簿記書が集まらない事には、初めから話しにならない。『研究』(第3部「米(加)古典簿記書解題」)では、ミッチェルの簿記書(1796)をはじめとして、英書の米国版をふくむ26点の簿記書を検討してみた。その後若干の中断の期間があ

ったが、近時、まったく偶然の機会にめぐまれて、オリジナル版で24点の簿記書を新たに入手できた。合せて50点となり、ミッチェルを除きすべて前世紀の前後半にわたり通覧できる量と考えられた。本稿にまとめて御高覧いただくゆえんである。構成は、『研究』と同じく、第1部を「論説」として、いくつかの課題につき論述し、第2部を「解題」とした。また、第2部は、『研究』・第3部での「解題」を追補する形のものとしてある。

## 第1部 論 説

### 序論 ; 前世紀米国簿記書の系譜と課題

米国で最初の簿記書とみられているミッチェル(William Mitchell, 1763—1854)の簿記書(前掲, 1796)を除いて、また、元米国商人ブース(Benjamin Booth)の簿記書(前掲, 1789 in London)を論外として、米国古典簿記書は、おおむね前世紀に刊行されている。

全般的にみて圧倒的に、英国簿記書の影響下にあったことは、いうまでもないが、英国の場合が、まさにそうであったように、イタリア(古典)簿記を忠実に踏襲した Mair の系譜のものと、実務改良の Booth の系譜のもの、つまり伝統派の系譜と、これにするどく対立する実践派の系譜とがみられた。

前世紀の前半までは、唯一の例外をなすミッチェル簿記書がブースの系譜に属する複合仕訳帳制(ただし、月次総合仕訳帳制を併用せず。米国ではこのタイプが支配的となった)であったことを除けば、殆んどがイタリア簿記の古典的な3主要簿制(*tre libri principali*)であった。さもなくば、せいぜいのところ、現金出納(仕訳)帳を併用するいわゆる改良イタリア式の域を出ない。この時期の代表作ともみられるベネット (James Bennett,

1788—1863)の簿記書(前掲, 1820)をみても、日記帳の仕訳帳との合併ぐらいがせきの山である。クリテンデン(S. W. Crittenden, 1823—1844)の簿記書(1850)の場合も、この仕訳日記帳制である。また、コルト(J. C. Colt, 1810—1842)の有名な簿記書(前掲, 1837)にしても、その実務型の仕訳帳と自称するものは、現金・商品・諸口を区別した多桁式仕訳帳にすぎなかった。また、英書の米国版が幅をきかせていたのもこの時期の特色であった。例えば、ジャクソン(William Jackson)の簿記書(前掲, 1785 in Dublin, 1811 in New York)やディルワース(Thomas Dilworth)の簿記書(前掲, 1777 in London, 1803 in New York)がある。これら米国版の特色は、いずれもがイタリア(古典)簿記の系譜をひく、いわゆる“in the True Italian Form”で、英書のメヤー(John Mair, 1736)やウェブスター(Webster's Essay on Book-Keeping etc., 1715, 1721, 1726)あるいはDaniel Dowling(1765)の影響が大きい。

このほか、この時期には単式簿記(だけの)単行本が出現しているのも、いかにも、後進国の米国らしい特色のひとつである。

前世紀後半に入ると、はっきりしたいくつかの傾向を示すようになる。その一は、例えば、フォルソム(Ezekiel Gilman Folsom, 1821—1897)の簿記書(前掲, 1873)にみられるように、術学的とすらみられるほどの抽象化、あるいは周辺諸科学への過分な気くばり、あるいは、良くも悪くも「無理している」といった自己顕示、従って当然おこる実践からの乖離が顕著となる。かかる傾向は、ハットフィールド(H. R. Hatfield)のModern Accounting(1909)やその論文An Historical Defense of Bookkeeping(1924)でさえも著しい。とくに彼の論文などは、今再読してみても、ある種の「健気さ」や「いじらしさ」をすら感ずるほどである。挙句の果ては、有名なる彼がこうの、誰がどうの、といった

話しにもなる。時にその引用がまるで見当違いということすらあるが。その二は、この時期の簿記書が、その帳制の解説に、ひとつの型をととのえるに至ったことである。この影響は後世にかなり深刻であった。つまり、イタリア(ベニス)式(the True Italian Form)の3主要簿制を土台として、これに、改良イタリア式つまり普通仕訳帳と現金出納仕訳帳よりなる原初の複合仕訳帳制、多桁式仕訳帳制、現金式仕訳帳制、複合(分割)仕訳帳制(例えば、現金出納帳、仕入帳、売上帳、受取手形記入帳、支払手形記入帳、普通仕訳帳よりなる6分割法)を積み上げるように解説していくいわば重層的な帳制の解説である。スプラグ(Charles Ezra Sprague, 1842—1912)の簿記書(前掲, 1907)に至って伝票制が登場する。今日までの日本の簿記書は、伝統的にこの米書の定型をそのまま引きついできている。かかる諸傾向は、おおむね後進国の特色とみてよい。日米両国ともに。

米書においてひろく採用されるようになる複合仕訳帳制には、いみじくも最初の簿記書(William Mitchell, 1796)がまさしくこの帳制であったが、ふたつの型がある。その一は、元米国商人ブースの簿記書(1789)であり、その二は、ミッチェルの簿記書(1796)である。すなわち、前者では中間的な月次総合転記媒体(monthly journalizing)としての月次総合仕訳帳を併用する方式であり、後者では複合(分割)仕訳帳(複数)をdirect sources of postingとして直接元帳に転記する方式であった。米書では、圧倒的に後者の帳制となっていく。そして、そこにおこりうる危険、すなわちいわゆる重複転記(cross entry, double posting)を防止する種々の方法が提案されるようになる。

英書の場合では、伝統派・理論派のMair(正)に対する改革派・実践派のBooth(反)、両者を止揚するKelly(合)といったいわば弁証法的展開がみられた。前世紀後半にみら

れた米書の傾向は、英書の影響下にありながらも、次第に、英書を「定立」（正）とするその「反立」（反）としての性格を顕著にしていく。明治初年このかた強い米書の影響下に入ったわが国の簿記書が、そして今日の簿記書が、果してその「総合」（合）たり得るか。おそらく、将来への最重要な課題である。

## I 勘定分類にみられるダイナミズム

### (1) 伝統的な勘定分類とその問題点

英書にみられる伝統的な勘定分類は、Real（実在，実体），Personal（人名），Nominal（or Imaginary, Fictitious；名目，架空，擬制）の3分類にみられ、とくに18世紀に入ると、この分類方式は次第に普及し一般化する。英書の例でみると、マルコーム（Alexander Malcolm）の簿記書（*A Treatise of Book-keeping, or Merchants Accounts, etc.*, 1731. p. 40, p. 43, p. 49）などが、その典型である。そして、この勘定分類の伝統は、今日のわが国の簿記テキストにも引きつがれており、人名勘定を吸収した実在（体）勘定と名目勘定との2分類となっている。もともと、この3種の勘定分類は、例えばゴードン（W. Gordon）の簿記書（*The Universal Accountant, etc.*, 2nd ed., 1765. p. 17）やドーリング（D. Dowling）の簿記書（*A Compleat System of Italian Book-Keeping, etc.*, 1765. p. 20）がいみじくもものべているように、「借方（主）Debtor、貸方（主）Creditorの用語の本来の性質と用法（the Nature and Use）」に由来する勘定分類、つまり、擬人説を基調とした勘定分類であり、人名（Personal）とそれ以外のもの（もしくは非人名 Impersonal）とを区分し、後者につき、実在（Real）と名目・架空・擬制（Nominal, Imaginary, Fictitious）を再区分（sub-divided）したものである。このことは、明確に認識すべきで

ある。

前掲の3分類における Personal accounts（人名諸勘定）とは、対人的債権（資産）・債務（負債）を取引先の人名で区別して開設した諸勘定であり、さらに、資本（主）勘定も、資本主の人名にそくしてこの勘定の範疇に入ることがある。この人名勘定の範疇に、資産の一部と負債および資本（主）がふくまれることに注目されたい。この辺の理解があいまいであると、“Real” 実在（体）という言葉の意味が、いまひとつぴんとこない。例えば、今日、実在（体）勘定と名目勘定とに2分類している場合、売掛金のような資産、買掛金のような負債あるいは資本金勘定を、悉く「実在」“Real” 勘定であるといってみても、どうも文字通りリアルでないのである。簿記上の「資本」は、一個の抽象概念であるなぞと簿記テキストで解説しているものだから、そして、資本金勘定が Real account であるということになると、「抽象的なものに対する実在」すなわちリアルという観点からいって、矛盾といおうか、自家撞着といおうか、まるで收拾がつかぬ。英書の伝統では、資本（主）勘定は、人名勘定に入れるか、さもなくば、名目勘定に入れている。筆者（久野）は、今日の内外の簿記テキストにおける実在・名目の2分類につき難癖をつけているわけではない。もともと、実在・人名・名目の3分類つまり、擬人説を基調とした伝統的な勘定分類に由来することを指摘したいただけである。

さて、しからは、今日のいわゆる2分類につき、Real とは何か、Nominal とは何か、を調べてみよう。便宜上、ここでは著名な某会計学辞典から引用する。すなわちいう。

「企業財産の実体」・「企業財産の実在する価値」を Real accounts という。

「企業財産の実体の変化の投影」・「企業財産の実体価値が増減した事実の経路もしくは原因となる事実の投影した影像」を Nominal accounts という。

実在(体)勘定には、負債も資本もふくまれると思うが(人名勘定という分類をしないのだから当然に)これらが「企業財産の実体」とは、どうにもうなずけない気がする。さらに、名目勘定の説明に当って、「投影」とか「投影した影像」などと抽象的ないし比喩的(注、物事の説明に他の物事を借りて表現すること)なことをいってもらっても、さっぱり見当がつかぬ。

しょせん、擬人説を土台にした勘定分類のもつ限界である。

**Real accounts** すなわち貸借対照表勘定、**Nominal accounts** すなわち損益計算書勘定と速断するのは、厳密には正確ではない。

## (2) 伝統的な勘定分類からの離脱

前出の3分類にしても、2分類にしても、**Real**に対応する **Fictitious, Imaginary or Nominal** という対立概念がとくに目立つ。

実に対する虚、本ものに対する紛いもの、存在に対する架空(虚構)、本然に対する仮託、この種の意味合が、**Real**と**Nominal**には、常につきまとうように思える。

つまり、名目勘定(**Nominal accounts**)は、つづまるところ「世を忍ぶ仮の姿」といった気分である。この種の伝統的な勘定分類には、イタリア簿記以来の商人簿記の動態観(ダイナミズム)の伝統とは本質的に相容れないような要素をふくんでいるように思う。

商品勘定および商品勘定の棚卸法(**inventorization**)の原理を拡大・応用した備品・不動産・船舶・有価証券等の諸勘定を、「財産のリアル」という角度から把握するという認識は、商人簿記の伝統には存在しないと考える。元帳面におけるこれら諸勘定口座の借方(左側頁)は、“input cost”であり、その貸方(右側頁)は、“output proceed”である。かかる記帳の目的は、これら諸勘定に生じている損益の計算にある。商品・不動産・船舶・有価証券等の「財産の管理」ないし「財産

価値の計算」といった認識は、皆無もしくは極めて稀薄である。

以上の観点から、イートン・バーネットの簿記書(A. H. Eaton & E. Barnett, 1882)やダドレーの簿記書(A. W. Dudley, 1903)にみられる次掲のような勘定分類は、とくに注目される。

(A. H. Eaton & E. Barnett's Book-keeping embracing the Theory and Practice of Accounts, etc., 1882, p. 27)

## CLASSIFICATION OF ACCOUNTS.

There are three principal classes of accounts, viz., Proprietary, Loss and Gain, and Resource and Liability Accounts.

I. *Proprietary Accounts* are those kept under the name or names of the owner or owners of the business, for the purpose of showing his or their financial condition.

II. *Loss and Gain Accounts* are those whose differences represent so much loss or gain to the business. This class includes—

1. All speculative property accounts, that is, all accounts of property bought and sold, such as Merchandise, Real Estate, Ships, Stocks, and speculations of all kinds.

2. Accounts of incidental losses and gains, such as Expenses, Interest, Commission, Insurance, &c.

III. *Resource and Liability Accounts* are those whose balance are resources or liabilities. This class includes all personal accounts, Cash, Bills Receivable, Bills Payable, and others of a similar nature.

(Modern Commercial Bookkeeping, etc., by A.W. Dudley, 1903, p. 28)

OUTLINE OF ACCOUNTS

ACCOUNTS	PRINCIPAL CLASSES	SUB-CLASSES	EXAMPLES
}	1. STOCK OR INVESTMENT		{ Proprietor or Partners.
	2. SPECULATIVE	{ Representative { Property	{ Expense, Int. & Dis., Freight, Cartage, Storage, Commission, Insurance, Advertising, etc. { Mdse., Fixtures, Horses and Wagons, Real Estate, Bank Stock, R. R. Stock, U. S. Bonds, Shipments, etc.
	3. NON-SPECULATIVE	{ Personal { Real	{ Persons, Firms, Corporations. { Cash, Bills Rec., Bills Pay., Mtgs. Rec., Mtgs. Pay., etc.
	4. LOSS & GAIN		

両書にみられる共通した特色は、商品勘定等に代表されるいわゆる “speculative” property accounts を、とくにイートン・バーネットの場合にみるように、Loss and Gain Accounts の範疇にふくめている点である。また、ダドレーの場合では、とくに、A Speculative accounts は損益を示し、損益勘定に締切られ (shows a loss or a gain, and is closed into Loss & Gain.), A Non-speculative accounts は損益を期するものでなく、残高勘定に締切られる (is one from which no loss or gain is expected. It is closed “To” or “By Balance.”), とのべている。

前世紀の類書にはあまり例のない勘定分類における動態観 (ダイナミズム) をみることができ。

このような勘定分類への第一歩は、例えばハナフォード・ペyson (L. B. Hanaford & J. W. Payson) の簿記書 (1864) の勘定分類にみられる Real Accounts, の分裂である。すなわち、彼等の場合 (p.49) では、Real, Personal, Nominal (Fictitious) の伝統的な勘定分類に対して、Property, Speculating Property, Personal, Fictitious (or

Representative) としたのである。商品勘定および「棚卸法」を適用する株式、公社債、家屋、土地、船舶等の諸勘定は、Speculating Property Accounts の範疇に入れたのである。

ブライヤント (J. C. Bryant) の簿記書 (Bryant's New Book-Keeping Elementary and Practical, etc., 8th, ed., 1882, p.30) にみられる, “Classification of Accounts” も、おおむね同主旨である。すなわち、彼の場合では、勘定を2分して、資産・負債勘定と損益勘定としているが、前者には現金、受取 (支払) 手形および人名諸勘定をふくませ、商品や不動産 (Merchandise, Real Estate) すなわち棚卸法を適用する資産は、後者すなわち損益勘定にふくませている。

Bryant & Stratton's Counting House Book-keeping の新旧両版を比較しても、伝統的勘定分類からの離脱がみられる。新版の The New Bryant & Stratton Counting House Book-keeping : etc., By S. S. Parkard and H. B. Bryant, 1878. は、その「まえがき」で勘定分類のもつ重要性を強調するとともに、旧版 (1863) で “Real” と “Representative (Nominal)” とに区分した方式を新版で改訂したことを明らかにし、その理

由につき、次のようにいう。

“For it may be truthfully said that all accounts are *real* and all, *representative*.”  
(p. iv)

彼等の場合、新版では、“Primary” accounts→資産・負債→財政状態→結果、“Secondary” accounts→収益・損費→事業活動→原因、として系統分類している。「財政(務)」(Finance)と「事業活動」(Business)という機能が注目される。第5章(p. 62)では、前者を Accounts of Finance、後者を Accounts of Business と称している。商品勘定や不動産勘定は、分類上は後者の範疇に入れられる。

この分類と名称とは、損益計算書・貸借対照表に相当する計表にも、そっくりそのまま引続がれている。39頁から Business Statement と Financial Statement とを引用して掲示する。ただし、この両計表が、いわゆる財務諸表なのか、それとも、簿記の領域の損益勘定・残高勘定に相当するものか、については、問題がのこる。事実、この両者は元帳面の末尾に掲示されている。

1. BUSINESS STATEMENT.

	LOSSES.	GAINS.
Merchandise . . . . .		40
Real Estate . . . . .		25
N. Y. C. R. R. Stock . . . . .		400
Expense . . . . .	108 75	
Commission . . . . .		300
Interest . . . . .		12 78
<i>Net Gain</i> . . . . .	600 03	
	828 78	828 78

2. FINANCIAL STATEMENT.

	RESOURCES, IN FULL.	
<i>Property from Estimates.</i>		
Merchandise . . . . .	700	
Real Estate . . . . .	10600	
Railroad Stock . . . . .	4500	
<i>From Ledger Accounts.</i>		
Cash . . . . .	510 03	
Commercial Bank . . . . .	6530	
James Park . . . . .	600	
A. Wakeman . . . . .	170	
Robert Johnson . . . . .		750
<i>Net Worth</i> . . . . .		22710 03
	23433 03	23433 03

Corroboration.

Net worth at beginning (as per Stock account) . . . . .	\$22031
Net gain, (as per Business Statement) . . . . .	600 03
Net worth at the close (as per Financial Statement) . . . . .	\$22710 03

とくに、勘定を Accounts of Finance と Accounts of Business (より正確に言えば Accounts of Business Operation) とに分類す

るという考え方は、ワルプ (E. Walb) の支払系列勘定; 現金, 貸付金, 売掛金, 受取手形, 買掛金, 支払手形, 借入金, 資本金等。給付系列勘定; 商品, 備金, 建物, 手数料, 利息, 運賃等。とする勘定分類と軌を一にするものであり、擬人説を基調とした伝統的勘定分類からの離脱であるのみならず、資本等式や貸借対照表等式を基調とした静態的・二元的勘定分類あるいは持分説を基調とした二元的勘定分類をも一挙に克服した動態的な勘定分類の発想である。

資本等式による勘定分類ならば、財産勘定と資本勘定に大別し、前者につき積極財産(資産)勘定と消極財産(負債)勘定を区別し、後者につき資本(主)勘定と損益勘定を区別することになる。貸借対照表等式による勘定分類ならば、財産(資産)勘定と資本勘定に大別し、後者につき他人資本(負債)勘定と自己資本勘定を区別し、さらに自己資本勘定につき資本(主)勘定と損益勘定を区別することになる。持分(権)説では、資産勘定と持分勘定に大別し、後者につき他人持分勘定と自己持分勘定を区別することになる。自己持分勘定の再分類は貸借対照表等式(説)に準ずる。

(3) 勘定学説と勘定分類

前項までに、くりかえしのべたが、伝統的な Real, Personal, Nominal (or, Imaginary, Fictitious) の3勘定分類は、英国伝来の擬人説にもとづくものである。古典的英国簿記書の中にあつて、勘定学説として擬人説をとらず、資本等式説をとる場合ではどうなるのか、これは甚だ興味ある命題である。前項の末尾に、資本等式説その他の場合につき、まさにあるべき姿の勘定分類を示したが、現実の簿記書(英書)では、果してどうなのか。いささか、わき道にそれるが、参考のために紹介してみよう。詳細は別の機会にのべる。

フルトン (J. W. Fulton, 1799 & 1800.



『研究』を参照)の場合 (p. 11) では、Real accounts に対立する Ideal accounts を示している。人名勘定は前者に入っている。この Real vs. Ideal という発想は、「財産の実体(部分の構成)」対「抽象(計算価値)」ということで、明らかに、資本等式説(に近い)ものである。損益勘定は資本勘定 (Ideal accounts) から派生したもの (branched out) としている。

セジャー (J. Sedger, 1807. 『研究』を参照) の場合 (p. 19) なども、擬人説を採用しておらず、伝統的な3勘定分類も採用していない。

明確な資本等式説の完成者ともみるべきクロンヘルム (F. W. Cronhelm, 1818. 『研究』を参照) の場合 (p. 27) では、伝統的な3勘定分類を痛烈に批判するとともに、独自の勘定分類を次のように提示している。

The division of Accounts into Personal, Real, and Fictitious, is one of the most ludicrous that ever enlivened the gravity of the scientific page. Are the Personal accounts unreal? or rather, are they something neither real nor fictitious? Is the Stock, or proprietor's account, a mere fiction? Are the accounts of Profit and Loss of the same romantic nature? In cases of loss it would be some consolation to consider them in this aerial and poetical light; but when a balance of profit occurs, the pleasure of the transfer would not be much heightened by this view of the subject. The proprietor may reasonably expect to find something *substantial* in his Stock Account; but the professors of Book-keeping, faithful to the Berkleian theory, gravely assure him that it is all fictitious and imaginary.

After rejecting the old classification, a new one may be expected; and we will therefore sketch a substitute in the follow-

ing tabular view of

ACCOUNTS,				
CLASSES,	DIVISIONS,	SUBDIVISIONS,		
	1. Personal..			
1. PARTS OF PROPERTY,	2. Money.....	1. Cash.		
		2. Bills Payable.		
		3. Bills Receivable.		
	3. Goods.....	1. Floating Merchandise.		
		2. Immoveables.		
		3. Conventional Funds.		
2. WHOLE PROPERTY,	BRANCHES,	RAMIFICATIONS,		
STOCK.....	1. Profit.....	} { ..... 1. Commission.		
			2. Loss .....	} { ..... 2. Interest, &c.
			3. Private Account	

動態的な勘定分類という事なら、収支系列勘定 (現金、売掛金、貸付金、受取手形、支払手形、買掛金、借入金、資本金等) と損益系列勘定 (商品、備品、建物、手数料、利息等) となろう。スガンチーニ (G. Sganzi) のいう統制 (貨幣) 系列勘定 *Kontrollkonten*, *G. Konten* と計算系列勘定 *Rechnungskonten*, あるいは、ワルプ (E. Walb) のいう支払系列勘定 *Konten der Zahlungsreihe* と給付系列勘定 *Konten der Leistungsreihe*, これらの分類がその典型である。米書の「財政 (Finacial) 勘定」と「事業活動 (Business Operation) 勘定」の2分類は、これらと軌を一にする。

## II 単式簿記の覚書

### (1) 設題

「単式簿記」は、bookkeeping by single entry, or single entry bookkeeping の「訳語」である。この基本的認識を原点としたい。このことは、とくにわが国の簿記テキストの現状にてらして重要だと思ふ。

単式簿記という「略式」ないし粗雑な記帳技術から出発して、やがて「本式」ないし複雑高度な複式簿記に発展してきた、のではない。いわゆる簿記は、もともと複式簿記なのである。従って、古くから複式簿記のことを、

ベニス式 (*il costume di Venetia*) ないしイタリア式 (*a la Italiaensche maniere, a la maniere d' Italie*) と称した例はあるが、とくに「複式」という形容詞を冠す例は、時代も大部あとになってからである。簿記書名として “*by double entry*” といった表現を用いた最初の事例については、別稿 (1980年11月、『経済論集』第17巻第2号) でのべた。また、19世紀前半の米書で、単式簿記だけの単行本がみられることは、すでに、序論でものべたが、事例としては、第2部で紹介する *A Course of Book-Keeping, etc.* (匿名 1809), *A Practical System of Book-Keeping, etc.* (B. W. Foster, 1845), *Adam's Book-Keeping etc.* (D. Adams, 1849) 等がある。

*single entry, double entry* という用語は、おそらく18世紀に入ってから、おおむね同時的・並立的に出現したものとみてよい。

わが国の簿記テキストの冒頭に出てくる千篇一律おなじみの単式簿記の定義につきみてみよう。ここでは高名な某博士の簿記書による。

「単式簿記はたとえば現金(預金)出納帳を用いて一方的な記入を行なうにすぎず、複式簿記のような秩序的な記録が行なわれない」と。

「たとえば現金(預金)出納帳を用いて」とあるが、この事実が、次の「一方的な記入」とどう結びつくのか、そもそも「一方的」とは何か。あるいは、「複式簿記のような秩序的な記録」とあるが、秩序的というのは記帳の技術のもつ意味なのか、それとも記録の内容におけるそれなのか、一向に判然としない。また、「……のような」とは一体何の意味なのか。この簿記書の全体をみれば、自ら判明するというのなら、前もって定義めいたものを書かぬがよかろう。書いたところで読者には、不得要領である。せいぜいわかることといたら、「家計簿や小遣帳のような現金出納簿は単式簿記」ぐらいの極めて不正確な理

解に止まるであろう。

著名な某会計学辞典でみてみよう。すなわちいう。

簿記の1形態であり、その本質については計算対象の側から(先の定義でいえば「現金・預金」と、計算様式の側から(先の定義でいえば「一方的な記入」と)との2つの立場がある。筆者(辞典の)は、計算対象の側からする説を排して、単式簿記の本質を複記式記入にもとづく計算様式をもたないことに求める。さらに、単式簿記の内容について、多種多様であるが、「イタリア式単式商業簿記」についてみれば、現金出納帳と日記帳を原始簿とし、転記簿である元帳に関係事項だけを転記する。とのべている。ついで決算における棚卸に言及し、資産負債表の調製にもふれている。

仲々、堂々たる論旨である。

以下、率直に私見をのべる。「イタリア式単式商業簿記」というききなれない用語も出てくるが、*bookkeeping by single entry* 「単式簿記」は、イタリア式(ベニス式)簿記を、いわば土台にして、つまり、伝統的な簿記(複式簿記)での符号・記号・用語、帳簿の種類や様式・用語等をそっくりそのまま踏襲・援用して、主として人名諸勘定による債権と債務ないしこれに加えて現金、これらの増減を継続的に記録しようとしているのである。この場合、いうまでもなく、元帳面に開設される人名諸勘定口座への記帳(複式簿記の用語でいう「転記」)は、*double entry* ではなく *single entry* となる。単式簿記の場合でも、複式簿記での借方と貸方といった符号、日記帳や元帳といった帳簿名や様式等、あるいは先の転記(*posting*)といった用語と手続、これ等をそっくりそのまま援用している。

(2) 単式簿記の展開過程；資本勘定と純損益

第1段階；複式簿記（より正確に言えばベニス式簿記）を土台にして工夫された最も素朴な単式簿記は（それだけに最も本源的なものといえる）；原始簿（the book of original entry）として日記帳（Day Book）を用いて取引の事実を発生順に記録し、転記簿として元帳（Ledger）を用い、元帳面には人名諸勘定口座を開設して、債権と債務の明細・増減を記録する。この元帳面各口座への記入は、文字通りの単式・単記入（single entry）となる。

期末に元帳の末尾に残高勘定口座を開設し、人名諸勘定の借方残高を残高勘定の借方に振替え、人名諸勘定の貸方残高を残高勘定の貸方に振替える。かくして、元帳面の残高勘定ないしこの勘定の内容を独立した一表にまとめた Balance Sheet は、債権と債務の一覧表となる。まさに「貸借の対照表」である。

第2段階；この段階への展開は、第2部で紹介する a Citizen of Philadelphia の簿記書（A Course of Book-Keeping, etc., 1809.）に典型的にみられる。

この簿記書は、もともと、ハットン(Charles Hutton) の簿記書(A Complete Treatise on Practial Arithmetic, and Book-Keeping both Single and Double Entry. London) を種本としたものである。

ハットンの場合は、まさしく第1段階に止まっているが、a Citizen of Philadelphia の簿記書では、現金その他の財産(Cash and other effects) を実地棚卸によって確認し、元帳面には残高勘定のほかに資本勘定口座(STOCK)を開設して、その借方に人名諸勘定(債務)、その貸方に棚卸による現金、その他の資産および人名諸勘定(債権)をそれぞれ記帳する。この勘定の net (差引) を, my neat Worth (正味資本勘定) として借方に記

帳する。

第3段階；この段階への展開は、第2部で紹介するフォスター(B. Wood Foster) の簿記書(A Practical System of Book-Keeping by Single Entry, etc., Fourth Edition, Boston : 1845.) に典型的にみられる。

日記帳での開始記帳は、財産目録にもとづき、現金、商品、人名諸勘定、および差引資本(Net Capital)にはじまる。期中は、原始簿として日記帳と現金出納帳とを用い、転記簿として元帳を用いる。日記帳に人名諸勘定と受取(支払)手形勘定による債権・債務を発生順に記帳し、元帳に人名諸勘定口座と受取(支払)手形勘定口座を開設して単記入により転記する。期末に、元帳の末尾に(もしくは別表として) Balance Sheet を開設(調製)する。残高勘定に相当するものである。

この Balance Sheet の借方側には、元帳面の人名諸勘定と受取手形勘定の借方残高を、その貸方側には、元帳面の人名諸勘定と支払手形勘定の貸方残高を、それぞれ振替える。さらに、商品の在高(棚卸高)と現金の手許在高を借方側に追掲する。貸借の差額は期末資本在 high (Net Capital) となる。これと期

4				LEGER.			
Dr.		BALANCE SHEET.		Cr.			
1842.				1842.			
Oct.31	Bals. due me:			Oct.31	Bals. against me:		
	Edw. Brown, . 2	18 75			James Rogers, . 1	50 00	
	E. D. Rice, . 2	9 00			J. B. Allen, . 2	3 42	
	F. H. Demond, 2	14 18			Bills Payable, . 3	208 00	
	G. Frost, . . 3	142 67				261 42	
	H. Kimball, . 3	32 45			Amt. of capital,		
	J. H. Foster, . 3	43 40			Oct. 1, 1842,	2700 00	
	James Johnson, 3	9 30			Net gain to date,	267 24	
	Bills Rec., . . 3	152 24					
		422 08					
	Md-c. on hand,	1317 07					
	Cash " "	1489 51					
		3228 66					3228 66
	Gross amount of capital,						
	Oct. 31, 1842,	3228 66					
	" " debts I owe,	261 42					
	Net capital, Oct. 31, 1842,	2967 24					
	" " " 1, "	2700 00					
	Net gain, . . . . .	267 24					

首の資本在高の差額が当期純損益額となる。元帳面の末尾に開設された Balance Sheet の実況を前頁下段に紹介する。

第2段階と比較して、それと軌を一にするものではあるが、「財産法による純損益額の測定」という最終的なまとまりがよくできていると思う。

### (3) 再び「単式簿記」の定義について

わが国の簿記テキストに比較的多くみられるものに、「複式簿記以外のものを単式簿記という」とする定義(?)がある。通説(に近い)とみてもよからう。

この「以外のもの」という極端に包摂的な定義(というか範疇というか)は、「単式簿記は多種多様である」とする見解とも軌を一にするが、筆者(久野)のみるところでは、単式簿記は、必ずしも、そんなに多種多様というわけでもないし、とくに「以外のもの」という粗雑かつ無神経なきめつけ方には賛成しかねる。

そもそも、単式・単記入(single entry)という概念は、複式・複記入(double entry)に対していうわけで、後者がその土台なのである。くりかえしているが、単式簿記から出発して複式簿記へ工夫・発達したのではなく、むしろ、伝統的なベニス式簿記を土台にして単式簿記が工夫されたのであり、既述のように、単式簿記では、複式簿記での符(記)号、用語、記帳技術、帳簿(その種類や名称、様式等)等が多く踏襲されているのである。そこで、筆者(久野)は、次のように定義したい。

「単式簿記とは、複式簿記の元帳面での人名諸勘定口座を活用し、これに単記入(single entry)することによって債権・債務の明細を記録することから出発し、さらに、現金出納帳による現金勘定の記録を追加し、すすんでは、棚卸法(財産目録法)を全面的に適用することによってその他の資産・負債の

在高を確定し、ついに差引(net)概念ないし計算価値としての資本勘定(Net Capital)を確立するに至った簿記である。この簿記では、複式簿記の符(記)号、用語、記帳技術、帳簿(その種類や名称、様式等)等が多く援用されている」

## Ⅲ 仕訳帳金額欄の諸形式

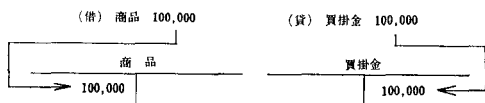
### (1) 設題

複式・複記入(double entry)を、“twice in the Journal and twice in the Ledger.”と考えることは、誤解であり、そのよってきたるところは、或種の錯覚である。このテーマについては、すでに別稿(『経済論集』、第16巻第1号、1979年9月)でのべた。本稿では、その要旨を補足して概説するとともに、前世紀の米国簿記書の中には、とくに仕訳帳の金額欄の諸形式について強い関心をよせるものがあるので紹介しておこうと思う。

“twice in the Ledger”とするのは、いうまでもなく、元帳面の勘定口座で、A勘定の借方の記入とB勘定の貸方の記入とが複記入されることからきており、まさに「複式」の「簿記」(double entry bookkeeping)たるゆえである。しかし、“twice in the Ledger”の前提として、仕訳帳面の金額欄で貸借二欄を区別し、“twice in the Journal”とせねばならぬという必然性もなければその必要性もない。仕訳帳の機能は、A勘定が借方であり、B勘定が貸方であるという事実と、転記金額(この場合、勿論、貸借に等額)を示せば足りる。仕訳帳面の金額欄で貸借を二欄に区別し、等額を対置・記入してもとくに意味もなければ効果もない。要するに無駄である。

現在の簿記テキスト(内外)で、殆ど例外なく仕訳帳の金額欄で貸借二欄を区別する定型が確立し、かつ、何らの疑問も生じていないのはなぜなのか。それはおそらく、仕訳の解説と練習にはじまり、元帳面の記帳に至

る一連の型にはまった記述を、簿記書から簿記書へと慢然と引きついできたことによる。いわば互いにコピーし合っているような傾向が認められるからである。とくに、簿記書に多くみられる次のような解説がある。商品を掛で購入したような場合ではこうなる。



左右に対置した仕訳の解説と練習の上記のような定型が、仕訳帳における金額欄を開設する場合に、貸借二欄を、摘要欄の右側に並立させるか、あるいは、摘要欄を中央において左右に分割して対置させるか、あるいはまた、金額欄を貸借に区別した元祖(?)といわれるジョーンズ (Edward T. Jones, Jones's English System of Book-Keeping, 1796) の場合のように、中央から左右を区別して、摘要欄と金額欄とを、貸借に対置させるか、このようなさまざまな型を生み出すことになるのである。

仕訳の解説と練習の場合に、次のような形をとったらどうなるであろうか。

(借) 商品 // (貸) 買掛金 100,000

このような場合、仕訳帳の金額欄を貸借二欄に区別する様式があえてとられるであろうか。否である。そして、かかる仕訳の定型は、ベニス式簿記の本来の姿でもあった。例の *Per cassa* (現金) // *A caudal* (資本金) ××× である。いうまでもなく、古典的・伝統的な仕訳帳の様式では、いずれもが、当然のことながら、金額欄は一欄式であった。

(2) 米書にみられる金額欄への関心

ここでは、とくに、ハリス (Nicholas Harris, 1810—1879) の簿記書 (A Complete System of Practical Book-Keeping, etc., 1838) とカマー (G. N. Comer, 1816—1877)

の簿記書 (A Simple Method of Keeping Books, etc., 1846) をあげておく。

彼等の仕訳帳の雛形では、多少とも整理の仕方にまずい点もあるので、適当な取引例を筆者 (久野) なりに作りなおし、かつ、多少のバリエーションを追加して各種の形式を整理して示そう。

[取引例]

某年 1 月 1 日 現金 5,000 円、商品 2,000 円をもって開業。

1 月 2 日 備品 1,000 円を現金で購入する。

(Form 1)

仕訳帳

月	年日	摘要	元頁	金額
1	1	諸口 (資本金)	3	7,000
		(現金) 5,000	1	
		(商品) 2,000	2	
2		(備品)	4	1,000
		(現金)	1	

(Form 2)

仕訳帳

月	年日	摘要	元頁	内訳	金額
1	1	諸口 (資本金)	3	5,000	7,000
		(現金)	1		
		(商品)	2	2,000	
2		(備品)	4	1,000	
		(現金)	1		

(Form 3)

仕訳帳

月	年日	摘要	元頁	借方	貸方
1	1	諸口 (資本金)	3	5,000	7,000
		(現金)	1		
		(商品)	2	2,000	
2		(備品)	4	1,000	
		(現金)	1		

(Form 4)

仕訳帳

金額	元頁	摘要	元頁	金額
5,000	1	1 月 1 日	3	7,000
		諸口 (資本金)		
2,000	2	(現金)		
		(商品)		
1,000	4	1 月 2 日	1	1,000
		(備品)		
		(現金)		

(Form 5)

(借方勘定)					仕 訳 帳					(貸方勘定)				
月	年	元	摘 要	金 額	月	年	元	摘 要	金 額					
1	1	1	(現金)	5,000	1	1	3	(資本金)	7,000					
		2	(商品)	2,000										
		4	(備品)	1,000			1	(現金)	1,000					

(Form 6)

月 日		摘 要	元 貨	借 口	現 金	商 品	何 の	何 の
			借方	貸方	借方	貸方	借方	貸方
1	1	借口 (資本金)			7,000			
		(現金)			5,000			
		(商品)				2,000		
2		(備品)						
		(現金)	1,000				1,000	

(Form 7)

仕 訳 帳								
借口	商品	現金	元 貨	摘 要	元 貨	現金	商品	借口
		5,000		1月1日 借口 (資本金)	3			7,000
	2,000			1 (現金)				
				2 (商品)				
1,000				1月2日 (備品)				
				(現金)	1	1,000		

(Form 1)……古典的・伝統的なベニス式簿記の仕訳帳。

(Form 2)……内訳欄を特設した様式で、本質的には金額一欄式である。

(Form 3)……現在のテキストの定型。「並立式」と名づける人もある。

(Form 4)……金額欄を貸借二欄に区別する点では、Form 3と同じ。「分割式」と名づける人もある。

(Form 5)……ジョーンズ式。

(Form 6,7)……いうまでもなく、多桁式。

#### Ⅳ 米書にみられる「簿記小史」

別著の『研究』で、簿記史を取扱っている古典簿記文献として、次掲のものを紹介しておいた。

1801. Dr. Patrick Kelly, *The Elements of Book-Keeping, etc.*, Preface : A short History of Book-keeping (pp. iv~x)

1818. F. W. Cronhelm, *Double Entry by Single, etc.*, Sketch of The Progress of Book-Keeping (pp. x~xiv)

1852. B. F. Foster, *The Origin and Progress of Book-Keeping.*

ケリーとクロンヘルムの場合は、簿記書の冒頭に、「小史」ないし「素描」という形で概説されている。とくにケリーの影響は、米国版が刊行されたこともあって、米書の場合に大きくあらわれているように思える。

米書での例を、次の簿記書にみる事ができる。

1882. George P. Geer, *Geer's Analysis of the Science of Accounts, etc.*, (pp.8~18)

1886. D. R. Lillibridge & F. F. Roose, *Modern Book-Keeping, etc.* (p.10)

この両書の場合、文字通りの「素描」であり、かつ、英書にない特色としては、とくに、ギールの場合は顕著であるが、気宇宏大というか大風呂敷というか、あるいは、百科事典的というか、術学的というか、要するに、簿記史ないし簿記書誌的な記述が通り一辺でかつ僅少、その他は、大部分が文明史の受け売り、例えば、文字の起源、記数法、あるいは政治、哲学、はては航海等々ような内容である。詳細は、第2部の「解題」を参照されたい。

前世紀の80年代ともなると、米書でも簿記史に関する記述の萌芽がみられるのだが、資料足りず、力また足りず、といった感が深い。米書でのかかる歴史研究への方向に大きな刺戟となったのは、おそらく、先出のケリー (Dr. Patrick Kelly) であろうと推定される。後に掲示する Lillibridge & Roose の簿記書の引用文中にも Kelly の名がみえているし、グリーン (Wilmer L. Green) の *History and Survey of Accountancy, 1930* (p. 130)によると、ケリーの簿記書はフィラデルフィアでも米国版が刊行されたという。この米国版を通じて前世紀の米書に与えた影響は

大きかったに違いない。

そこで、ケリーの前掲書で取扱っている簿記書の著者を紹介してみよう。簿記のローマ起源説との関連で Simon Stevin を論じ、ついで Lucas de Burgo (1495)、勿論これは Luca Pacioli (1494) である。出典は、注記によると、*La Science des Negocians et Teneurs de Livres*, par M. De la Porte, p. 12 Paris, 1753. とあり、一部が引用されている。1495年という誤りは、De la Porte に由来する。Hugh Oldcastle (1543), John Mellis (1588), James Peele (1569), John Collins (1652)、ただしこれは1653年の誤りである。John Mair (*Bookkeeping Methodiz'd*, 1736 : *Bookkeeping Moderniz'd* 1768)、このあと、名前だけだが、Dodson, Weston, Donn, Hutton, Hamilton, Gordon, Dowling, Jackson を列挙している。ついで、Benjamin Booth (1789), Jones's *English-System* (1796)、このジョーンズには相当の紙幅を割いている。

また、クロンヘルムの場合では、Pacioli (1495)、これも1年違っている。J. Gottlieb (1531), H. Oldcastle (1543), S. Stevin (1602), J. Mair (1736), B. Booth (1789), Dr. Kelly (1801) および例のジョーンズの英国式をあげている。ケリーの名があがっていることに注目されたい。

以下に、Lillibridge & Roose の一部を引用し簡単に論評を加えておこう。

The origin of book-keeping is very obscure; its discovery would be of little importance. There can be no doubt but that it was, at least, moderately used by the Ancients. Cicero managed to school his son at Athens without remitting money, from which we infer that some kind of book-keeping was used. It was announced by Kelly, in his book on this subject in 1805, "Lucas di Borgo prepared and pub-

lished a treatise on this science in 1495 at Venice". From this we would draw the conclusion that book-keeping was then used to a considerable extent. A large number of other books were soon published, but were so complex as to render them useless. It was not long before a demand arose for something practical, which was met, to some extent, by the publication of a number of treatises by business men, which superseded those prepared by theoretical authors. Yet the fundamental principles of book-keeping were so completely covered up with rules and explanations (a fault which still exists in too many books) that but little advancement was made in this study.

E. G. Jones wrote a book at Bristol in 1796, in which he devised a means "for keeping books correctly." It was not long before other books were published, showing considerable improvement in book-keeping; among them were those of Benjamin Booth, in 1879; Hamilton in 1820; Jones' second edition in 1821; C. Morrison in 1823, and W. & R. Chambers, of Edinburg. A number of them were elementary books arranged for schools, and illustrated the fundamental principle of book-keeping by a model set adapted to foreign trade.

(イ) 簿記のローマ起源説との関連で、キケロ (Marcus Tullius Cicero, 106—43 B.C.) の名がでてくるが、ここらあたりは、むしろ御愛嬌といったところであろうか。

(ロ) Kelly の名前とともに、"Lucas di Borgo prepared and published a treatise on this science in 1495 at Venice." という引用文がでてくる。Kelly の原典では、"It was published in the Italian language at

Venice, about the year 1495, by Lucas de Burgo,” とある。Lucas di Borgo でも Lucas de Burgo, でもよいが, とにかく, 周知のように, Borgo, Burgo は町(村)という意味であるから, 正しく書くなら, Fra Luca Pacioli de Burgo San Sepolcro である。Fra は聖職者をあらわし, Burgo San Sepolcro は「聖墓の村」ということになろう。三人の巡礼僧がキリストの骨の一部をこの地に埋めたとする口碑・伝説に由来する。パチオリの出身地名である。日本の簿記書にも, 以前には, ブルゴー氏云々という記述がよくみられた。

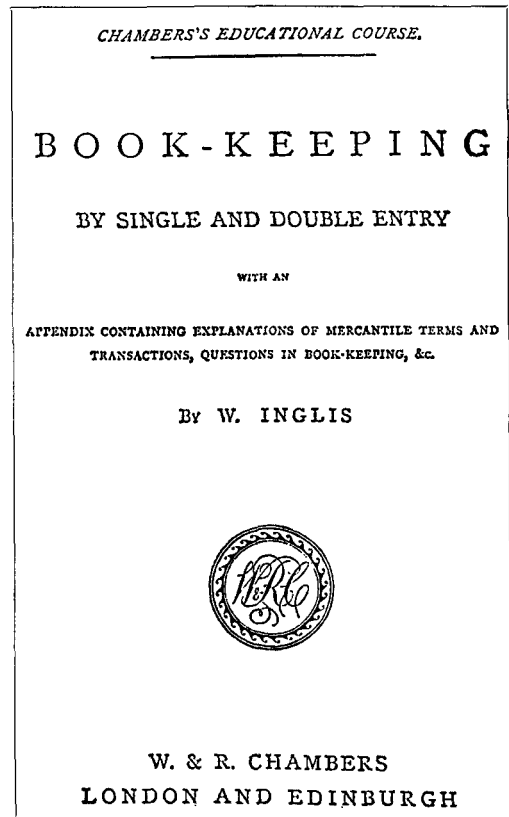
(v) E. G. Jones at Bristol in 1796, とあるのは, Edward Thomas Jones の誤りである。例の「英国式」の E. T. Jones である。

(vi) Benjamin Booth, in 1879 とあるのは, 1789年の誤り(あるいはミスプリント)である。フランス大革命のこの年に, ブースの優れた簿記書がロンドンで刊行されている。

(vii) Hamilton in 1820 とあるが, もし Robert Hamilton の簿記書 (An Introduction to Merchandise. etc.) だとすると, 初版は1777年で, 第2版が1788年である。1820年版は Elias Jonston の改訂版である。

(viii) C. Morrison in 1823 とあるのは, おそらく, Clerk Morrison の簿記書 (A complete system of practical book-keeping, etc.) のことであろう。初版が1820年で, 第3版が1823年である。『研究』で論じた James Morrison とは別人である。

(ix) W. & R. Chambers, of Edinburg. とある。これが一寸わかり難い。Edinburg はスコットランドの首都 Edinburgh エジンバラであろうが, この記述では, どういうわけか年次の記入がこれに限って欠けている。種をあかさすところである。次の写真版をみていただきたい。



これは, チェンバース教育叢書の一巻として刊行されたイングリシ (W. Inglis) の簿記書のタイトル・ページである。この簿記書は, 別著『研究』で紹介したように, 内容的にすぐれており, また, 明治初期の本邦簿記書『商家必用』の原典となったものである。イングリシ簿記書には刊行年次の記載がない。エルドリッチの『書目』では1849年とあり, リトルトン『会計発達史』は1861年版によっており, 『商家必用』は1872年版の訳である。

ギール (George P. Geer) の簿記書の序論のサブ・タイトルは, Historical Sketch of the Science of Accounts となっている。彼の簿記書のタイトルの一部の the Science of Accounts に応ずるものである。第2部で詳細に紹介・論評してあるが, 簿記史ないし



簿記書誌に関する記述は僅かなものである。Lucas de Borgoの1495年の簿記書、1543年の英国で最初の簿記書（久野注、オールドカッスルの名は出していない）、James Peeleの1569年の簿記書、ついで、Collins（1652）、Mair（1768）、Benjamin Booth（1789）、E. T. Jones（1821）を紹介している。Lucas de Borgo（Pacioli）の簿記書を1495年（正しくは1494年）としている誤りは、Kelly、Cronhelm等と同じである。そのそもその源は、先述のように、De la Porteにある。Collins（1652）とあるのは1653年の誤りである。KellyやB. F. Fosterも1652年としている。Mairについては改訂・増補版のBook Keeping Moderniz'dをあげている。米国のことに関しては、末尾にJames Benett, The American System of Practical Book-Keeping, 1820.をあげているにすぎぬ。全体的にみて、Kellyの名は出していないが、その影響が大きいようだ。

## V 「テキスト（教材）」としての簿記書の定型

### (1) 設題

パチオリの『ズムマ』（1494）に編入された《計算・記録詳論》、この世界で最初の印刷された簿記書は、その構成・内容からみて、適切な例解や帳簿雛形こそ欠いてはいるが、「教則」といったものに相当し、明らかに「教材」としての性格が顕著である。この最初の簿記書が、いみじくも、「テキスト（教材）」（に近いもの）であったという事実は、なかなか暗示的である。タグリエンテ（Giovanni Antonio Tagliente, *Considerando*, 1525）を経てマンゾーニ（Domenico Manzoni, *Quaderno doppio*, 1534）に至り、「教則」と「雛形」とを完備した「テキスト」としての内容が完成することは、すでにのべた（『経済論集』第16巻第3号、1980年）。

『ズムマ』が各国に訳出され、簿記の普及に力のあったことは、ひとつには、もともと「教材」としての性格が顕著であったことによる。イタリア（ベニス式）簿記を習得しようとする後進の人々にとって、まことに恰好なのである。『ズムマ』は、簿記実務のレベルからみると、大部おけているという論評もある。その当否についてここでは立入らないが、むしろ、たちおいていたそのことが、「教材」としては幸いしている面がある。イムピン簿記書（1543）やピール簿記書（1553、1569）のように、なまじ実務家としての彼等の工夫が加味されたようなもの、あるいは、当時のオランダの簿記実務を取り入れたと考えられるウェディントン簿記書（1567）のようなものは、「テキスト」（教材）としては、かえって不向きなのである。

ピールやウェディントンの名が出たので、英書の全般について概観してみよう。オールドカッスル・メリスの簿記書は、メリスの補訂によって単なる「教則」ではなくて雛形が追掲されている点では、パチオリ的ではなくてむしろマンゾーニ的な性格をもっている。爾後の簿記書についてみる。筆者（久野）のいうスコットランド講壇派の流れの中にメヤー（J. Mair）によって頂点をなすような理論化・体系化がすすむと、事実、彼の簿記書（*Book-Keeping Methodiz'd*, 1736）は、エディンバラで1736年、1741年、1749年、1752年、1757年、1760年（translated into Norwegian 1775年）、1763年、1765年と重版されており、勿論ロンドン版は初版の翌年に出版されているし、ダブリン版としては、1737年、1748年、1750年、1754年、1764年、1767年と重版されている。ノルウェー語による訳出でもわかるように、内外の後進の学習の教材としては、最適であった。増補版のBook-Keeping Moderniz'dも多く版を重ねた。しかし、内容はどうかということになると、明らかに、実務の水準をはるかに下廻った古典

的・伝統的なイタリア簿記であり、あいも変わらずの3主要簿制の域を一步も出ていないのである。極論すれば、彼のウェディントン簿記書(1567)の線にも及んでいないのである。メヤーが擬人説を脱して後世の資本等式説(に近いところまで)に達していることは、別著『研究』でのべたが、すくなくとも帳制の面では、「教材」としては役立つかも知れないが、「実務」(の改良)という角度からは、殆どみるべきものがないのである。とくに学校や学塾の教師達の間で、このような定型化した簿記書、内容的にいうと、「教則」の部分と「雛形」部分とに分かれており、帳制としては例外なくイタリア簿記の伝統をそっくり引きついだ3主要簿制(日記帳、仕訳帳、元帳)を採用しているもの、かかる簿記テキストが書きつがれていくようになると、「彼等は、簿記実務(の改良)とは無縁に、互に簿記書をコピーし合っている」といった皮肉な論評も生まれてくる。

英国では、既述したように、産業革命期に入ると、簿記書のこのような一般的傾向に対して、実務家の側から、果敢な反撥が行なわれるようになる。ブース、この元米国人の商人が、ロンドンで刊行した簿記書(Benjamin Booth, 1789)は、最も強力なアンティテーゼであった。そして、メヤーとブースとを止揚するような形で発展させたのがケリー Dr. Patrick Kelly であった。世界の先進国となったこの国の簿記書の特色は、この時期以降はとくに、実務の先端を切っていくようなところが顕著に認められる。時には、ジョーンズ英国式のような大きな勇み足はあっても。

後進の者が英国簿記書(の翻訳書)によって簿記を学習する場合を考えてみよう。メヤーの簿記書が適切かブースのそれか? まず、前者であろう。メヤー簿記書の1760年版がノルウェー語に訳出され、同国での最初の簿記書(1775)になったのも、けして偶然ではない。

別稿(『経済論集』第16巻第1号)でものべたように、我国の場合でいうと、プライベート・ストラットンの初級簿記教材(米書)の訳書『帳合之法』、イングリシスの簿記書(英書)の訳書『商家必用』、このいずれが明治初期のテキストとして流布したか。勿論、前者である。

## (2) 米書にみられる「テキスト」の定型

1789年にロンドンで刊行されたブースの簿記書、彼が元米国の商人であるというところから米書にふくめるとすると、この簿記書と、1796年にフィラデルフィアで刊行された米国で最初の簿記書とされているミッチェル(William Mitchell)の簿記書(A New and Complete System of Book-Keeping, etc.)とは、ともに複合仕訳帳制を専ら採用している点で共通している。ただし、前者では、元帳への転記に際して、月次総合仕訳帳を経由しているが、後者では、各種の特殊仕訳帳から直接元帳に転記(direct posting)している。「専ら採用している」という表現をしたが、後続の米書では、多くの場合、英米系の帳制の特色をなすこの複合仕訳帳を採用するのだが、多くの場合、「専ら採用する」ケースはむしろまれであった。英書の場合であると、多くの場合ある時期以降、とくに18世紀以降は、複合仕訳帳(のみ)を採用する簿記書が大勢を占める。米国の場合でも、先のミッチェルの場合のように、複合仕訳帳制を「専ら採用する」簿記書が、最初の米書として登場するのであるが、このいわば英国流の簿記書などは、後進者の簿記の学習テキストとしては、どうやら歓迎されなかったようだ。

後続の米書はどういう傾向をとったか。その定型は、次の諸点にみられた。

(i) 単式簿記を併用するもの。もしくは、単式簿記だけの独立した簿記書が刊行されていること。

(ii) 帳制の面では、古典的なイタリア式

（ベニス式）の3主要簿制につづけて、いわゆる改良イタリア式簿記といわれる現金出納（仕訳）帳と普通仕訳帳よりなる仕訳帳の2分割制、場合によっては現金出納（仕訳）帳の原理を拡大した現金式仕訳帳制、多桁式仕訳帳制、および複合仕訳帳制、これらの諸帳制を、いわば重層的につみ上げて、おのおの雛形を用いて解説する。これが米書の帳制の解説に多くみられる一貫したパターンであり、わが国の簿記テキストの定型にも決定的な影響を与えている。

(v) **Set** 形式。帳制の変化に対応して、帳簿の雛形を用いた解説では、**Set I** ~ **Set 何**、といった形で重層的に解説していく定型が完成する。この場合、帳制の変化に加えて、業種別の **Set** を組みこむケースもみられる。くりかえしの練習（ドリル）、粗なるものから密なるものへの学習、という点から便利にできている。

(vi) **Set** 形式からのひとつのバリエーションとして、例えば、ブライヤント等のように、**Common School Edition**（初級）、**High School Edition**（中級）、**Counting House Edition**（上級）のように簿記書を3組に編成するケースもでてくる。

(vii) 米書でとくに目につくが、“**Chart**”と“**Diagram**”がみられる。前者の **Chart** は、**A Balance Chart** とか、**Settlement Chart** とかよばれる。諸勘定口座が最終的に残高勘定口座もしくは資本（主）勘定口座に収斂して均衡する状況を図示したものである。ベネット（**James Benett**, 1820.『研究』を参照）の **A Balance Chart** では、資本（主）勘定口座で資本等式（的）の均衡関係が保たれており、ギール（**George P. Geer**, 1882. 第2部を参照）の **Settlement Chart** では、残高勘定口座で貸借対照表等式（的）の均衡関係が保たれている。後者の **Diagram** は、諸帳簿間の結合関係ないし記帳の次第を図示したものである。イトン・パーネット（**Eaton &**

**Burnett**, 1882. 第2部を参照）やマルシュ（**C. C. Marsh**, *The Science of Double Entry Book-Keeping, etc.*, 1856）などにみられる。『帳合之法』の初編裏扉にもみられるが、この場合では、諸帳簿の結び付が不明確であり、また、元帳の均衡を示す秤の位置がまったくでたらめで、これでは、装飾としかいいようがない。

いずれにしても、**Chart** といひ **Diagram** といひ、いかにも後進の学習書ないし教材らしい趣向である。

## VI 現金式仕訳帳制の展開

### (1) 設題

別著の『研究』で、英書のケースとしては、ハミルトン（**Robert Hamilton**, 1788）の簿記書にみられる「現金式」とその継承者達について論じておいた（第1章総論、第3節(2)）。また、とくに米書のケースとしては、有名なスプラッグ（**Charles Erza Sprague**, 1842—1912）の簿記書についてのべ、彼のいう **cash-book entries**（現金式仕訳法）も紹介しておいた。

筆者（久野）が、とくに現金式仕訳帳制（**Cash Journal System**）にこだわっているのは、いうまでもなく、明治6年12月大蔵省刊の『銀行簿記精法』以来、永くわが国銀行簿記の中核的帳簿である「日記帳」が、現金式仕訳帳であることによる。シャンド簿記という呼称があるくらいで、一般に、英人 **Allexander Allan Shand** に由来するというが、当時の英国における銀行簿記実務はどうなっていたのか、英書における取扱いはどうか、等々についておりにふれて調べてきた。たしかに、英国銀行のうちには、**Cash Journal** を採用しているものがあるし、英書でも、すでにハミルトンの先のケースでは、時期でいえば18世紀末である。

明治初年（19世紀の60～70年代）の頃、おおむね同時期における米書の例はどうか。とく

に米国における銀行簿記あるいは銀行簿記書の実況はどうか。かねて深い興味と関心とをよせていたところであった。

(2) ブライヤント(John Collins Bryant, 1821 — 1901) の簿記書の **General Journal**

ブライヤントの簿記書については、第2部の「解題」でくわしくのべるが、尚、少々おことわりをしておく。このブライヤントは、『帳合之法』の原典の Bryant and Stratton's *Common School Book-Keeping etc.* のブライヤント(Henry Beadman Bryant, 1824 — 1892)とは別人である。

J. C. ブライヤントは、その簿記書(第8版, 1882)で、イタリア式(ベニス式)3主要簿制、多桁式仕訳帳制、あるいは、複合仕訳帳制を解説しているが、諸帳制の解説に際して、とくに、*The Cash Journal System* と題した記述を加えており、“*the Day Book, Journal and Cash Book are combined, and called The Cash Journal.*” (p. 121) と極めて明快に示している。さらに、非現金取引の記帳に関しては、簡明に、次のようにいう(p. 121)。

「現金の出納を伴わない場合の記帳が必要となるが、その場合では、借記すべき勘定について右側頁に、また、貸記すべき勘定について左側頁に、それぞれ記載せねばならぬ。この結果、現金式仕訳帳の貸借両側の合計金額が等額だけ増加するので、現金残高に影響はない」と。

“When it is necessary to make an entry in which *no* Cash is received or paid out, the account to be *Debited* must be placed on the right-hand page, and the account to be *Credited* placed on the left-hand page. This will increased the footing of Cash Journal *equally* on each side, and therefore will not affect the Cash

balance. (p. 121)

さらに、注目すべきは、このブライヤント簿記書の後半の173頁以下巻末の312頁までに示されている銀行簿記の解説の中に出てくる *The General Journal* と名づけられた仕訳帳である。176頁で、これもまた極めて明快に、次のようにいう。

1. *The General Journal is the same as an ordinary Cash Book, or as the Day Book, Journal and Cash Book combined in the cash method, etc.*

参考のために、pp. 254 ~ 255 の *General Journal* の実況を次頁上段に示そう。左肩の部分に *Cash Dr. To Sundries*。右肩の部分に *Sundries Dr. To Cash*。とあるところなぞは、なかなか芸が細かい。わが国の銀行日記帳では、単に、(借方)、(貸方)となっているため、従前から巷間に愚にもつかぬ論議がたえなかった。「日記帳で逆の仕訳をして、元帳に逆の転記をする」といった俗説である。

米国銀行簿記(書)における *General Journal*、あるいは、本稿では詳しく紹介しなかったが、この簿記書にもみえている *Deposit Journal (Debit ; Credit)*、*Draft Book* と、わが国銀行簿記での日記帳、当座預金増補日記帳、日締帳との関連(もしあれば)等について、いずれも後日に詳しく検討したいと思っている。

周知のように、わが国銀行簿記の日記帳は、当初は、取引伝達伝票にもとづく個別的仕訳日記帳(個々の取引の歴史記録兼勘定分解記録)であったが、会計(仕訳)伝票への発展に支えられて、ついに、日次総合仕訳帳(伝票集計表)として確立するに至る。このプロセスの裡に、当座預金増補日記帳は、伝票代用制を契機として廃止され、また、為替実務慣行の変更によって日締帳は自然消滅していった。従って、今日、日記帳・増補日記帳・日締帳よりなるこの仕訳3帳簿制の実務を知る人としてないが、銀行簿記におけるこの帳制のルー

1		GENERAL		JOURNAL.		1	
CASH DR. TO SUNDRIES.		MONDAY,		MAY 1st.		SUNDRIES DR. TO CASH.	
1		Capital Stock. The following Stockholders have paid in full.					
		H. B. Bryant, . . . \$50,000					
		A. J. Cook, . . . 10,000					
		E. B. Eston, . . . 30,000					
		J. H. Goldsmith, . . . 10,000					
		J. C. Bryant, . . . 10,000					
		S. S. Packard, . . . 25,000					
		L. L. Williams, . . . 23,500					
		F. E. Rogers, . . . 10,500					
		H. E. Hubbard, . . . 10,000					
		C. Cinghara, . . . 12,000					
		W. A. Fardis, . . . 15,000					
		Geo. D. Odell, . . . 10,000					
		Edw. Trout, . . . 10,000					
		C. L. Bryant, . . . 10,000					
		H. W. Macaulay, . . . 10,000					
		W. H. Sadler, . . . 10,000					
		D. Burgess, . . . 10,000					
		E. N. Bryan, . . . 25,000					
		300000 00					
10 49		Deposits, Per Cr. Deposit Journal, 51177 51					
10 49		Met. National Bk., Per Draft Book, 14283 50					
		Exchange, By Sundries, 10 49					
1		Cash Dr., Total receipts, 355453 50					
		355453 50					
		TUESDAY, May 2d.					
28 39		Balance, Amt. on hand, 195218 87					
70 38		Deposits, Per Cr. Deposit Jour., 69547 98					
98 77		Met. Nat. Bank, Per Draft Book, 56304 04					
		Exchange, By Sundries, 68 77					
1		Cash Dr., Total receipts, 125890 79					
		125890 79					
		WEDNESDAY, MAY 3d.					
6 40		Balance, Amt. on hand, 236306 87					
71		G. I. Seney, Cashier Met. Nat. Bk. Col., P. & R. ck. on Wh. Bk., \$4718.49					
		W. H. P.'s ck. on Th. St., 673.37					
		P. H.'s ck. on German Bk., 6750.00					
		L. & T.'s Dft. on B. & Co., 654.00					
		10696 46					
1		Flour City Bk. Collections, H. & W. ck. on Bk. of A., \$263.81					
		F. & Co.'s ck. on 84 Nat., 798.42					
		E. P. Co. Dr. on C. W. & Co., 636.14					
		4258 40					
7 11		Amounts carried forward, 24554 38					
		24554 38					
		321109 06					
		236306 87					
		236306 87					
		TUESDAY, MAY 2d.					
3		Bond Acc't, Instructed G. I. Seney, Cashier Met. Nat. Bk., to purchase \$5000 U. S. 5.30's at 1.00, and remit to Sept. Banking Dep. Albany for our Cr., On above Bonds, 5000 00					
2		Premium, Expense, Paid for Books and Stationery, 1000 00					
1		Deposits, Met. Nat. Bk., Per Dr. Dpost. Journal, 14144 25					
1		Cash Cr., Per Draft Book, 149663 06					
		Total disbursements, 170234 63					
		Balance, Amount on hand, 195218 87					
		195218 87					
		WEDNESDAY, MAY 3d.					
3		Furniture & Fixtures, Pd. for Office Furniture, Fixtures, etc., 673 49					
3		Expense, Paid rent one month, in advance, 150 00					
3		Ohio Nat. Bk., J. B. Collins check, favor of H. B. B., 073 46					
4		Hide & Leather Bk., M. & Co.'s ck. on same, 1241 23					
4		Flour City Bk., F. R. A.'s ck. on same, 1000 00					
4		Bank of Capital, J. D. O.'s ck. on same, 26 19					
1		Deposits, Met. Nat. Bank, Per Dr. Deposit Journal, 53362 38					
1		Sundries, Per Draft Book, Page 7 & L., 12491 21					
1		Cash Cr., Total disbursements, 7288 68					
		Balance, Amount on hand, 81713 89					
		81713 89					
		WEDNESDAY, MAY 3d.					
5		Third Nat. Bk., S. & Co.'s ck. on same, 493 18					
5		Imp. & Traders Nat. Bk., B. Bros.' ck. on them, 500 00					
4		Flour City Bk., B. & Co. on Powers' Bk., 250 00					
4		Bank of Capital, R. & Co.'s ck. on same, 1350 00					
4		Ohio Nat. Bk., F. & Co.'s ck. on them, 2691 48					
4		Flour City Bk., Forcal of Townsend, 2300 00					
		Amounts carried forward, 7847 19					
		7847 19					

ツの解明は、依然として極めて興味のある研究テーマと考えられる。

(3) リブリッジ・ルーズ (D. R. Lillibridge, 1839—1896. F. F. Roose, 1855—?) の簿記書の Cash-Journal

この簿記書については、第2部の「解題」でくわしくのべるが、その Set XI. に Cash-Journal が採用されている。一般の商取引であり、とくに銀行業ではない。左側摘要欄に貸方、右側摘要欄に借方というタイトルがみえている点が注目される。非現金取引をこの Cash-Journal に記帳するケース (例えば、6月14日と15日の取引) で、金額欄を振替・現金・合計の3欄に区別して振替欄に記入するわが国の「日記帳」(銀行の現金式仕訳帳の伝統形式) のような方式は採用していない。その実況は、

次頁上段のとおりである。

なお、非現金取引の記帳に関しては、次のようにいう (p. 76)。

“If the transaction involves neither a debit nor credit to cash, enter the debits on the right hand side and credits on the left. This increases both sides equally and does not change the balance of cash.”

Ⅶ 残高勘定の覚書

(1) 残高勘定の伝統

別著の『研究』および別稿(「経済論集」第16巻・第1号)でも、とくに「英米式決算法」への展開を通じて言及しておいたが、以下に、要旨を簡潔にのべる。

わが国の簿記テキストでは、実在(体)

CASH-JOURNAL.				[SET XI.]	CASH-JOURNAL.				Cr.		
r.	L.F.	CREDITS.	EXPLANATION.	AMOUNT.	188...	L.F.	DEBITS.	EXPLANATION.	AMOUNT.		
	1	D. I. MUSSELMAN.....	Investment.....	3188		1	BILLS RECEIVABLE.....	F. Longwith's note.....	540		
		H. B. GILBERT.....	Investment.....	3078	June		L. B. MCKENNA.....	Owes on %.....	438		
		BILLS PAYABLE.....	Gilbert's note.....	300			G. L. McFARLAND.....	Owes on %.....	940		
		W. H. RUDDUTH.....	On %.....	189			JEP. FARMER.....	Owes on %.....	268		
	3	BILLS PAYABLE.....	Our note to B. & M.....	12			BILLS RECEIVABLE.....	E. E. Walton's note.....	488		
		L. B. MCKENNA.....	Order on him.....	150			H. B. GILBERT.....	Liabilities assumed.....	488		
		A. A. STEVENS.....	On %.....	125			DISCOUNT.....	Of note, favor W. F. Sheppard.....	1	50	
	8	MDSE.....	Sold I. M. Rose.....	14		3	MDSE.....	Bought of A. A. Stevens.....	288	13	
		G. L. McFARLAND.....	Order on him.....	50		6	EXPENSE.....	Rent for June, etc.....	47	23	
	13	ED. VEITHS.....	On %.....	33		13	MDSE.....	Bought of Ed. Veiths.....	83	50	
		MDSE.....	Sold Lillie Feezey.....	17		14	BILLS RECEIVABLE.....	Draft on L. Arndt.....	17		
	14	Wm. BERGER.....	MDSE.....	17		15	MDSE.....	Bought of W. Berger.....	17	60	
		JEP. FARMER.....	To balance %.....	268			COLLEGE BANK.....	J. Farmer's draft.....	268		
	16	MDSE.....	Sold N. E. Lillibridge.....	21		16	BILLS RECEIVABLE.....	N. E. Lillibridge's note.....	21	42	
		INTEREST.....	On above note.....	22		20	ALEX. SHAFER.....	Bill of Mdsce.....	19	40	
	19	BILLS RECEIVABLE.....	E. E. Walton's note.....	488		27	MDSE.....	15 yds. Delaines, 15¢.....	2	25	
		INTEREST.....	On same.....	2		28	W. H. DAVIS.....	For his half joint shipment.....	124	63	
	20	MDSE.....	Sold to A. Shafer.....	19		29	SHIP. TO DENVER, COL.	For our half joint shipment.....	124	63	
	23	MDSE.....	Sold Marshall Davis.....	8		30	MDSE.....	Sundry freight.....	1	75	
	28	MDSE.....	Slipped W. H. Davis, Denver.....	227			EXPENSE.....	Sundry expenses.....	2	85	4171 75
		L. B. MCKENNA.....	Our sight draft on him.....	20	8827 80		Balance.....	On hand.....			4656 14
					8827 89						8827 89

諸勘定（人名勘定をふくむ）の、いわゆる「締切」と「繰越」につき、「大陸式決算法」（と称するもの）および「英米式決算法」（と称するもの）を区別・比較して解説するのを常道としている。ところが、一概に「英米式」といっても、実情からいえば、肝心要めの英書では、ごく近年まで残高勘定口座を現に開設してきたし、前世紀の米書でも、この勘定口座を開設している例は多いのである。ただし、米書の場合、この方式と並行して、一部の簿記書がいみじくも“*Business Method*”と称したいわゆる「英米式」を採用しているケースがみられた。

英書の場合の残高勘定をみるのに、大陸（イタリア、オランダ）簿記の影響下にあったごく初期のものについて、閉鎖（記入）の場合と開始（記入）の場合とでいずれも残高勘定を用いた例はあるが、この場合でも、とくに名称で区別し、わが国の簿記テキストに散見する「閉鎖残高」・「開始残高」といった例は、筆者（久野）は、まだみたことがない。ただ残高勘定（Balance Account, Ballance Accmpt）とあるだけである。そして、やがて、次期の開始記帳に際しては、残高勘定を用いなくなり、資本（主）勘定を相手科目と

して仕訳帳に開始仕訳をするようになるのである。この方式は、前世紀の一部の米書にも踏襲されている。

英米簿記書を通じて、残高勘定口座を開設するという伝統は、甚だ根強いものがある。ただし、米書の場合では、締切りに際して「赤記」（red ink）、繰越につき「黒記」（black ink）といった解説がよくあり、この種の解説では、仕訳帳を経由しないで集合（計算）勘定へ直接口座間振替を行なうケースが多い。さらに、かかる方式の場合では、計算（残高）・検証・確認等の手段として、元帳面の記帳つまり general (final) balance (balancing) に先立って、資産負債表と損益表、two Statements; Statement of Resources & Liabilities, Statement of Loss(es) & Gain(s) を作成する。もとよりこの two Statements は、会計報告書としての財務諸表ではない。英書でこれに匹敵するものといえば、two clean Sheets; Balance Sheet, Profit and Loss Sheet である。

(2) 残高勘定の形骸化

実在（体）諸勘定の締切と繰越とにつき、仕訳帳を経由し元帳面の各口座への転記を通

米古典簿記書の研究 (久野)

仕 訳 帳

昭 ○	和 年	摘	要	元頁	借	方	貸	方
3	31	(残 高)	諸 口			26,000		
			(現 金)					5,000
			(甲 商店)					7,500
			(受取手形)					3,000
			(商 品)					4,500
			(備 品)					2,000
			(家 屋)					1,500
			(土 地)					2,500
		諸 口	(残 高)					26,000
		(乙 商店)				4,800		
		(借 入 金)				3,500		
		(支払手形)				4,200		
		(資 本 金)				13,500		

元 帳

残 高

3	31	(諸 口)		3	31	(諸 口)	
		仕訳帳により	26,000			仕訳帳により	26,000
		(per the Journal)				(per the Journal)	

じて行なう場合、残高勘定口座を諸口(Sundries)として一括表示したとすると、上のようになる。

まさに、残高勘定の形骸化である。かかる残高勘定の形骸化と、先出の Balance Sheet (もともとは Balance Proof Sheet) の重視とが、おそらく同時並行的に進行していたにちがいない。

(3) 残高勘定の消滅

先の仕訳のケースで、もし、次頁上段のような方式を適用したらどうなるのか。

結果は極めて簡明で、元帳面での残高勘定は自然消滅の形となる。典型的な事例を、カマー (G.N. Comer) の Book-Keeping Rationalized: etc., Boston, Forty-Eighth Edition-Revised: 1875. にみる事ができる。第2部の「解題」を参照されたい。

他方、例の「赤記」(red ink)・「黒記」(black ink)の方式をとり、by Balance, to Balance と記帳しつつ、元帳面に残高勘定口座を開設して直接口座間振替を行なう方式では、やがて、次期への記帳の継続性の確保という重要な課題をのこしつつも、元帳面では残高勘定口座の廃止の方向をとる。いわゆる“Business Method”の確立である。

わが国の簿記テキストのいういわゆる「開始残高勘定」の場合をいえば、前述のように、英米書を通じて、開始記帳では資本(主)勘定を相手科目として仕訳する伝統があり、もともと、例外を除いては(ごく初期の簿記書を除いては)、残高勘定方式は採用しておらず、さらには、第2部の「解題」で紹介したカマーのような方式で、資産を借方に、負債と資本とを貸方に対照して仕訳する手続をとれば、残高勘定(開始残高)は、そもそも存在しない。

仕 訳 帳

昭 和 年	摘 要	元 頁	借 方	貸 方
3 31	諸 口 (乙 商店) (借 入 金) (支 払 手 形) (資 本 金)	諸 口	4,800 3,500 4,200 13,500	5,000 7,500 3,000 4,500 2,000 1,500 2,500
		(現 金) (甲 商店) (受 取 手 形) (商 品) (備 品) (家 屋) (土 地)		

### Ⅷ 再び締切記入 (closing entry) について

——英米式決算法の発展——

#### (1) 伝統的な元帳総括 (general balancing) の手順

周知のように、期末における元帳総括に際しては、損益(集合)勘定口座を開設して(期中にすでに開設してある場合はそのまま)、名目諸勘定をこの勘定口座に振替えて締切る。この記帳を closing entry 「締切記入」という。この場合、パチオリ簿記書(1494)のように、仕訳帳を経由しないとするものもあるが、イタリア簿記の伝統では、大勢は、この記帳につきすべて仕訳帳を経由させている。異口座間の振替であるから、原則として、こうあるべきであろう。さて、損益勘定の貸借差額つまり純損益は、これを同じく仕訳帳を経由して資本(主)勘定に振替える。これを final entry という。文字通り「最終の」(final)「記入」(entry)である。final entry が終了した後に、元帳に「残留している諸勘定」(the remaining accounts)は、次期に

引きつがれていく(継続していく)資産、負債および資本である。すなわち、人名諸勘定をふくむいわゆる実在諸勘定である。

いわゆる大陸式決算法と称される方式では、残高勘定口座が開設され、実在諸勘定はこの残高(集合)勘定に振替えられる。一般には、この手続(記帳)のことも名目諸勘定の場合と同様に、実在諸勘定の「締切り」と称している。しかし、正確には、この記入は closing entry 「締切記入」ではなくて、強いていえば balancing (and ruling) entry と称すべき性質のものである。

この balancing (and ruling) entry につき、仕訳帳を経由するか否か。仕訳帳面で残高勘定を相手科目として仕訳をし転記をするという伝統的な方式からはじまって、やがて、仕訳帳を経由しないで balance (proof) sheet を利用する等の方式も登場する。また元帳面の残高勘定口座の記録も、いわゆる実在諸勘定をいちいち itemized したものでなく、一括して「諸口」として等額(合計額)を貸借に対置するようになり、内容的にはまったく形ばかりのものとなっていく。前項で述べた残高勘定の形骸化と英米式決算法へ



の傾斜がおこる。

(2) 残高勘定の機能

上記の残高勘定の機能は何か。この問題をはっきりさせておくことが肝心である。

簿記テキスト(とくにわが国の)流の解説にみられるように、残高勘定(閉鎖残高)は、実在諸勘定を「締切」するためとしたらどうか。もしこれだけのことなら、仕訳帳面で、諸負債・資本をその残高につき借方に仕訳し、諸資産をその残高につき貸方に仕訳し、元帳に転記すればよい。元帳面はどうか。答は簡単、残高勘定口座は自然消滅となる。実例については、前項でのべた。残高勘定口座の開設は、この口座への振替に際して、実在諸勘定の貸借残高を計算・確認することが前提となり、実は、この計算・確認のためとする考えもある。しかし、これは少々おかしい。この場合は、テキスト風の“T” form の元帳(標準式元帳とテキストには書いてある)が前提となっている。残高式元帳(伝統的な実務の元帳様式)では、各勘定でコンスタントに「残高」を記帳してある。

残高勘定の機能は、資産・負債・資本の期末の在(残)高を一口座に集合し、資本(主)の present value (今日的に言えば資本主持分)を itemized して明示することにある。これはなかなか説得力のある説明である。

残高勘定(Balance Account)が、「タイトル」として、Balance Statement と改称され、あるいは、Financial Statement と改称されていくような事例もある(ブライヤント・ストラットン簿記書の場合、次項参照)。この場合では、残高勘定のもつ会計情報機能に傾いてはいるが。

残高勘定の機能は、proof「検証」にある。この見解もなかなか説得力がある。だが、検証ということなら、試算表(繰越試算表, post closing trial balance)で間に合うことになる。残高勘定を廃止し、いわゆる「赤記」(red

ink)・「黒記」(black ink)の方式で、直接、各々の実在勘定口座でいわゆる「締切」・「繰越」の記帳をし「繰越試算表」で検証をすることになれば、これがわが国の簿記テキストでいう「英米式決算法」であり、一部の米書(前世紀の)でいう“Business Method”である。

少々変わった例としては、プレストン(L. Preston)の Preston's Manual on Book-Keeping : etc., 1829 (p.81) の“A Double Balance”の方式がある。旧元帳から新元帳への繰越につき、Bailey & Remsen (人名勘定)で示すと、次のとおりである。

OLD LEDGER.			
Dr.	BAILEY & REMSEN.		Cr.
To Merchandise .....	465 85	By Cash .....	285 75
„ Sundries .....	118 18	„ Sundries .....	77 67
„ Balance carried to new Ledger	*363 03	„ Bal. car. to new Ledger	+582 03
	\$ 945 65		\$ 945 65

NEW LEDGER.			
Dr.	BAILEY & REMSEN.		Cr.
To Amount from old Ledger ..	+582 03	By amt. from old Ledger	*363 02

(3) closing entryは final entry である

名目諸勘定の closing entry「締切記入」は、文字通り、これが final entry「最終記入」である。こう理解すべきである。

残高勘定に proof の機能を求めるのなら、繰越試算表を作成すればすむ。

残高勘定に、ある種の「報告」(会計情報)の機能を求めるならば、各科目の配列に充分に留意して、Balance Sheet, Financial Position Sheet 等の名称の「別表」(a clean sheet)を会計報告書として作ればよい。

いわゆる英米式決算法では、なるほど残高勘定はこれを廃止している。しかし、すくなくとも、今日のわが国の(あるいは内外の)簿記テキストで、英米式決算法によりながら、なおかつ、慢然と、実在諸勘定の「締切」と「繰越」の手続を、くどくど解説しているのは、どういうわけか。必要なことは、これら諸勘

定が間違いなく次期に引きつがれているという保証、この一点にある。これが記帳原則のひとつとしての「記帳の継続性」という命題である。元帳面の各勘定口座で、「締切」かつ「繰越」の記帳、この二重の手間を必要とする何らの必然性もない。あるとすれば、ただひとつ、盲目的な「教科書」上の伝習、としかいいようがない。

ハットフィールド(Henry Rand Hatfield)は、その主著 *Modern Accounting etc.*, 1909 の第3章「貸借対照表」でいう。

English and American bookkeeper long ago tired of the useless work of actually closing the accounts in the ledger, necessitating as it does the immediate reentering of the items in new accounts. (p. 41)

But it is difficult to find any logical preference for the account showing the opening of the new year over that showing the momentarily antecedent closing of the old year. (p. 43)

また、第2部の「解題」で紹介するウィリヤムズ・ロジャーズ共著の簿記書(*Theoretical and Practical Book-Keeping*, 1882, p. 35)では、次のようにいう。

The remaining accounts, need not be closed for this purpose,…… They may be closed, however, to mark a period in the business, or for the purpose of causing each account to exhibit in a single account, convenient for inspection, its exact net debit or exact net credit, as the case may be.

For the purpose, however, of giving the pupil practice in the work of closing the ledger, all of the accounts may now be closed, as explained below.

## Ⅸ 財務(諸)表への道

### (1) 勘定(account)から財務表(Financial Statement)へ

—Bryant & Stratton's Counting House Book-Keeping の場合—

残高(閉鎖残高)勘定口座は、すくなくとも第一義的には、元帳面の実在・人名諸勘定口座の **general balancing** (総括)に際して、記帳の最終的な検証(**final proof**)の機能を果すものである。すなわち、名目諸勘定口座の記録を損益(集合)勘定口座に振替えて、文字通り **closing (entry)** 締切り、損益勘定口座の貸借差額(純損益)を資本(主)勘定口座に振替える(**final entry**)。そして、最終的に、資本(主)勘定口座の記録を残高勘定口座に振替え、同口座の上で、 $A(\text{資産}) = P(\text{負債}) + K(\text{資本})$ の貸借均衡をうる。この **balance (balancing)**が、文字通りの **genral(final) balance (balancing)**である。残高勘定口座の貸借差額を資本(主)勘定口座に振替え、同口座の上で、 $A(\text{資産}) - P(\text{負債}) = K(\text{資本})$ の貸借均衡をうることもできる。

いずれにしても、残高勘定の機能は、本来的には、かかる **balancing** による **final proof**にある。しかし、同時に、この残高勘定口座(標準形式)の記録は、次期に繰越す資産、負債および資本を一口座に集合して貸借に対照・表示したものであるところから、残高勘定口座を開設する(派生的な)目的が、この「財産(政)状態の集約・表示」に求められるようになるのも、ごく自然であった。

英書における **Balance Sheet or Balance Proof Sheet**が、簿記の記録領域から独立して、会計報告書としての **Balance Sheet**に発展していったのと並行して、元帳面の残高勘定口座そのものが、次第に財務表へ、あるいは、すくなくとも、財務表(的)な機能の認識へと展開(転換)していく事例をみるこ



等に氾濫している。しかし、筆者(久野)が在学中では、図書館の会計文献中にも必ずしも多くみられる書物のタイトルではなかったし、教科目にもなかった。昭和9年の産業合理局「財務諸表準則」などは、「財務諸表」という用語を示した早い時期の例だと思うが、戦後では、企業会計原則・「財務諸表準則」と証取法・「財務諸表規則」、この二つが、財務諸表という用語を一般化する原動力となった。

これらのいわゆる財務諸表は、英語の **Financial Statements** に相当し、内容的には、貸借対照表、損益計算書等の会計報告書を指すのであろうが、厳密にいうと、用語法としては、いささか腑におちないところもある。先掲の **Bryant & Stratton, The New Edition of the Financial Statement**, あるいは、**Financial Position**等、こういった用語例なら納得がいく。つまり、この場合の「財政(務)」**Financial** とは、「一時点における」、「資産・負債・資本の状況を考察して」、「当該企業の支払能力」を判定するという意味に解されるからである。貸借対照表 (**Balance Sheet**) という財務表 **Financial Statement** は、当該時点における、企業資金の源泉と運用とを対照したものであり、より直截的にはその即時的支払能力を示した静態資金表である。こうみる立場によれば、まさしく、**Financial Position Statement** であり、文字通りの財務表である。ところで、財務諸表 **Financial Statements** といえば、財務表の複数形であるから、貸借対照表という財務表の外に、別の財務表が存在せねばならぬ。例えば、動態資金表としての **Fund Statement** を財務表とみるのはよい。しかし、損益表(わが国では、明治32年商法以来、損益計算書という)を財務表とみるのは、果してどうか。損益表を財務表とみるからこそ、「財務諸表」というのだろうか。損益表は、財務 **Financial** の何の表なのか。**Financial Operation**

**Statement** であるという答がかえってくるかもしれないが、**Operation Statement** あるいは **Business Operation Statement** ならわかるが、“**Financial Operation**” とはいにくいのではないか。いささか揚足とりかも知れないが一言申しさえる。

なお、厳密にいうと、**Financial (Finance)** といえ、直截的には「金廻り」の事であるから、**Financial Statement** すなわち貸借対照表といってみても、流動資産の中の棚卸資産や設備等の固定資産を **Financial Items** であるとする理解の仕方は、どうにもしっくりこない。文字通りの **Financial Items** である当座資産と、原材料、仕掛品、製(商)品等の棚卸資産とを「流動資産」というカテゴリーに入れることが、土台無理なのである。棚卸資産が土地を除く固定資産と同一のカテゴリーに属し、ともに原価(費用)性の資産であることは常識である。これらの点に鑑み、第1部の [.(2)] で紹介した **Bryant & Stratton's Counting House Book-Keeping** の新版の勘定分類において、彼等が商品勘定と不動産勘定を原則的に **Accounts of Business (Operation)** のカテゴリーに入れ、**Accounts of Finance** のカテゴリーには入れなかった事が、想起される。

## (2) **two Sheets or two Statements** の機能

別著の『研究』では、英書における **Balance Sheet** (残高表) と **Profit and Loss Sheet** (損益表) と称した **two clean Sheets** について言及してある。その機能を要約すれば、本来的にみて、計算・確認・検証の手段であって、残高・損益の両集合(計算)勘定への振替記帳に際して、仕訳帳を経由せず、直接口座間振替えを行なうような場合に、この **two clean Sheets** を“**proof**”の手段として利用したということになる。

米書において、以上の **two Sheets** に匹

敵するものは、Statement of Resources and Liabilities (資産負債表) および Statement of Loss(es) and Gain(s) (損益表) と名づけられた two Statements である。この両 Statements の事例は、米書ではごくポピュラーなものであるが、ここでは、参考のためにフェアバンクスの簿記書 (Lorenzo S. Fairbanks, 1866, 後出) から引用しておく。

STATEMENT FOR MARCH, SET II.			
LOSSES AND GAINS.		Losses.	Gains.
MERCHANDISE,			83
HOUSE AND LOT,			35
EXPENSE,	Outlay, 270	195	00
	Less valuation of fixtures, 75		
SHIPMENT TO PITTSBURG,		1	44
DISCOUNT,			46
COMMISSION,			73
Net Gain,		2242	06
		2242	06

RESOURCES AND LIABILITIES.			
	Resources.	Liabilities.	
MERCHANDISE, Per inventory,	7000	00	
CASH, Balance on hand,	288	93	
AMES & Co., Deposit balance,	1000	00	
HOUSE & LOT, Valuation,	3400	00	
COMMERCIAL BANK, On deposit,	7981	69	
FIXTURES, Valuation,	75	00	1500
BILLS PAYABLE, Outstanding,			00
H. W. Barton's Net Investment,	3000.00		
His $\frac{1}{4}$ Net Gain,	1263.16		
His Present Interest,			10268
Student's Net Investment,	7000.00		
His $\frac{1}{4}$ Net Gain,	282.46		
His Present Interest,			7982
	819745	62	819745

これらの Statements は、今日いう財務諸表ではない。フェアバンク自身ものべているように (p. 23), 元帳の締切の準備として (preparatory to closing the Ledger) 作られるものである。つまり、名目諸勘定の closing (entry) と実在(体)諸勘定の balancing (entry) の予備的手段として機能しているのである。簿記の記録領域に位置するものであって、会計の報告領域に位置するものではない。

そこで、試算表、棚卸表、資産負債表および損益表を一表で (a tabular form) 総括・統合した計算表、つまり今日いう「精算表」(work sheet) に相当するもの、これを米書では Balance Sheet or Grand Balance Sheet と称している。

なお英米書を通じて、残高勘定 Balance

account と Balance Sheet とを同義に用いているものもあるので、為念、申しそえる。

(3) **Financial (or Yearly) Statement**  
アカウントビリアイヤー  
**と会計責任** — Modern Commercial Bookkeeping, etc., by A. W. Dudley の場合 —

第2部で詳論するが、ダドレーの簿記書 (1903) における Financial (or Yearly) Statement 「財務表」あるいは「年次表」(第2部を参照) は、彼自身、元帳の締切りの後 (after the Ledger is closed) に、簿記係 (bookkeeper) から雇い主 (his employer) に提出される重要な書類 (important document) であり、記帳の適正・正確なることを立証する最良の機会である (No better opportunity is afford him to exhibit ..... ) とのべている点で明らかのように、受託(責任)者である簿記係から、委託者である雇い主(資本主) に対して提出される受託会計責任 (accountability) に裏付けられた会計報告書である。すくなくとも、そのような明白な自覚に裏打ちされているといつてよい。

X 第2試算表 (Second Trial Balance) について

米国簿記書では、しばしば、第2試算表 (Second Trial Balance) なるものにお目にかかる。例えば、1850年刊のクリテンデンの簿記書 (前出) の Leger Set 1. にもある (『研究』, 345頁)。あまり聞きなれない試算表であるが、わが国では、『帳合之法』で、紹介されている。Bryant and Stratton's Common School Book-Keeping ; etc. の訳者福沢は、「第二平均之改」と訳している。二編四から次頁上段(左)に引用しておこう。

元 損 平			第 二 平 均 之 改
入 益 均			
二五、 二〇七	九、 五〇七	一五、 五〇〇	
二五	二五		
二五、 二〇七	七、 四〇四	一七、 〇七〇	
二五	二〇	〇五	貸

(第三十丁)

仕訳帳から元帳への転記がすべて完了した時点で、第1試算表 (First Trial Balance) を作成して検証を行なう。なお福沢は、とくに「第一平均之改」と訳さず、単に「平均之改」としている。第2試算表 (Second Trial Balance) は、資本勘定、損益勘定および残高勘定の3口座につき合計額あるいは差額をもって作成する試算表である。すなわち、損益・残高の両集合勘定口座への振替記入が完了した時点で作成する。その目的は、仕訳帳を経由せず直接口座間振替の方式によるところから、closing (and balancing) entry の検証をしようとするためである。この第2試算表作成後に、損益勘定口座の貸借差額を資本勘定口座に振替え、資本勘定口座の貸方差額を残高勘定口座に振替えて、元帳の general balancing を残高勘定口座面で完了するか、あるいは、損益勘定口座の貸借差額を資本勘定口座に振替え、残高勘定口座の借方差額を資本勘定口座に振替えて、元帳の general balancing を資本勘定口座面で完了する。

第2試算表の仕組は、次のとおりである。

第2試算表

元頁	元帳面	合 計		差 額	
		借方	貸方	借方	貸方
1	資本		×××		×××
	損益	×××	×××		×××
	残高	×××	×××	×××	
		×××	×××	×××	×××

$$(A' + V) = (P' + K + G) \quad (A' - P') = (K + k)$$

## XI “account” の覚書

言葉は文化である。伝統・生活・慣習・思想・情緒あるいは風土・地理・四季・気候等と、強く結び合っている。外国(来)語は実にむずかしい。

日本語で例をあげよう。かの名台詞「月も朧に白魚の」、これを英訳して、朧月夜だから “a night with a dim moon”, 白魚だから “a whitebait” などと辞書をたよりにデッチ上げてみても、英米人にとってさっぱり不得要領であろう。日本人が日本語でなら、まあ、わかる人が多かるう。朧、朧月、朧月夜とくれば、「辛崎の松は花より朧にて」(芭蕉)にみるように閑春の風情であろうし、白魚の方は、「藻にすたく白魚やとらば消ぬべき」(芭蕉)、「冬にまたもどりし風よ白魚鍋」(万太郎)で、早春といったところか。別に、朧月夜に白魚をとろうという下世話な仕儀ではない。「篝も霞む春の空」とつづき春宵の風情をいうわけである。舞台は大川端庚申塚であるから、日本人になら、大川でとれたという白魚が連想されてくるであろうし、庚申(塚)の宵は盗人を思わせるのに充分であろう。

もっとも先の和英辞書の a whitebait ではまずい。これは「しらす」(鱚の幼魚)のことであって白魚ではない。もっとも「しらうお科」の魚を「しらうお」といい、「はぜ科」

の魚を「しろうお」といい、両者は別種であるそうで、世間で白魚鍋しろあなべとか白魚舟しろなぶね等といっているのは、実は「しろうお」ではなく「しろうお」のことだという話を聞いた事がある。こうなると、何とも複雑であるが、「月も朧にしろうおの」では、どうも江戸前の名調子にはならぬようだ。日本人が外国語に対する場合でも、事情は同じことだと思ふ。要するに言葉は文化であり、辞書を引き引き手軽に横のものを縦にして片づくものでもあるまい。さらにいえば、この辞書なるものも、あてにならない(こともある)。例をあげよう。コンサイスの独和辞典と仏和辞典で、*aktiva, passiva, actif (ve)* のところをみて下さい。*aktiva* [商] 資産; 貸方. *passiva* [商] 負債; 借方. *actif (ve)* [商] 資産; 貸方と、こうある。一見して、貸方と借方の使い方が逆のように見える。ところが、沿革的には、こうである。明治初年の大陸商法の研究者達の用語法(訳語)では、簿記での英語直訳体の借方(*debitor*)・貸方(*creditor*)にかかわりなく、法律用語として、上記のような貸方・借方の用語を定着してきている。明治23年原始商法は、この簿記用語とは全く無縁な貸方・借方を法律用語として採用している。「貸方借方ノ対照表」(貸借対照表)がその典型である。「貸方(債権)と借方(債務)の対照表」もしくは「貸方(資産)と借方(負債)の対照表」である。従って、先掲の両辞典の記事は、明治初年以來の伝統的法律用語の系譜からいえば、必ずしも間違っていない。がしかし、簿記用語の借方と貸方が定着してすでに久しい現在、[商]とことわって、なおかつ前述のような記事は、どうみても、うなずけない。要するに辞書を作っている連中が、おそるべき伝統主義者なのか、あるいは、あからさまにあって、先人の古い辞書を慢然とコピーしているのか、そのいずれかである。心細い(ところのある)辞書を片手に、外国語に対するのであるから、

理解できているのやら、どうなのやら、甚だ疑心暗鬼である。

“account”という英語がある。英和辞書ですぐ目につくのは、計算、勘定、計算書、勘定書といった名詞形であろう。たしかに、簿記で *account* といえ、勘定つまり「計算単位」であり、*account title* といえ、勘定科目つまり「勘定の名称」である。日本の簿記書では、勘定口座すなわち「勘定の計算場所」と解説するのが一般だが、この勘定口座に当る英語は一寸みあたらず、勘定も勘定口座も *account* である。もっとも、「計算単位」と「計算場所」とを区別してみてもさしたる意味はないと思うが。定冠詞 *the* をつけて複数形にし *the accounts* とすると、これは会計報告書類つまり財務諸表のことである。*accounting* これは会計ないし会計学と訳されており、*accountancy* となると、会計という技能ないしその職能(会計職)を意味する。このほか *accountant, account book* 等もみえている。もとになっている“*account*”, この言葉の最も基礎的な *idea* は何か。これを単に「計算」という側面から把握したのでは充分ではない。普通の英和辞典にみられるように、*account* の冒頭は、おそらくどれでも、「説明」とある筈である。だから、*account for* あるいは *render an account of* といえ、*「説明(弁明)して相手に納得してもらおう」* という意味になる。また同時に、とくに後者の場合では、「決算報告をする」という意味もかねている。そこで *accounting* という言葉にしても、例え、*“There is no accounting for tastes.”* といえ、*「(たで)食う虫も好き好き」* ということになる。さて、説明をするのは何のためか、いうまでもなく、「責任」(受託責任)を解明しその解除を求める手段としてである。つまり「責任(をとる)」という *idea* に支配されている。そこで、*accountable* といえ、*「責*

任のある」、「説明できる」という意味になり、**accountability** といえば、一般の用語法では「責務」である。例えば、昭和52年6月東京で開催の **ICN, Tokyo '77** (国際的な看護人の集会) のスローガンは、この **Accountability** であった。また、**bookkeeper** でなく **accountant** といえば、かかる責任を果す能力のある人ということになる。会計用語では、この **accountability** を、「会計上の受託責任」、「受託会計責任」、あるいは単に「会計責任」という。簿記は、日常の会計責任の推移を会計諸帳簿 (**account books**) の記録を通じて解明するための手段であり、決算会計報告書類の提出は、委託者に対して、受託者が行なう会計責任の解除の要請である。

“**accountability**” をめぐる日英人の認識のズレを最も端的に示す例をあげよう。シュマーレンバッハ『動的会計学』(**Dynamische Bilanz, von Eugen Schmalenbach**) の Bauer 12版の **C. II. Die Rechenschaftslegung** の訳である。**Rechenschaft** (弁明)、**~ablegen** (弁明する) であるが、この有名な書物の英訳で、**Dynamic Accounting by Eugen Schmalenbach Translated from the German by G. W. Murphy, and Kenneth S. Most, 1959. Chapter III (p.35)** は、**Accountability** と英訳した。土岐政蔵訳「十二版 動的貸借対照表論」**C. II.** は、「報告書の提供」と邦訳した。会計報告書の提出という手続は、会計責任解除要請の手段であるから、大した違いはないとされるかも知れないが、**Rechenschaftslegung** のこの英邦訳の違いは、本質にかかわる重大な認識のズレであるといわざるを得ない。なお、教科書として著名な太田・飯野共著『会計学』(千倉書房)第2章(9頁)は、「委任者に対する報告責任」(**accountability**) としている。けだし名訳である。

明治初年以來、採用してきた簿記、記簿、

帳合、会計、経理、計理、これらの用語には、**account, accounting, accountancy, accountable, accountability**, あるいは **accountant**, これらの「共通項」を端的に表現できるニュアンスは、まったくふくまれていない。計算、記録、あるいは、せいぜいのところ照合この程度の意味合である。という事は、とりもなおさず、「共通項」つまり基本的認識あるいは事柄の本質それ自体が完全に欠落したまま舶来の技術として中途半端な形で移入されたことに外ならない。「仏作って魂入れず」であり、これは、相当に深刻な問題である。

なお、とくに前世紀後半の米書では、そのタイトルの一部や本文に、**The Science of Accounts** とするものが散見される。第2部の「解題」の簿記書でいえば、**Palmer, (1855)**, **Blayney & Stratton (1860, 1863)**, **Fairbanks (1866)**, **Gierl (1882)**, **Eaton & Barnett (1882)** 等にみられる。この系譜のものには、今世紀初頭の例えば、**C. E. Sprague, The Philosophy of Accounts (1907)** や **DR Scott, The Cultural Significance of Accounts (1931)** がある。また、英書では、**E. Garcke & J. M. Fells, Factory Accounts (1887)** がある。いずれも名著の誉が高い。スコットの書物は、筆者(久野)が最初に読んだ外国の会計学書で、感慨深い。スプラーグの書物とともに、**Price Waterhouse Foundation** の助成による **Accounting Classics Series (ed., Robert R. Sterling)** の中に編入され刊行されており、再び世間の注目をあびている。邦書でもとくに以前は、「勘定の学(問)」といった表現をとる向もあったようだが、このままの日本語では、簿記の原理ないし勘定学説といったニュアンスにうけとられる。**The Science of Accounts** の含蓄とは、大部へだたりがある。



## XII 「財政状態」 (financial condition, or position) の覚書

### (1) 設題

内外の会計文献では、判でついたようにいう。「貸借対照表 (Balance Sheet) によって企業の（あるいはその他の会計主体の）財政状態 (financial condition, or position) を明らかにする」と。

さすがに昨今では、「財産状態」 (the state of property) とはいわないようだが。いずれにしても、この場合では、「財産」なるものの厳密な定義が必要となる。商法実財産主義の建前からは、「動産、不動産および債権、債務その他の財産」ということになろうが、商法自体が実財産主義から機能的財産主義に転換している現在、この範疇には、問題がおさまりきらぬ。

会計文献の上でみる限り（とくにわが国の）、「財産状態」から「財政状態」あるいは「財務状態」へと推移してきた過程で、貸借対照表の理解（認識）にどんな変化が生じているのか、これは実に興味ある問題だと思う。

もっとも、久しい以前から、例えば下野直太郎博士（昭和…年6月6刊、『単複・貸借・収支簿記会計法』31頁）のように、「〔貸借対照表〕を用いて事業財政の内容を示し得るものなりとするは従来の通説なるが如しと雖も、之は一の重大なる誤謬なり」という見解もある。博士の場合は、結局、貸借対照表を「一種の試算表たり得るに止まる」とする。別著の『研究』で明らかにしたように、英書でみる限り、Balance Sheet は、沿革的には、まさしく Balance Proof Sheet として、簿記の範囲での（会計報告書ではなく）検算手段ないし「残高 (balance) を次期に繰越すための一表 (a sheet)」であったこと、これは確かである。また前世紀の米書で Balance Sheet という場合では、これはもう例外な

く、同じく簿記の範囲での「精算表」 (work sheet) であった。さもなくば、資産負債の残高表と損益表とを統括・総称して Balance Sheet という。

現今の会計学者の中でも、例えば、マーブル (R.P. Marple, *Toward a Basic Accounting Philosophy*, 1964, p. 2) のように、「貸借対照表を財政状態に関する報告書であるとのべることは、貸借対照表について、殆ど何も物語っていないも同然である」とする見解もあり、さらに、グリーンナー (M. Greener, *Between The Lines of the Balance Sheet*, 1968, p. 1) のように、「Balance Sheet は、情報の伝達を意図してとくに工夫された計表ではない。それは複式簿記システムの副産物である。Balance Sheet を作る人にとって、残高の内容・状態により、すべての記入が正確に行なわれたことを確認するという事以外に、とくに関心もたれたことは、いまだかつてなかったのである」とする意見もある。とくにグリーンナーの場合は、下野直太郎博士の場合と同主旨である。沿革的にいえば、英書に関する限り、産業革命期頃（それ以前）までは、まさしくそうであった。Balance Sheet は、文字通り「残高」 (balance) の「検証」 (proof) の「表」 (a clean sheet) であるか、あるいは、Balance Account 「残高勘定」そのものと同義語として用いられていたのである。ついでながら、Profit and Loss Sheet は、この Balance Sheet とともに、clean sheets として登場しており、また、場合によっては、Profit and Loss Account 「損益勘定」と Profit and Loss Sheet とが、同義語として用いられたこともある。現に、英国の伝統的な会計用語でいうと、損益計算書に相当する英語は、Profit and Loss Account である。この場合では、この英語は簿記での損益勘定という意味にも用いられ、同時に、会計報告書としての損益計算書という意味にも用いられている。

有名な（見方によっては陳腐な）シュマーレンバッハの動的会計については、とくにふれない。フルトン（J. W. Fulton）の *British-Indian Book-Keeping. etc.* (1799, 1800) やランバート（J. Lambert）の *The Perpetual Balance ; etc.* (1812) にも、「残留項目の表」といった見解は、極めて鮮明に示されている。シュマーレンバッハの学説には、商人簿記の伝統ないし常識を再確認したようなところがある。この点については、別著・別論でくりかえしのべたので省略する。

## (2) 財政状態とは何か

まず、正直な学者の話しから。有名な彼のケスター（Roy Kestor, *Principles of Valuation as related to the Functions of Balance Sheet, 1924 ; Early 20th Century Development in American Accounting Thought, A Pre-Classical School. ed., by G. J. Previts, 1978* に収録）はいう。

「貸借対照表は、通常、財政状態（*financial condition*）の表と定義づけられている。この財政状態とは何を意味するのか、学習者にとっては一個のなぞ（*a puzzle*）である。彼は、当該事業の財政に関して、貸借対照表がどのようなかわりをもっているかについて、漠然としか理解していないので、財政状態という言葉の明確で理解し易い説明ができないのである」

皮肉っぽい学者になると、こうなる。同じく有名な彼のコーラー（Eric L. Kohler, *A Dictionary for Accountants, 1952, p. 178*）はいう。

**financial condition (or position):** The impression conveyed by presenting the assets and liabilities of an enterprise or other person in the form of a *balance sheet*.

訳出するまでもなく、その主旨は、「貸借対照表で財政状態を明らかにする」というよ

りも、むしろ、「貸借対照表で伝達された印象を、財政状態（財政状態という用語）と呼ぶ」といった方が正確だというのである。

マウツ（R. K. Mauz, *Basic Concepts of Accounting, Handbook of Modern Accounting, 1970, pp. 1~5*）もほぼ同主旨であり、財政状態とは、資産と負債の配列から引き出される「印象」（ないし「結論」）を表現した「専門用語」であるとしている。

穏健な学者になると、こうなる。またまた有名な彼のメイ（G. O. May, *Financial Accounting, 1951, chap. 13*の冒頭）はいう。

「財務諸表の現在の標準的な形式は、矛盾した目的や思考様式の一連の妥協による不満足な結果である。最も古くかつ長期間にわたって主要なあるいは唯一の公表報告書であった貸借対照表には、かかる性格が最も顕著である。貸借対照表は、その報告者と被報告者とのおのおのの思考様式の妥協の所産である」

メイのようにいえば、一応は、当り障りはないが、彼のいう「矛盾した目的や思考様式」そのものが十分に比較・解明されなければ土台話しにならぬ。

この米書の書誌的な調査研究の過程で、興味ある事実に気がついた。

それは、簿記の定義、目的、基本的な職能等の説明（大体は簿記書の冒頭の部分に出てくるが）に際して、「財産状態」という表現ではなくて、前世紀もとくに後半の簿記書の場合であると、“*financial condition,*” “*the correct financial standing*” といったケースがみられることである。前者の例としては、リブリッジ・ルーズ（D. R. Lillibridge & F. F. Roose）の簿記書（1886, 第2部参照）があり（p. 10）、後者の例としては、イートン・バーネット（A. H. Eaton & E. Burnett）の簿記書（1882, 第2部参照）がある（p. 9）。また、勘定分類に際して、Bryant & Stratton’s Counting-

House Book-Keeping (新版, 第2部参照) のように, Accounts of Finance と Accounts of Business とに分け, 前者につき Financial Statement, 後者につき Business Statement (より正確には, Business Operation Statement と呼ぶ方がよからう) を作らせているようなケースがある。多少とも, 問題は残るが, この両ステートメントの内容は, 前者が貸借対照表, 後者が損益計算書(となる筈)である。第1部の I. (2)を参照されたい。

英書の場合では, Financial or Finance といった用語例はまれである。勿論, 米書の場合でも, 伝統的な表現で, “the true state of (one’s) affairs” とか, “the state of (one’s) property” とする例はある。

第1部の I. (2)でものべたのが, Finance (の勘定群)には, 商品勘定や商品(混合)勘定の原理を援用していく不動産勘定あるいは前払部分のある支払利息勘定等は含まれない(とみる)のが原則であるから, Finance (の勘定群)は現金, 預金, 手形(債権・債務), 人名諸勘定(債権・債務)等となる。そこで, Financial Statement (貸借対照表)を作った場合でも, この計表には資産として商品や不動産類あるいは前払費用に相当の項目が, 当然ふくまれるけれども, これらの諸項目は, いわば Business (Operation) Statement (損益計算書)への残留項目(シュマーレンバッハ流に言えば「未解消項目」として, とりあえず Financial Statement に仮の姿をみせているという事になる。これらの諸項目が機能として本来 “financial” であるという認識ではない。

“financial” とは, 本来, 一貫して, 「金廻り」にかかわる。貸借対照表を Financial Statement 「財務表」というのならばともかく, 損益計算書をふくめて Financial Statements 「財務諸表」(今日用語法での)と複数形に用いるのは, どうも穏当でないように思われる。

他方, 前世紀後半のこの時期の米書の中には, 例えばエルスワース (H. W. Ellsworth) の簿記書(1868, 第2部参照)のように, 「企業(投下)資本とその運動(変化)」という極めてモダンな構想に立脚するものも出現している。冒頭(p.10)にいう。

Book-Keeping considers the capital invested in Business, and exhibits the changes it undergoes in every transaction, etc.

以上のようなケースでは, 「財産」(property)あるいは「財産価値」, 「積極財産」・「消極財産」あるいは「正味財産(身代)」等といった概念をいっさい用いていない。注目すべき傾向である。

### XIII C. C. Marsh の減価償却

「正規の費用計上による減価償却」の事例として, 英書の場合では, W. Inglis の簿記書(Eldridge 1849, Littleton 1861)が著名であり, リトルトン『会計発達史』によりひろく知られている。また, この簿記書は, 加藤 斌訳『商家必用』として刊行されている。

米書の場合, ほぼ同時期に, マルシュ(C. C. Marsh)の簿記書に同様の事例がみられることは, 極めて興味深い。すなわち次掲のものである。

The Science of Double-Entry Book-Keeping, simplified by the application of an infallible rule for journalizing : etc., By C. C. Marsh, New York : 1856.

この簿記書の訳書が明治9年9月刊, 小林儀秀訳『馬耳蘇氏複式記簿法』である。

本書では, Store-Fixtures (小林訳・見世置附道具)につき, 10%の償却を費用に計上して実施しているのである。53頁で次のようにいう。

The account of Store-Fixtures shows that this property has cost us \$300; from

D <sub>R.</sub>			Store		Fixtures.		C <sub>R.</sub>	
1858.					1858.			
Jan.	7	To Cash.....	1	\$ 300 00	April	30	By Profit and Loss	12 \$ 30 00
					"	"	By Balance.....	12 270 00
				300 00				300 00
1858.								
April	30	To Balance.....		\$ 270 00				

which sum we deduct 10 per cent. for the wear, and place the balance (\$ 270) on the debtor side, under the head of "Property and Debts": and the \$ 30 loss we enter under the head of "Profits and Losses," on the debtor side.

元帳面の Store-Fixtures 勘定は、上掲のとおりである (pp.124~125)。

米国人のリトルトンが、自国人のマルシュ (C. C. Marsh) を紹介することなく、わざわざ英国人の W. Inglis の簿記書を引用して費用償却の実例を示したのも、考えようによっては、おかしな話ではある。俚言にいう「灯台もと暗し」。

#### XIV Ira Mayhew の繰延資産

別著『研究』 (pp.346~349) で解題のメイヒュー (Ira Mayhew) の簿記書 (Mayhew's Practical Book-Keeping embracing single and double entry, etc., 1851.) には、繰延資産への認識 (すくなくともその萌芽) がみられる。

この簿記書のタイトル・ページの前に、絵入りの別ページがあり、Book-Keeping applied to Agriculture, Manufactures, Commerce, Banking, and Exchange. Ira Mayhew. Boston: Nicholas & Hall. とある。

この簿記書の前半の部分の農業簿記の解説の第43・44項 (pp.38~39) に注目すべき記述がみられる。この両頁は、Cornfield, 8

Acres 勘定が示されているが、施肥 (manuring) に関して、第44項で次のようにいう。

「このコーンの収穫に際しては、地味が肥えていたので、施肥のための費用のうちの4分の1を当勘定に借記してある。施肥による今期程度の効用は、爾後の3収穫期にわたって期待できる。地味を維持するための費用のうち4分の1だけを、当勘定に借記するゆえんは、自ら明らかであろう」と。

## 第2部 解題

### a Citizen of Philadelphia の簿記書

1809年 (邦暦で文化6年、間宮海峡の発見) に、匿名 (a Citizen of Philadelphia) の簿記書がフィラデルフィアで刊行された。そのタイトルは、次掲のとおりであった。Bentley & Leonard の『書目』には、この小冊子は掲示されていない。

A Course of Book-Keeping, according to the Method of Single Entry; with a Description of the Books, and Directions for Using them: Very useful for Young Book-Keepers entering into Business, or for Teachers in their School, &c. &c.: Extracted from the Works of Charles Hutton, L.L.D. F. R. S. etc. Adapted to the Currency of the United States, by a Citizen of Philadelphia. First improved Edition. Phila-

米古典簿記書の研究 (久野)

(Charles Huttonの簿記書の残高勘定)

1777	<i>Dr.</i>	<i>Balance</i>				<i>Cr.</i>			
	To Mr. J. Elford, due to me		3	4	10	By Mr. R. Barber	18	15	0
	To Mr. Alderman Ableman		25	0	0	By Mrs. Mary Gray	9	8	6
	To Sir Thomas Lawson		11	19	2½	By Mr. Thomas Grey	4	6	6
	To Mr. Nicholas Norton		3	15	4½		32	10	0
	To Mr. Roger Retail		33	5	5				
	To Mr. Conrade Compound		56	19	5				
	To Mr. John Baker		6	7	0				
	To Mr. Samuel Edwards		1	14	6				
	To Mr. Thomas Hunter		5	5	0				
	To Peter Thompson, Esq.		72	2	5¼				
	To Mr. Edward Young		4	17	6				
			124	11	3¼				

(元帳の第11丁の資本勘定)

1809	STOCK	<i>Dr.</i>			1809	CONTRA	<i>Cr.</i>		
12mo31	To N. Norton, due to him		47	77	12mo31	By Amount, Inventory of my Cash and other effects		1576	47½
	To Robert Barber		105	00		By James Elford, due to me		15	36½
	To Matthew Milton		92	00		By Abel Ableman		100	00
	To Mary Gray		48	51		By William Watson		140	00
	To Thomas Grey		122	93		By Thomas Lawson		261	50
	To Balance, my neat Worth		2003	79		By Robert Retail		52	32½
			2420	00		By Conrade Compound		219	57
						By John Baker		12	82
						By Samuel Edwards		4	40
						By Thomas Hunter		9	92
						By Edward Young		27	62½
								2420	00

R

delphia : 1809.

このタイトルの一部の *extracted from the works of Charles Hutton* とあるものは、次掲の簿記書のことである。

**A Complete Treatise on Practical Arithmetic, and Book-Keeping both by Single and Double Entry. Adapted to the use of schools, London : M DCC LXXXV.**

この初版は不明であるが、1778年(5版)、1785年(7版、筆者の手許にある)、1801年(11版)および1834年(18版)が判明している。ハットンは、このほかに次掲の簿記書を刊行している。

**The school-master's guide : or a complete system of practical arithmetic, and book-keeping, both by single and double entry. Adapted to the use of schools, the third edition, 1771.**

**A complete treatise on practical book-keeping. Edited by Alexander Ingram. Edinburgh : 1856.**

ハットン簿記書の *by Single Entry* の部分を底本としたこの小冊子は、まえがき、諸帳簿(日記帳と元帳、当座帳、諸経費帳)の解説、転記、締切と繰越等の説明を合せて、本文は僅かに4頁、あとは、74頁にわたる記帳の難

形からなっている。日記帳と元帳の記帳内容は、人名諸勘定による債権と債務の記録である。この雛形の部分は、ハットンの簿記書147頁以下と同じである。但し金額はドル建にかえてある。また、例えば Lady Strawberry や Sir Jeffery Slingstone のような人名の場合は、Lucy Berry, Jesse Sling と改名してある。

最も注目されるは、ハットン簿記書の残高勘定とこの簿記書の場合の資本勘定である。対比して前頁に紹介する。

ハットンの残高勘定 (*Balance*) は、人名諸勘定の残高を振替えたもので、借方は債権の在り高、貸方は債務の在り高をそれぞれ一覧している。

ところが、この簿記書の資本勘定 (*STOCK*) では、棚卸によって期末の現金その他の財産 (*Cash and other effects*) の在り高を確定し、これを貸方側に掲示し、これに貸方側に振替えた債権在り高を加算し、借方側に振替えた債務在り高を差引いて正味財産 (*net worth*) を算出して貸借を均衡させている。

正味財産 (正味身代) のこのような把握は、同様に単式 (*Single Entry*) といっても、ハットンよりも明らかに一步の前進である。

### シェイスの簿記書

1818年 (邦暦で文政元年、家斉の治世) に、シェイス (*Bryant Sheys, 1750—1835*) の簿記書がニューヨークで刊行された。そのタイトルは、次掲のとおりであった。

**The American Book-Keeper ; comprising A complete System of Book-Keeping ; in the True Italian Form , or By Double Entry : both by theory and practice with the Principal Auxiliary Books annexed. Together with A New Method of Posting and Proving the Books. By B. Sheys, Accountant, New-York : 1818.**

本書は、次の4部分から構成されている。

1. 古典的なイタリア (ベニス式) 簿記の3主要簿制 (当座帳 *Waste Book*, 仕訳帳 *Journal*, 元帳 *Ledger*) による2組の帳簿, *Set No. 1*, *Set No. 2* によって、複式簿記の基礎を説明する (148頁まで)。

2. 主要な補助簿; 仕入帳, 売上帳, 現金出納帳, 経費明細帳, 手形帳, 小切手帳および銀行勘定帳を解説する (189頁まで)。

3. 帳簿 *Set No. 3 (The Third Set of Books)* によって、卸 (小) 売業の実務簿記を解説する。この部分は、とくに、*The Third Set of Books ; being A System of Book-Keeping founded on real business*, というタイトルがついている。ここでは当座帳 *Waste Book*, 仕訳帳 *Journal* といわずに、日記帳 *Day Book* と名づけている。内容は仕訳日記帳 (当座帳と仕訳帳の合体) である。また *Proof Journal* につきのべているが、後述する (269頁まで)。

4. 銀行の業務と簿記 (337頁)。

全体としての印象をいえば、十八世紀風の型にはまった英国簿記 (教科) 書の米国版といった感じのする古色蒼然たるテキストである。とくに、1785年にダブリンで刊行され1811年にニューヨークで米国版が出版されたジャクソン (*William Jackson*) の簿記書 (*Book-Keeping, in the True Italian Form of Debtor and Creditor, by way of double entry : etc.*) を思わせる。内容や構成、あるいは心なしかそのタイトルまでも酷似している。

以下、とくに注目すべき点をのべる。

イタリア簿記 (*Italian Book-Keeping*) に言及し、*Lucas Paciulus* の名をあげ、『ズムマ』の刊行年次につき “*about the year 1495*” としている。1495年とあるのは明らかにケリー (*Dr. Patrick Kelly*) あるいはその種本の *De la Porte* に由来する誤りである。出生地名を付して *Lucas de Burgo*

Sancti Sepulchri の呼称も併記している。  
これは正しい。

財産目録、当座帳、仕訳帳、元帳の順で解説がつづく型どおりの古典的なイタリア簿記である。ここでは、参考のために、4頁の財産目録雑形と解説を紹介しておこう。

FORM OF AN INVENTORY.

New-York, January 1st. 1817.

An Inventory of my whole property, consisting of money, goods and debts, owing to and by me, A. B. taken this day, and is as follows, viz.

I have in ready money		\$1279.75
6 pieces linen, 125 yds. .37½ per yd.	46.87½	} 106.87½
5 ditto 120 .50	60.00	
100 hbbs. wheat flour 12.50		1250.00
50 firkins butter nt. wt. 4000lbs. .20		800.00
Moses Martin owes me per bond.		1364.50
Samuel Hall per account		550.25
John Vallens-		250.75
<b>Gross amount of my property</b>		<b>17117.12½</b>
<i>I am indebted as follows:</i>		
To William Hanway		256.37½
To William Jackson		125.25
To Abraham Wilcox, at 3 months		276.62½
<b>Amount of debts due of me</b>		<b>658.25</b>
<b>Amount of my Property</b>	17117.12½	}
<b>Debts due of me</b>	658.25	
<b>Net of my estate, or what I am worth after paying my debts</b>		<b>16458.87½</b>

Note. 1. It is not necessary that the whole of a Merchant's property should appear in his books; it is sufficient that they contain the capital which he employs in trade.

2. Some begin their books without any Inventory, but we must suppose that they possess no other property than a quantity of money, which they may insert in their Day Book, in one entry, thus:

I have in ready money to begin business, 12794.75

仕訳帳の開始記帳は、資本(主)勘定を相手科目として、資産を借方に、負債を貸方にそれぞれ仕訳する。但し、元帳面の資本(主)勘定口座へは、諸口として合計額を転記してある。

元帳の general balance (総括) について、損益・残高の両集合勘定への振替は、いっさ

い仕訳帳を経由せず直接口座間振替の方式による。但し、振替記入に先立って、損益表 (Profit and Loss Sheet) と残高表 (Balance Sheet) の2表 (two sheets of paper) を作成させている。

英書では、おなじみの(とくに十七世紀以降)方式である。

勘定は、伝統的な, Real, Personal, Imaginary or Fictitious の3分類による。

仕訳帳の様式は、金額欄が伝統的な一欄式であり、諸口の内訳金額を摘要欄に内書する。

元帳各勘定口座の参照頁欄には、仕訳帳の当該頁数を記入する筆者(久野)のいうJ型である。但し、損益・残高の両集合勘定口座は、元帳面の相手勘定口座の頁数を記入する筆者(久野)のいうL型である。

実務簿記 (Set 3., A System of Book-Keeping, founded on real business.) では、Day Book を仕訳日記帳として用いて個別仕訳を行ない、月次に、Proof Journal (と名づけたもの) を作成させている。これは、月間の個別仕訳を「検証」(proof) する手段であるとされているが、同時に、月次総合仕訳帳として総合転記の方向への道を拓くものである。事実、本文 (p. 202) で、"the posting, if posted from Proof Journal, rendered so concise and expeditious," とのべている。転記能率は向上し、元帳面の記帳内容は簡明なものになる。ところが、記帳雑形を検討してみると、例えば現金勘定についてはこの Proof Journal から月次総合転記をしているが、例えば商品勘定については日記帳から個別転記している。総合仕訳帳としての

(左 頁)

(右 頁)

Proof Journal for Jan., 1817	Drs.	Proof Journal for Jan., 1817	Crs.
諸口 借方, 諸口に対して: 日付		諸口 貸方, 諸口により: 日付	
現金, 諸口に対して, 5. 15. 27. 28. 29. 31	31,442 46	現金, 諸口により, 1. 3. 5. 18. 12. 16. 20. 29. 30. 31	6,669 46

機能が十分に発揮されてはいないようだ。単なる“proof”というだけなら、殆ど意味はない。現金勘定について、Proof Journalの実況を示すと、前頁下段のとおりである。

#### ジェスの簿記書

1818年に、ジェス (Zachariah Jess) の簿記書 (算術の書物の末尾に収録) がニューヨークで刊行された。そのタイトルは、次掲のとおりであった。

The American Tutor's Assistant, improved: or a Compendious System of Decimal, Practical Arithmetic; comprising the usual methods of calculation, etc., Compiled by Zachariah Jess. Containing also, a Course of Book Keeping, by Single Entry. New York: 1818.

本文188頁の算術の解説につづいて、a Course of Book Keeping, by Single Entry. というタイトルで、2頁の本文解説と、日記帳 (Day Book) の雛形が10頁、元帳 (Ledger) Aの雛形が11頁あり、最後に元帳Bの雛形が3頁ある。元帳Bは次期の開始記帳を示している。小型本の小冊子である。

人名諸勘定を用いて債権・債務を記録している。元帳末尾の残高勘定口座では、借方側に人名諸勘定の在高を振替えて債権の一覧を示し、貸方側に人名諸勘定の在高を振替えて債務の一覧を示している。1809年の a Citizen of Philadelphia の簿記書にみるような“neat worth”つまり「資本」の認識はない。a Citizen of Philadelphia の簿記書の底本となったハットンの残高勘定と同じである。

なお、元帳残高勘定口座の参照頁欄について、とくに、L. P. という名称を付し、かつ、次のように説明しているのは、興味深い。

L. P. Means the page in which each of these accounts are to be found in the Ledger.

残高勘定以外の人名諸勘定口座の参照頁欄は、D. P. という名称を付している。とくに説明はないが、これは Day Book の Page という意味で、事実、この欄には、日記帳の該当頁が記入されている。筆者 (久野) のいうJ型である。残高勘定口座への振替は日記帳を経由しないので、筆者 (久野) のいうL型となっている。

#### デビスの簿記書

1819年 (邦暦で文政2年、家斉の治世) に、デビス (Benjamin Davies) の簿記書の第2版 (増補) がフィラデルフィアで刊行された。初版は1813年である。そのタイトルは、次掲のとおりであった。

A New and Concise System of Book-keeping, according to the Italian Method of Double Entry. Adapted to the Commerce of the United States. By Benjamin Davies. Second Edition, with Additions and Improvements. Philadelphia: 1819.

本文は僅かに6頁で、内容は簿記の概説、交易、手形、内外国為替の説明、3主要簿 (three distinct books, Waste Book: Journal: Ledger) の説明等である。あとは当座帳 (14頁)、仕訳帳 (13頁) および元帳 (14丁) からなる雛形Aと、次期の開始記帳を示した雛形B (当座帳Bと仕訳帳B) とである。

仕訳帳の金額欄は一欄式であり、借方金額欄と貸方金額欄を区別する二欄式ではない。諸口の金額は摘要欄に内書している。

元帳の丁数欄は、相手勘定口座の元帳の丁数を記入する。筆者 (久野) のいうL型であり、仕訳帳の頁数を記入する筆者 (久野) のいうJ型ではない。損益・残高の両集合勘定口座への振替は、悉く、口座間直接振替の方式を採用しており、仕訳帳を経由していない。

次期期首 (1820年1月1日) における開始記帳は、仕訳帳の上で、開始残高 (残高) 勘定



1819	Dr. Balance		
Dec. 31	To Cash	2	6182 33
	" Bills Receivable	3	660 41
	" James Andrews	4	300 --
	" Merchandize General	5	2200 --
	" Robert Fleming	7	2250 --
	" Robert Turner	8	918 --
	" George Fanshaw	8	376 80
	" Illinois Land	10	320 --
	" James Peters	10	104 --
	" John Savory	10	900 --
	" Mary Jones	11	77 50
	" Market Street House	11	20000 --
	" Jane Strawberry	12	110 --
			34599 04

1819.	Contra	Cr.	
Dec. 31	By Bills Payable	5	9075 --
	" James Simmons	6	3276 --
	" John Oldcastle	13	1379 11
	" Stock for value of my esttne	1	30868 93
			34599 04

**JOURNAL, B.**

*Philadelphia, January 1st, 1820.*

	D.	C.
<b>Sundry Accounts Drs. to Stock, viz.</b>		
Cash for amount of money on hand		6182 33
Merchandize General, for Merchandize on hand		2200 --
Bills receivable		660 41
Illinois Land		320 --
Market street House		20000 --
James Andrews		300 --
Robert Fleming		2250 --
Robert Turner		918 --
George Fanshaw		376 80
James Peters		104 --
John Savory		900 --
Mary Jones		77 50
Jane Strawberry		110 --
		34599 04
<b>Stock Dr. to Sundry Accounts, viz.</b>		
To Bills Payable		9075 --
" James Simmons		3276 --
" John Oldcastle		1379 11
		13730 11

を用いず資本 (Stock) 勘定を相手科目として資産を借方に、負債を貸方に仕訳している。1819年12月31日の残高勘定口座の内容と1820年1月1日の資本勘定口座の内容とが、貸借反対に一致することはいうまでもない。

Ledger A の残高勘定口座の実況と、Journal B の次期開始記帳の実況とを上で紹介しておこう。

**プレストンの簿記書**

1842年 (邦暦で天保13年) に、プレストン (Lyman Preston, 1795—?) の簿記書がニューヨークで刊行された。初版は1831年と推定される。そのタイトルは、次掲のとおりであった。

**Preston's Treatise on Book-Keeping : or, Arbitrary Rules Made Plain : In Two Parts, Adapted to the Use of Academies and Common Schools, with varied examples ; Accompanied with detailed explanations : etc., By Lyman Preston, New-York : 1842.**

この簿記書は、タイトルの一部等に若干の相違はあるが、内容は、別著『研究』(pp. 349~353) で紹介した次掲の簿記書と同じである。

**Preston's Treatise on Book-Keeping : Common-Sense Guide to A Common-Sense Mind. In Two Parts, etc., By Lyman Preston, New-York : 1851.**

**ハリスの簿記書**

1845年 (邦暦で弘化2年, 水野忠邦失脚) に、

ハリス (Nicholas Harris, 1810 — 1879) の簿記書の *Stereotyped Edition* がニューヨークで刊行された。初版は1838年 (邦暦で天保9年) である。そのタイトルは、次掲のとおりであった。

*A Complete System of Practical Book-Keeping, exemplified in Six Sets of Books : journalized daily, weekly, and monthly ; by Single and Double Entry. — applicable to all kinds of business, both Individual and Partnership Concerns. etc., By Nicholas Harris, AM. Stereotyped Edition, New York, 1845.*

2部の構成で、第1部は、序文等につづき、問答形式の *Question on Book-keeping* がある。「教則」に当る部分とみてよい。つづく雛形 Set I では、日記帳と元帳が示され単式簿記の記帳となっている。内容は人名諸勘定による債権・債務の記録であり、残高勘定、*Balance Sheet* (次項のフォスターの簿記書を参照) あるいは資本 (金) 勘定 (a Citizen of Philadelphia の簿記書を参照) は悉く開設していない。雛形 Set II には、現金出納帳、日記帳、元帳Aが示されている。この元帳には人名諸勘定のほか資本 (金) 勘定、現金勘定および *Balance Sheet* (内実は残高勘定) が開設されている。同じ単式簿記でも進んだやり方である。次に *Balance Sheet* を紹介する。

Dr.		BALANCE-SHEET.		Cr.	
1838					
Mar. 31	Cash, . . . . .	5,952 25	John Olmsted,	139	00
	J. Reed, . . . . .	30 00	Charles Sheldon,	204	50
	Catlin & Co., . . .	116 66	Stewart & Co.,	65	00
	Wm. H. Hmlay, . .	19 75	Stock, . . . . .	7,697	16
	H. L. Miller & Co.,	991 00			
	I. M. Hall, . . . . .	442 00			
	Reynolds & Morris,	554 00			
		<u>8,105 66</u>		<u>8,105</u>	<u>66</u>

純損益額は、資本の比較 (正味財産の比較) で測定 (7697ドル16セント) する。このほか若干の補助簿と手形の解説がある。

第2部は、複式簿記である。雛形 Set I の冒頭の部分は *Day-Book and Journal* とあり、左頁が日記 (当座) 帳、右頁が仕訳帳である。この仕訳帳では中央から左右 (借貸) を区別しており、金額欄は左右対照の二欄式である。彼のジョーンズ英国式簿記で提示された形式に類似のものである。

さらに、Set II の仕訳帳 (pp. 143~146) は、伝統的な一欄式のもので、諸口金額は内訳として示しており、Set III の仕訳帳 (*Daily-Journal*, p. 168) は、今日のテキストの定型どおりの貸借二欄式である。さらに、Set III の仕訳帳 (*Monthly-Journal*, p. 176) は、内訳金額欄のある一欄式である。対比して示すと次のとおりである。

Set I (P. 101)

Dr.		Hartford, January 1st, 1837		Cr.	
Jan.					
2	Spalding & Stores,	4	800 00	Merchandise,	1 800 00

Set II (P. 144)

1		Hartford, March 1st, 1837			
1837					
3	Cash, Dr. to Sundries,				
1	Mar. 1 To Stock,		6,000 00		
2	Mar. 6 To Merchandise,		1,800 00		
2	Mar. 6 To Merchandise,		610 00		
					8,410 00

Set III (P. 168)

		Hartford, June 1st, 1837			
2	Merchandise, Dr.				
7	To A.M. Collins & Sons,		2,286 44		
					2,286 44

Set III (P. 176)

		Hartford, June 1st, 1837			
2	Merchandise, Dr. to Sundries,				
7	To A.M. Collins & Sons, 1st., Goods,		2,286 44		
	per Invoice,				
7	Howe, Mather, & Co., 8th, ditto,		1,200 56		3,487 00
9	Bills Receivable, Dr. to Mds.				
2	2nd, Hudson & Putnam, No. 1, 30days,				1,800 00

開始仕訳は、資本 (金) 勘定を相手科目とする方式で、開始残高勘定は用いない。

この元帳で最も注目されるのは、損益勘定 (*Profit and Loss account*) と損益表 (*Profit and Loss-Sheet*) との関係および *Balance-Sheet* である。

合計残高試算表で検算した後、Take a sheet of paper ruled like that for the Trial-Balance, and write at the head of it "Profit and Loss-Sheet" (p.122). さらにいう。Profit and Loss-Sheet, after proved to be correct, may be transferred, verbatim, to be the Profit and Loss account in the Ledger (p.123). この損益表の差額 (純損益) を資本 (金) 勘定に振替えた後に、Balance-Sheet を作ることになる。

この損益表の機能は何か、について立入って検討してみよう。

第1に、損益勘定は期 (月) 末に元帳に開設するのではなく、割引料や手数料等の項目は、期中にすでにこの勘定口座に記帳されている。この際には、仕訳帳を経由する。

第2に、そこで期 (月) 末には、これら損益の差額 net (150+10-80-50=30ドル) を損益表に貸記する。

第3に、期 (月) 末に記帳する給料等を損益表に掲示するとともに、混合商品勘定およびこれと同一原理に従う項目つまり棚卸額と帳尻の比較で損益額を測定するものにつき、この表に掲示する。貸借の差額 To Stock 1800ドル50セントが当期の純利益である。

第4に、損益表にもとづき、元帳面の損益勘定口座の記帳を完成する。may be transferred, verbatim, to be the Profit and Loss account in the Ledger.

第5に、かくして、期 (月) 末における損益勘定口座への振替および当該勘定口座から資本 (金) 勘定口座への振替につき、いっさい仕訳帳を経由しない。

一方、Balance-Sheet は、次期繰越項目の検証手段として採用されているが、これと残高勘定との関連は、必ずしも明確にはされていないし、また、元帳面に残高勘定は開設されていない。しかし、次のような興味ある記述がみられる (p.127)。

Should this Balance-Sheet be copied to

the Ledger ?

It is sometimes copied, and always should be, as that book would be imperfect without it.

この引用文を、内容にそくして補訳すると、こうなる。

「Balance-Sheet をそっくりそのまま引きうつして元帳面に残高勘定を開設するのか」  
「そうする場合もあり、そうすべきである」  
「残高勘定を欠いては、元帳は不完全である」  
損益表 (Profit and Loss-Sheet) と残高表 (Balance-Sheet) の実況を示す。

Dr.		PROFIT AND LOSS-SHEET.		Cr.	
1838					
Jan. 31	To Charges, . . . . .	237 00	Jan. 31	By Real Estate, . . . . .	200 00
" "	" Stock, . . . . .	1,860 50	" "	" Interest, . . . . .	7 50
			" "	" Ship't. to Orleans, . . . . .	420 00
			" "	" Commission, . . . . .	180 00
			" "	" Profit and Loss, . . . . .	30 00
			" "	" Merchandise, . . . . .	1,300 00
		2,137 50			
					2,137 50

Dr.		BALANCE-SHEET.		Cr.	
1838					
Jan. 31	Merchandise, . . . . .	1,000 00	Jan. 31	Bills Payable, . . . . .	12,650 00
" "	Cash, . . . . .	16,833 00	" "	" Hardware Menu. Co., . . . . .	700 00
" "	" Bills Receivable, . . . . .	11,507 50	" "	" Reed & Barber, . . . . .	4,000 00
" "	" Heknap & Harnesby, . . . . .	1,500 00	" "	" Stock, . . . . .	18,900 00
" "	" Spalding & Storrs, . . . . .	800 00			
" "	" Brown & Parsons, . . . . .	1,140 00			
" "	" J. Burt, . . . . .	180 00			
" "	" Wm. H. Imley, . . . . .	1,400 00			
" "	" Andrus, Judd & Franklin, . . . . .	300 00			
		36,220 50			36,250 00

これら two Sheets の用い方は、英書ではおなじみのところである。米書でもこの方式を踏襲するケースが多いが、とくに米書の場合は、Profit and Loss Sheet のことを Statement of Loss and Gain といい、Balance Sheet のことを Statement of Resources and Liabilities という場合もある。これら two Statements も、先の two sheets と同様に、簿記 (記録) の領域のものであって会計報告書ではない。

なお、元帳の参照頁欄には、仕訳帳の頁数

を記入する。筆者(久野)のいうJ型である。

### フォスターの簿記書

1845年(邦暦で弘化2年、水野忠邦失脚)に、フォスター(B. Wood Foster)の簿記書の第4版がボストンで刊行された。そのタイトルは、次掲のとおりであった。

**A Practical System of Book-Keeping by Single Entry, exemplified in two set of books ; containing various forms of Bills, Mercantile Calculations, &c ; etc.,**  
By B. Wood Foster, Fourth Edition,  
Boston : 1845.

初版は、おそらく1843年と思われる。

本文は僅かに4頁で、あとは、1842年10月1日~31日までの記帳の雛形 Set I の日記帳(6頁)、現金出納帳(2頁)および元帳(4頁)と、1842年11月1日の次期期首の開始記帳の雛形 Set II の日記帳(1頁)と元帳B(2頁)からなる。その他に巻末に商事用語(3頁)、手形の様式(4頁)および商業算術(1頁)がついている。ごく小冊子である。

日記帳の開始記帳は、財産目録にもとづき、現金、商品、人名諸勘定、受取(支払)手形および差引資本(Net Capital)を示している。期中は、原始簿として日記帳と現金出納帳を用い、転記簿として元帳を用いる。日記帳で人名諸勘定および受取(支払)手形の増減を発生順にを記帳し、現金出納帳で現金の増減を記録する。元帳面は、人名諸勘定口座および受取(支払)手形勘定口座のみを開設して、債権と債務の明細・増減を記録している。期末に、元帳の末尾に(もしくは別表として)Balance Sheet を開設(調製)する。これは残高勘定に相当するものである。本文の解説では、このBalance Sheet. について次のようにいう。

At the end of the Leger, or on a separate sheet of paper, open the account of

### Balances, etc.

このBalance Sheet の借方側には、元帳面の人名諸勘定および受取手形勘定の借方残高を、その貸方側には、元帳面の人名諸勘定および支払手形勘定の貸方残高を、それぞれ振替える。さらに商品の在 high (棚卸 high) と現金の手許 in high を借方側に追掲する。貸借の差額は期末資本 in high となる。これと期首資本 in high の差額が当期純損益となる。その実況は、次頁上段のとおりである。

#### LEGER.

Dr.		BALANCE SHEET.		Cr.	
1842.			1842.		
Oct.31.	Bals. due me :		Oct.31.	Bals. against me:	
	Edw. Brown, . . . 2	18 75		James Rogers, . . . 1	50 00
	E. D. Rice, . . . 2	9 09		J. B. Allen, . . . 2	3 42
	F. H. Demond, . . 2	14 18		Bills Payable, . . 3	208 00
	C. Frost, . . . 3	142 67			261 42
	H. Kimball, . . . 3	32 45		Amt. of capital,	
	J. H. Foster, . . . 3	43 40		Oct. 1, 1842,	2700 00
	James Johnson, . 3	9 30		Net gain to date,	207 24
	Bills Rec., . . . 3	152 24			
		422 08			
	Mdse. on hand,	1317 07			
	Cash " "	1489 51			
		3228 66			3228 66
	Gross amount of capital,				
	Oct. 31, 1842,	3228 66			
	" " debts I owe,	261 42			
	Net capital, Oct. 31, 1842,	2967 24			
	" " " I, "	2700 00			
	Net gain, . . . . .	267 24			

また、次期期首の日記帳の開始記帳は、次のとおりである。在庫商品の棚卸による明細は、この日記帳で明示されている。その実況は次頁上段のとおりである。

### クリテンデンの簿記書

1846年(邦暦で弘化3年)に、2人のクリテンデン A. F. Crittenden と S. W. Crittenden (1823? - 1884) の共著になる簿記書がフィラデルフィアで刊行された。そのタイトルは次掲のとおりであった。

**An Inductive and Practical System of Double Entry Book-Keeping, on an entirely new plan ; having a general rule,**

DAY-BOOK.—SET II.

Boston, November 1, 1842.

Inventory of my Property, taken from Balance Sheet of Leger A., Oct. 31, 1842, as follows.		
Cash in New England Bank, . . . . .	1489 51	
Mdse., as per Inventory, . . . . .	1317 07	
Edward Brown, . . . . .	18 75	
E. D. Rice, . . . . .	9 09	
F. H. Demond, . . . . .	14 18	
Charles Frost, . . . . .	142 67	
Henry Kimball, . . . . .	32 45	
John H. Foster, . . . . .	43 40	
James Johnson, (Medford, Mass.) . . . . .	9 30	
Bills Receivable, . . . . .	152 24	3228 66
<b>I owe</b>		
James Rogers, . . . . .	50 00	
J. B. Allen, . . . . .	9 42	
Bills payable, . . . . .	208 00	261 42
Net Capital, . . . . .		2967 24
Inventory of Merchandise unsold, present value.		
10 reams Letter Paper, . . . . @ 3.25	32 50	
12 doz. Slates, . . . . . " 3.25	39 00	
12 reams ruled Letter Paper, . . . . " 3.00	36 00	
14 yds. Blue Broadcloth, . . . . . " 4.00	56 00	
18 " " Cassimere, . . . . . " 2.00	36 00	
60½ " Carpeting, . . . . . " 20	12 10	
20 ps. Russia Diaper, . . . . . " 2.00	40 00	
12 bbls. Sperm Oil, net 370 gs., . . . . . " 00	333 00	
10 " N. O. Sugar, . . . . . " 300 00	300 00	
20 boxes Sperm Candles, . . . . . " 8.00	160 00	
20 " B. M. Raisins, . . . . . " 1.50	30 00	
5 chests Souchong Tea, . . . . . " 200 00	200 00	
Sundry articles, as per Inventory-Book, . . . . .	42 47	1317 07

deduced from the definition of debtor and creditor, applied to the journalizing of all transactions : etc., By A. F. & S. W. Crittenden, Philadelphia : 1846.

後に刊行された S. W. Crittenden の簿記書 (1850, 別著『研究』に収録) の先駆をなすものであるが、この単著の簿記書にくらべて、単式簿記を取扱っていない点、全体として内容も記述の方法も大幅に簡潔で、とくに帳簿雛形を多用するいわゆる Set 形式の解説になっている点が目立つ。3頁にわたる序論で、定義、日記帳、仕訳帳、元帳、貸借、仕訳のルール等を略述した後、Set I. ~ X. で3主要簿の雛形を示して解説していく。Set XI. 以下に補助簿の雛形を示している。ここまでが130頁ある。131頁から137頁では、Vocabulary である。141頁から186頁では、帳簿

の実務様式として、仕訳日記帳、各種の多桁式仕訳帳、月次総合仕訳帳、多桁式補助簿、補助元帳等の雛形を示している。187頁から巻末の207頁までが商業算術である。

カマーの2種の簿記書

1847年 (邦暦で弘化4年, 家慶の治世) に、カマー (George N. Comer, 1816—1877) の簿記書の第2版がボストンで刊行された。その初版の刊行年次は、1846年である。そのタイトルは、次掲のとおりであった。

A Simple Method of Keeping Books, By Double Entry, without the formula or trouble of The Journal. Adapted to the most extensive wholesale, or the smallest retail business. etc., By George N. Comer, second edition, Boston: : M DCCC XL VII.

A History of Accounting in America, by Gary John Previts and Barbara Dubis Merino, 1979 (p. 46) によると、東部で活躍した人々として、コルト兄弟 (J. C. Colt, S. Colt), ジョーンズ (Thomas Jones), フォスター (B. F. Foster), パッカード (S. S. Packard), ロジエ (E. K. Losier) およびこのカマー (G. N. Comer) の名をあげている。

タイトルの一部に「仕訳帳を用いない」と称しているが、いわゆるイタリア式の単冊の仕訳帳によらないという意味であり、日記帳 (普通仕訳帳に当る) と現金出納帳 (正確に言えば現金出納仕訳帳) よりなる原初的な複合仕訳帳制の採用で、いわゆる改良イタリア式簿記である。

日記帳の金額欄は、内訳欄をもつ一欄式である。

元帳の参照頁欄の記入は、仕訳帳頁数で筆者 (久野) のいう J 型である。損益勘定口座へ

の振替は、すべて仕訳帳を経由している。資本（金）勘定に相当するものを Merchant. 勘定と称している。損益勘定差額をこの勘定に振替える。残高勘定口座は開設しない。仕訳帳面で、資産諸勘定を貸方に、負債諸勘定と資本勘定を借方に、直接的に対照・仕訳して元帳に転記する。従って、元帳面の残高勘定は自然消滅しているのである。なお、日記帳での開始記帳でも、資産項目を借方に、負債項目を貸方に対置して仕訳をしており、資本（金）勘定（Merchant.）を相手科目として仕訳する様式は採用していない。これらの点がとくに注目される。

この簿記書では、“Such as are commonly used”として、仕訳帳（The Journal）の4雑形を併せて示している。この4雑形は、いずれも単冊の仕訳帳であるが、金額欄の様式に特色を示している。

第1型は、開始記帳に際して、資本（金）勘定（Merchant.）を相手科目として、資産を借方、負債を貸方に仕訳している。金額欄は、中央から左右を区別した貸借二欄式である。例のジョーンズ英国式で示された様式である。

第2型は、内訳欄をもつ一欄式である。

第3型は、右側に貸借二欄を並べた今日のテキスト風のもので、かつ、総合仕訳を併用している。

第4型は、現金、商品および諸口を区別した6欄よりなる多桁（欄）式仕訳帳である。

1869年（邦暦で明治2年）に、カマーの第2の簿記書がボストンで刊行された。手許にあるのは、その48版（1875）である。短日時に多くを重版している。

*Book-Keeping Rationalized : Adapted to all kinds of business,—personal and partnership, commission and corporate. etc.,* By George N. Comer, A. M., Accountant ; Author of Double Entry Book-

Keeping without the journal, etc., : Founder, and for thirty-four years past, President, of Comer's Commercial College, Boston. Forty-Eighth Edition-Revised, Boston : 1875.

日記帳（Day Book）について「現金取引を除く総ての取引の原始記入帳」（book of original entry, for all transactions excepting cash）とのべ、現金出納帳（Cash Book）について「すべての現金取引の原始記入帳」とのべているところから明らかなごとく、普通仕訳帳としての日記帳と、特殊仕訳帳としての現金出納仕訳帳（多桁式）からなる複合仕訳帳制、つまり、いわゆる改良イタリア式簿記である。

日記帳（正確に言えば仕訳日記帳）は、右側に貸借二欄の金額欄をもつ定型である。とくに注目されるのは、開始記帳と月（期）末の実体諸勘定の balancing である。すなわち、開始記帳では、資産諸項目を借方に、負債諸項目および貸借差額としての net capital（資本主人名勘定）を貸方に仕訳する。この仕訳につき資本（主）勘定を媒介する方式は採用しない。また、月（期）末における実体諸勘定の balancing についても、日記帳面で、資産諸勘定の残高を貸方に、負債諸勘定および資本（主）勘定の残高を借方に、それぞれ仕訳して、元帳に転記する。元帳面に残高勘定は開設しない（する必要がない）。いわゆる英米式決算法へのプロセスともみられ注目される。これらの資料を、次頁に紹介する（p.13, p.24）

元帳での参照頁欄の記入は、D1, C2 のようになっており、前者は日記帳の1頁、後者は現金出納帳の2頁である。筆者（久野）のいうJ型である。

帳制は単純であるが、仕訳・転記の解説は詳細で取引例にそくして明記してあり、わかり易い。

DAY BOOK. 1

Boston, 1st January, 18— (The year to be inserted by the student.) Drs. Crs.

SCHEDULE OF ASSETS.		
1	Merchandise, per Stock Book	\$ 12500 00
2	Ship Sultana, my 5-16ths. Cost	13300 00
3	Real Estate at Brookline, valued at	10000 00
4	Cash, per Cash Book	350 00
5	Bank of Commerce, on deposit	8000 00
6	Bills Receivable, per Bill Book	2700 00
7	Albert Knowles owes me	075 00
8	Robert Vanevar " "	687 00
9	Samuel T. Gordon " "	530 00
10	Hollis Bros. & Co. " "	478 00
11	Henry Underwood " "	450 00
		49,250 00
SCHEDULE OF DEBTS.		
12	Bills Payable, per Bill Book	5300 00
13	William Jones due	2000 00
14	Quincy, Duce & Co. " "	1800 00
15	Daniel Davis " "	050 00
16	George N. Comer Net Capital,	38000 00
		49,250 00

The figures in this column refer to the page of the Ledger to which the entries have been posted.

31st.		
Schedule of Assets, to be credited, <i>pro forma</i> , to their respective accounts, to balance the books —		
1	Merchandise per Stock Acc. taken this day	5700 00
2	Ship Sultana, my 1/4th, appraised at	11000 00
3	Real Estate at Brookline, " "	10300 00
47	Real Estate at Chelsea, 3 lots, " "	3000 00
4	Cash, per Cash Book	200 21
5	Bank of Commerce, on deposit	3900 25
43	Bank of the Republic, on deposit	0735 23
6	Bills Receivable, per Bill Book	17463 57
27	Fitchburg R. R. Stock	4000 00
35	Life Insurance Policy, N. E. M. L. Ins. Co.	8000 00
37	Shipment to St. Thomas	8187 50
44	Shipment to London	4020 00
		\$82,702 76
Schedule of Debts, to be debited, <i>pro forma</i> , to their respective accounts, to balance the books —		
12	Bills Payable, per Bill Book	12025 00
29	Suspense	8000 00
42	Vaughn Lloyd, on book account	2622 46
45	H. & H. Parkinson, " "	040 83
		24,694 31
		58,008 45
		\$82,702 76
16	George N. Comer, Net Capital	58808 45
		\$ 104227 76
		104227 76
21 PROFIT AND LOSS,		
Cr.		
1	For Gain on Merchandise	3231 13
2	" " " Ship Sultana	4000 00
26	" " " Farm in Watertown	512 00
27	" " " Fitchburg R. R. Stock	100 00
34	" " " Shipt. to Philadelphia	402 08
40	" " " Commission	729 67
41	" " " Guaranty	325 50
47	" " " Real Estate at Chelsea	1935 00
21	Dr.	11380 18
3	For Loss on Real Estate at Brookline	355 00
28	" Expense	1700 00
32	" Interest	41 21
16	" George N. Comer's Net Gain to close	2108 91
		8808 45
		8808 45
		\$ 120678 30
		120678 30

帳である。

Day Book (日記帳) の実体は、前述のように、正確には Journal Day Book (仕訳日記帳) に相当するものである。前述のいわゆる改良イタリヤ式簿記による複合仕訳帳制の場合を Day Book といい、単一仕訳帳の場合を Journal というように用語を使い分けている。その主旨がどこにあるのかは不明である。

92頁ないし99頁は、Partnership Set. The Books of Comer & Co. の帳簿雛形による解説となっており、100頁ないし149頁は、商業算術である。以下に補遺がつく。全巻で168頁の小型本である。

なお、1886年に Comer's New Book-Keeping. (revised ed., 1893) がポストンで刊行されているが、このカマーは Charles E. Comer であり、別人である。その序文に、前掲の Book-Keeping Rationalized : etc. を底本とした旨の記事がみえている。その詳細は省略する。

### フルトン・イーストマンの簿記書

1853年(邦暦で嘉永6年、ペリー来航)に、フルトンとイーストマン (Levi S. Fulton, 1825—1895, and Geo. W. Eastman, 1815—1895) 共著の簿記書(小型本)の改訂第6版がニューヨークで刊行された。初版は1848年である。そのタイトルは、次掲のとおりであった。

A Practical System of Book-Keeping by Single and Double Entry : etc., By Levi S. Fulton and Geo. W. Eastman, Sixth Edition, New York : 1853.

初編、第2編および第3編からなる。第3編(pp. 277~296)は、為替手形、約束手形、動産手形、社債、小切手、動産抵当、売渡証券、代理委任状、権利譲渡証券、抵当証券の

すすんで、77頁以下では Journal (仕訳帳) を解説しているが、彼のいう "I have introduced what I consider to be the best form of journal," とは、商品勘定、現金勘定および諸口を区別した6桁式の多桁式仕訳

解説であるから、ここではとりあげない。

序文の一節に、「簿記は子女の教育の重要な一部門である」とか、「読み、書き、算用に次いで重要である」なぞとのべているのが、いかにも時代を反映している。

初編は、農家、職人、商家に分けて簿記の内容を区別して記述してある。農家の場合は、単冊 (requires but one book, p.11) の帳簿に人名諸勘定を開設して債権・債務を記録する。職人の場合は、日記帳と元帳とにより同様に人名諸勘定による債権・債務を記録する。商家の場合は、日記帳 (当座帳)、仕訳帳、元帳および現金出納帳により同様に人名諸勘定による債権・債務および現金出納を記録する。用語、形式等で複式簿記を踏襲しているが、内容は、いずれも単式簿記である。

第2編には、複式簿記というタイトルがみえている。日記帳、仕訳帳および元帳の3主要簿と、現金出納帳、仕入帳、売上帳、手形記入帳等の補助簿が雛形をもって解説されている。また、**general rule for journalizing** (pp.172~173) として、取引と仕訳の例題がある。rule ではなくて、むしろ、例題と解式である。

仕訳帳の金額欄は、貸借二欄式である。

元帳勘定口座の参照頁欄には、仕訳帳の頁数を記入する筆者 (久野) のいう J 型である。但し、損益勘定口座への振替および損益勘定から資本勘定への振替は、仕訳帳を経由せずすべて直接口座間振替であるので、この場合は、摘要欄に「損益 (Ledger)」と書いて、参照頁欄には損益勘定口座の頁数を記入する。

残高勘定は開設していないが、Balance Sheet を作る。これは財務表ではなく、Balance Account に外ならない。228頁の末尾にいう。

“the balances transferred to Balance Sheet, the Ledger is said to be balanced and closed.”

### アダムスの簿記書

1849年 (邦暦で嘉永2年) に、ボストンでアダムス (Daniel Adams, 1773—1864) の簿記書が刊行された。タイトル・ページの裏に、Entered according to Act of Congress, in the year 1849, by Homer French, etc. とあり、フレンチ (Homer French, 1824—1888) が著者であるようにも思えるが、「まえがき」の裏面の記事から推して、著者はアダムスであると考えられる。手許にあるのは1854年版で、そのタイトルは、次掲のとおりであった。

**Adams's Book-Keeping,—Book-Keeping, containing a lucid explanation of the common method of Book-Keeping by Single Entry ; etc., Boston : 1854.**

主要簿 (*Principal Books*) として日記帳と元帳を用い、人名勘定により債権と債務を、「単記入 (single entry)」によって元帳面に記帳してゆく。典型的な単式簿記である。補助簿 (*Auxiliary Books*) として、現金出納帳、手形帳、仕入帳、当座帳等を採用している。もっとも、主要・補助という術語のこういった使い方は正しくないが。

債権と債務の記録のほか、その他の資産と負債につき、全面的に棚卸法 (財産目録法) を適用して在高を確認し、**Balancce Sheet** を調製する。

Set 形式の記帳雛形が充実した簿記書で、単式簿記 (だけの) のテキストとしては、めずらしい。タイトルの一部や本文中に、しばしば、“A new, concise, and common sense method of book-keeping by single entry ;” といった表現が出ているのも御愛嬌である。

### バルマーの簿記書

1855年 (邦暦で安政2年、江戸大地震) に、バルマー (Joseph H. Palmer, 1824—1892)



の簿記書の第8版がニューヨークで刊行された。初版は1853年である。そのタイトルは、次掲のとおりであった。

**A Treatise on Practical Book-Keeping and Business Transactions ; embracing the Science of Accounts and their extensive applications. Designed as A Class Book for Academies and Schools. By Joseph H. Palmer, A. M., Eighth Edition New York : 1855.**

内容的には、初級の教科書といった体のものである。“Book-keeping is the Science of Accounts.”ではじまる。この Science of Accounts という表現は、この時期によくみられた。

単式簿記の概説につづき、11頁以下が複式簿記となっている。以下、注目すべき諸点をのべる。

仕訳帳での開始仕訳は、資本(主)勘定を相手科目とする伝統的な方式によらず、また、開始残高勘定の方式も採用していない。直截に、資産を借記し、負債と資本(金)を貸記している。13頁から、その状況を次に示す。

New York, Jan'y 10, 1851		Dr.	Cr.
4	諸口 (現金)	800	60
7	(受取手形)	600	00
3	(商品)	750	00
9	(J.L.ジャクソン)	340	50
8	(支払手形)		67 40
9	(W.ベイジ)		95 75
21	(資本金)		2,327 95

Balance Sheet の解説が45頁以下にみえている。本書での Balance Sheet は、英書によくみられた例の Balance (Proof) Sheet と Profit and Loss Sheet を合併したものに相当する。各勘定の締切・繰越、あるいは損益勘定口座への振替(但し、残高勘定口座は開設しない)の記帳は、すべて、この表から行なう(Directly from this sheet all of the various accounts are balanced in following manner : etc., p. 46)。Balance Sheet

の実況を、次に紹介する。

BALANCE SHEET—FOURTH PART OF EXERCISE I. JAN., FEB. AND MARCH.			
Assets Accounts.		Resources, Liabilities, Gain and Loss Accounts.	
Cash, Dr.....	\$131.53	Misc. Cr.....	\$100.00
Cr.....	2061.54	Unsold, 1861.00—	3020.00
Bills Rec., Dr.....	1035.00	Dr.....	2701.00
Cr.....	430.75	Real Estate, Cr.....	500.00
Wm. Page, Dr.....	130.84	Dr.....	300.00
Cr.....	121.33	Interest, Dr.....	8.35
J. L. Jackson, Dr.....	340.50	Cr.....	5.00
Cr.....	272.70	Charges, Dr.....	54.50
Bills Pay., Cr.....	637.80	Profit & Loss, Dr.....	200.00
Dr.....	637.80	Net Gain (Stock).....	100.00
Misc Unsold.....	1500.00		
Original Capital, 2327.93			
Net Gain.....	100.00	4527.80	
		2527.80	2527.80
			457.00 457.00

ブライヤント・ストラットン・パッカードの簿記書 (“Counting House” edition)

1863年(邦暦で文久3年)にブライヤント・ストラットン・パッカード(H. B. Bryant, H. D. Stratton, S. S. Packard)の簿記書の “Counting House” edition がニューヨークで刊行された。そのタイトルは、次掲のとおりであった。

**Bryant & Stratton's Counting House Book-Keeping : etc., By H. B. Bryant, and H. D. Stratton, and S. S. Packard, New York : 1863.**

「まえがき(Preface)」の冒頭で、1859年に三著者達が簿記書のシリーズを刊行する企画を立てたことをのべている。このシリーズが別著『研究』で紹介した簿記書の三部作で、一般に、“Common School” edition, “High School” edition および “Counting House” edition とよばれている。

1860年の夏に最初に出版されたのが、“High School” editionで、その翌年に “Common School” edition が出た。“Counting House” edition の出版は1863年であった。

また、この「まえがき」でとくに、次のようにのべている点が注目される。

The first two books of this series were intended mainly to teach the theory of



米国古典簿記書の研究 (久野)

On the 31st of January.

Resources.		Liabilities.	
Cash . . . . .	4420 75	J. D. Comstock . . . . .	96
Bills receivable . . . . .	57 50	Bills Payable . . . . .	1235
H. D. Stratton . . . . .	20	Stock . . . . .	4624 75
E. G. Folsom . . . . .	115		
Merchandise . . . . .	1353		
	5955 75		5955 75

Statement of Losses and Gains.

MERCHANDISE	Returns from Sales . . . . .	1706	25		
	Anticipated returns (mdse. unsold) . . . . .	1333	50		
	Total Returns . . . . .	3039	75		
	Cost . . . . .	2731			
	Gain on Merchandise . . . . .			308	75
EXPENSE	Outlay . . . . .	184			
	No Returns . . . . .				
	Loss on Expenses . . . . .			184	
	Net Gain . . . . .			124	75

Set I. の末尾のGeneral Remarks (p. 37) の冒頭には、極めて注目すべき次の記述がみられている。

「前出の元帳残高勘定をみれば、1月31日(期末)現在におけるこの企業の資産と負債がすべてわかる。2月1日(次期期首Set II.)に新帳簿を開設するに際し、それに必要な情報の悉くが判明している。そこで、個々の資産・負債の残高をこの勘定に振替えるかわりに、それらの残高を直接次期に繰越せば (bring down) 足りる。本書では、以下にこの方法を採用した。残高勘定を開設する実務上の必要性のないことは自明である。残高勘定を開設する唯一の目的は、資産と負債とを一個の勘定科目 (under one title) で示すことにあるのである。実務上で残高勘定が開設されることはまれであった。この勘定の内容は、別個の Balance Sheet として示される。本書では、以下の随所に、さまざまな形式の Balance Sheet を示しておいた」

残高勘定の廃止、いわゆる英米式決算法への方向が明確になっている。Set II. Set III. では残高勘定を開設していない。ただし、Set IV. ではこの勘定を開設している。

Set II. は、Set I. (1859年1月) のつづき (Continuation of Set I. 1859年2月) である。残高勘定は開設していない。また、補助

簿として、現金出納帳、受取手形記入帳、仕払手形記入帳が登場している。

Set III. は、Set II. のつづき (Continuation of Set II, 1859年3月) である。

Set IV. は、仕訳日記帳制 (Journal Day Book) を採用している。売上帳、仕入帳等の補助簿も登場する。企業形態としては、partnership business である。

仕訳日記帳の様式は、今日のテキストの定型そのままである。摘要欄に勘定科目を左右に区別し、右(貸方)を一段下げて書く。取引の歴史記録を同欄の下に小書きする。金額欄は貸借二欄を区別してある。金額欄は縦二本線を用い、ケイ線はすべて赤記等。参照頁欄は左端に開設されており、イタリア(ベニス式)簿記の伝統形式に忠実である。この点だけが、今日のテキストの定型と異なっている。その実況は、次のとおりである。

1 JOURNAL DAY BOOK,—SET IV.  
NEW YORK, APRIL 1, 1859.

H. B. Bryant and H. D. Stratton have this day entered copartnership, under the style and firm of "Bryant & Stratton," in the prosecution of a general Commission and Grocery Business; to invest in equal amounts, and participate alike in gains and losses.			
2	CASH Dr. To H. B. BRYANT . . . . .	10000	10000
	For amount of his investment.		
2	EAST RIVER BANK Dr. To H. D. STRATTON . . . . .	10000	10000
	For amount of his investment.		
1	STORES AND FIXTURES Dr. To SUNDRIES . . . . .	12500	
	Bot of H. B. Bryant his store and fixtures.		
1	To MORTGAGE PAYABLE Assumed mortgage on the property . . . . .		9000
1	" INTEREST Due on mortgage to date . . . . .		84
2	" CASH For balance . . . . .		3416
3	MERCHANDISE Dr. . . . .	3900	3900
	To Horn & Co. . . . .		
	Bot on % . . . . .		
	8 casks Brandy, 300 gals. @ \$1 . . . . .		800
	200 lbs. Mass Pot. @ \$4 . . . . .		800
	\$2,000 lbs. Bacon Sides, @ 5c. . . . .		1000
3	EXPENSE, Dr. . . . .	75	75
2	To CASH . . . . .		
	Paid for set of Books.		
4	Mdse. Co. A. Dr. To SUNDRIES . . . . .	8500	
	Received from Logan, Wilms & Co., Pitts-		
	burgh, to be sold on our joint % and		
	risk, each \$ . . . . .		3400
	800 kegs Nails, @ \$3 . . . . .		2400
	20,000 lbs. Lead, @ 7c. . . . .		1400
4	To LOGAN, WILMS & Co. Their invoices as above . . . . .		8800
	" CASH, Paid freight . . . . .		100
5	Mdse. Co. B. Dr. . . . .	4000	4000
3	To NILES & KIRBY . . . . .		
	Received from N. & K. Buffalo, to be sold		
	on our joint % and risk, each \$ . . . . .		4000
	800 bbls. Flour, @ \$5 . . . . .		
2	CASH Dr. To Mdse. Co. A., . . . . .	1400	1400
4	Bold Wm. H. Woodbury,		
	400 kegs Nails, @ \$3 50 . . . . .		
		45775	45775

元帳の末尾には、残高勘定が開設されている。

元帳（4頁）には、損益勘定が開設されている。

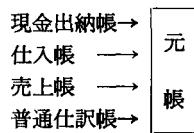
これら両集合勘定口座への振替は、悉く仕訳日記帳を経由しており、従って、これら両集合勘定口座の参照頁欄には、仕訳日記帳の頁数が記入されている。

ついで、**Balance Sheets** が登場するが、内容は、**Set I.** と **Set IV.** の精算表（**work sheet**）である。その形式は、フェアバンクスの簿記書の解題で示してあるものと同じである。

補助簿の解説も充実している。

**Set V.** では、輸入卸業を対象して、現金出納帳、仕入帳および売上帳を補助簿兼仕訳帳（特殊仕訳帳）として利用する複合（分割）仕訳帳制を採用している。

元帳への記帳は、総合仕訳帳を経由せず、各々、直接転記（**direct source of posting**）している。



**Remarks on Set V.**(p.128) の冒頭で、次のようにいう。注目すべき記述である。

**The particular feature in this set consists of the manner and form of original entries, which are made in separate books, —elsewhere used as auxiliaries,— from which they are either journalized, or passed directly to the Ledger at stated periods. This method has many advantages over consecutive entries in the Day Book, and, in one form or other, is adopted generally in all large establishment.**

米国最初の簿記書であるミッチェル(**William Mitchell**) の **A New and Complete**

**System of Book-Keeping, etc.** (1796) 以来の方式である。また、1789年にロンドンで刊行の元米国人ブース (**B. Booth**) の簿記書では、複合仕訳帳制に月次総合仕訳帳を媒介する帳制を採用した。重複転記 (**cross entry**) を防ぐ上から、この帳制の方がすぐれている。

**Remarks on Set V** (p.128) では、複合（分割）仕訳帳制における重複転記の危険について、実に明確に、次のようにいう。

**The only difficulty in the way of using special books for original entries lies in the danger of making the entries in the different books conflict with each other upon the Ledger..... (etc.)..... The difficulty of which we have spoken will now be apparent ; as, in every case involving any two of these books, the tendency will be to debit and credit the same accounts twice etc.**

商品を現金で仕入れ、あるいは、現金で売却したような場合、現金出納帳と仕入帳、現金出納帳と売上帳にそれぞれ記帳される。これらの補助簿を兼仕訳帳として、つまり特殊（分割）仕訳帳として用いる場合、それぞれの特殊（分割）仕訳帳からともに元帳に転記したとすると、一取引が重複して (**the same accounts twice**) 記帳されてしまう。

特殊仕訳帳から直接元帳に転記する際に生ずる重複転記の危険を指摘するとともに、この **Remarks** では、その防止策 (**To avoid this difficulty**) として、次の二法を示している。

(その1) 相殺勘定 (“**neutralizing**” **account**) の方式。

(その2) いずれかの特殊仕訳帳に優先権 (**supremacy**) を与える方式。

前者の場合で、例えば、現金×× 商品 (売上) ×× (**Cash Dr. To Merchandise.**) のような取引では、現金出納帳に借方・現金勘定に対応する貸方・相殺勘定を開設する。売上帳にも貸方・商品 (売上) 勘定に対応す

る借方・相殺勘定を開設する。双方の特殊仕訳帳から元帳に転記しても、相殺勘定の貸借に等額が記帳され、元帳面では中和・相殺される。商品をAに売却したような場合には、売上帳でA勘定に借記し、現金出納帳でA勘定に貸記 (In the Sale Book the entry would be "A" Dr., and in the Cash Book, "A" Cr.) する。

後者の場合で、この現金取引につき現金出納帳に優先権を与えたとすれば、この取引についてはすべて現金出納帳から元帳に転記する。この取引は同時に売上帳にも記帳されているが、売上帳からは元帳に転記しない (*but not posted*)。

今日の日本の簿記テキストの解説では、以上のいずれの方式も採用してはいない。例えば片野一郎博士著『簿記精説』(上巻, 270頁)では、次のようにいう。

「売上帳と現金出納帳とに重複仕訳される。ゆえに、現金出納帳から売上勘定口座へ転記せず、また売上帳から現金勘定口座へ転記しない。」

Remarks (p. 129) は、以上の二法を比較して、次のようにいう。

「上記の方式には、それなりの利点があるが、後者の方式が、そのより簡易かつ直截さのゆえに、一般に受け入れられている」と。

「単式簿記から複式簿記への転換」(pp. 151~168)につづき、農業簿記(Farm Accounts: including practical form of Journal, and other new features.)を説明している。

ここにいう仕訳帳の実務の様式とあるもの内容は、作業(Farm)、現金および諸口の金額欄を区別して開設した多桁式(6桁式)仕訳帳である。この部分をそっくりとり入れて、前田貫一著述『農業簿記教授書』(3巻)が明治14年に有隣堂から刊行されている。

農業簿記につづいて、代理店(Agencies)の支配人(Administrator)の簿記が解説し

てある。とくに目立ったところもないが、元帳雛形をみるのに、摘要欄の記入(とくに相手科目の記入)がすべてなく、もともと摘要欄そのものが開設されていない。元帳面の記帳の内容は、各勘定口座に、日付と金額のみとなっている。元帳の機能(勘定別の分類統計)からみてこれで必要かつ充分である。

以下は省略する。

#### ハナフォード・ペイソンの簿記書

1864年(邦暦で元治元年)にハナフォード・ペイソン(L. B. Hanaford, 1818—1896, and J. W. Payson, 1815—1889)共著の簿記書がボストンで刊行された。そのタイトルは、次掲のとおりであった。

Book-Keeping, Single and Double Entry. For Schools and Academies, etc. By L. B. Hanaford, A. M. and J. W. Payson, Boston : 1864.

1864年版が幾版なのか不明であるが、諸般の事情からみて、初版は1859年と推定される。

本書の構成は、序論、単式簿記(First Set, Second Set)、複式簿記(First Set~Third Set)となっている。教則と雛形からなり、しかも、雛形については業種別もしくは帳制別に Set として解説してゆく米書の定型をなしている。筆者(久野)は、Set 形式と一応呼んでおく。この Set 形式が最も充実してくるのが、フェアバンクス(Lorenzo Fairbanks)の簿記書(1866)やブライヤント・ストラットン・パッカード(Bryant, Stratton and Packard)の簿記書(とくに“Counting House” edition 1869)等のケースである。

本書は、Set の数も少なく、全般的にみて、初歩的なテキストであり、とくに簿記学習用のテキストである。内容的にみてそうであるばかりでなく、著者自身が意図しているところでもある。タイトルの一部をみても明らか

であり、また、序論の「まえがき」の冒頭にも、普通教育の一環としての簿記学習の重要性がひろく一般に認識されるようになっていくこと、また、この学習のためのテキストの社会的要請が高まっており、本書がその要請に応えたものである旨が明記されている。

以下、複式簿記 (pp. 47~140) について検討する。

複式簿記の **First Set** の冒頭で仕訳帳に関し、**First Form**, **Second Form**, **Third Form** を区別してのべている。

**First Form** とは、現金出納帳に記帳される現金取引をふくむすべての取引を仕訳するのと比べると、「しかし、かかる仕訳の様式は、実務家にはむかない」と断わっている。本書の **First Set** でこのような仕訳帳を採用しているのは、「初心向の教育」を主としているとのべている。

**Second Form** と **First Form** の仕訳帳の様式の相違は、前者が金額欄の貸借を区別した二欄式であるのに対して、後者が内訳金額欄を開設した一欄式のものであるという点と、現金取引を現金出納帳から仕訳帳の末尾に総合仕訳をしている点にある。まことにたわいがない。

**Third Form** とは、複合仕訳帳制で、雛形 (**Third Set**) では、仕入帳、売上帳等の補助簿が登場してくるほか、仕訳帳 (**Third Form**) では、**Second Form** で現金勘定について行なったように、月(期)末に、商品勘定、受取手形勘定、支払手形勘定、営業費勘定についても総合仕訳を行なっている。なお、3様式の仕訳帳のいずれもが、開始記帳に際しては、資本(主)勘定を相手科目として、諸資産を借方に、諸負債を貸方に、それぞれ仕訳している。

仕訳のルール (**Rules for Journalizing**) は、単純化されており、次の4つである。

#### Rule 1. 一開始記帳

「開始時点における手許諸財産および債権

(人名勘定) は、資本(主)に対して借方、資本(主)は、債務(人名勘定)に対して借方」

#### Rule 2. 一財産

「受取ったものは、与えたものに対して借方」

#### Rule 3. 一債権・債務(人名勘定)と財産

「受取った人もしくは物は借方、与えた人もしくは物は貸方」

#### Rule 4. 一損益

「損益勘定は、損失につき借方、利益につき貸方」

前稿「XIX. 仕訳のルール、第2節 仕訳のルール、その展開と課題」(『経済論集』第17巻・第2号)でのべたように、複雑化したルールが再び単純化していく典型である。

ブライヤント・ストラットン・パッカードの3種の簿記書でもおなじみの **Second Trial Balance** も登場している (p. 69)。

転記の正確性を検証する目的でいわゆる **First Trial Balance** が作られるのであるが、ついで資本(主)勘定と残高勘定とにつき、**Second Trial Balance** (福沢の『帳合之法』ではこれを「第二平均之改」と訳している)を作る。**Set Third** について示すと、次のとおりである。

資本(主)勘定		残高定勘	
貸方……………\$	3952.93	借方……………	3900.63
借方……………	338.56	貸方……………	286.26
残高……………\$	<u>3614.37</u>	残高……………	<u>\$3614.37</u>

いうまでまなく、これら両勘定の残高は、正味資本高 (**net capital**) を示す。この第二試算表 (**Second Trial Balance**) で検算した後、資本(主)勘定の残高を残高勘定に振替えて元帳面の総勘定の締切(この用語は、しばしばいうように適切でないが)を完了する。

元帳各勘定口座の参照頁には、元帳面の相手科目の勘定口座の頁数を記入する。筆者

(久野)のいうL型である。米書としては珍しいと思う。

### フェアバンクスの簿記書

1866年(邦暦で慶応2年)にフェアバンクス(Lorenzo Fairbanks, 1825—1897)の簿記書がフィラデルフィアで刊行された。そのタイトルは、次掲のとおりであった。

*The Science and Practice of Book-Keeping, by Double and Single Entry. By Lorenzo Fairbanks, A.M. Philadelphia: 1866.*

このほかに、1851年に *A complete system of practical book-keeping by double entry etc.* をボストンで刊行しているが、手許にはない。

全巻443頁に及ぶ大型本であり、また内容的にも注目すべき諸点があり、質量ともに充実している。

巻頭にまず「索引」があり、「目次」がないという少々風変わりな体裁になっている。

序論(pp.7~28)の内容は、次のようになっている。序論「まえがき」というよりも「簿記教則」といった体のものである。

定義、勘定体系(material or property accounts, personal accounts, profit and loss accounts), 取引の要素分解, 借方と貸方, 仕訳の法則, 諸商事の解説, 帳簿(日記帳, 仕訳帳, 仕訳日記帳, 元帳, 私的元帳, 現金出納帳その他の補助簿), 仕訳手続(仕訳の様式と転記), 元帳の勘定口座, 元帳の均衡(試算表), 資産と負債, 損失と利益, 諸計表, 元帳の締切, Balance Sheet.

上記に関し、特に注目すべき諸点を検討してみよう。

まず、諸計表とあるものの内容は、Statement of Loss and Gain と Statement of Resources and Liabilities である。これら

は、今日のいわゆる財務諸表であるかどうか。否である。23頁で次のようにいう。

The statement should be made preparatory to closing the Ledger, in all cases, till the learner has become perfectly familiar with the process.

そこで、この二表と試算表および棚卸(表)を一表の形式(a tabular form)で総括・統合すると、今日の精算表(work sheet)となる筈である。そして、この精算表に相当するものが、この簿記書その他多くの米書のいうBalance Sheetなのである。

「元帳締切の心得」(Directions for Closing the Ledger)でいう。

手許財産の実地棚卸をし、まだ開設していなければ損益勘定口座を開設し、また残高を元帳面で一勘定口座に集めようとする場合には残高勘定口座を開設する(傍線は久野)。この説明にある傍線の部分とはくに注目される。以下、損益(名目)諸勘定を損益勘定に振替え、損益勘定の差額を資本(主)勘定に振替え、最終的に残高勘定に振替・集合する手続を解説している。この場合、赤記(red ink)して直接口座間に振替えており、資産・負債・資本の次期への繰越は、黒記(black ink)して貸借反対側に“carried them forward”(繰越す)とのべている。明らかに、いわゆる「英米式決算法」である。さらに、24頁では、Closing by Journal Entries というタイトルで、他の方法(another method of closing the Ledger)が解説してある。すべて仕訳帳を経由して締切を行っており、資産・負債・資本の各勘定の取扱いに関していえば、いわゆる「大陸式決算法」である。

ついで、Balance Sheet を説明して次のようにいう(p.24)。

このSheetは、a tabular form (一表の形式)で、試算表、棚卸(表)、損益勘定および資本勘定等よりなるコラム(縦の欄)を開設してあると。この説明から、精算表であること





edition, 1863) で紹介した *To avoid this difficulty (the same account twice)* の (その1) の “neutralizing” account に相当する方法であるが、プライヤントの場合では、例えば、現金出納帳と仕入帳の場合でいえば、人名 (“A”) 勘定をこの相殺勘定として用いている。フェアバンクスの場合では “Transportation” account を媒介の勘定 (intermediate account) としている。

(イ)の方法は、今日のテキスト (日本の) 等で解説しているもので、例えば、現金仕入取引のような場合でいうと、仕入帳からは現金勘定口座へは転記せず、現金出納帳からは仕入勘定口座へは転記しないという形をとって相互にチェックする仕組 (a system of checking) である。

(ロ)の方法は、それぞれの補助簿兼仕訳帳としての特殊仕訳帳に、特殊金額欄 (extra columns in each books) を開設し、これらの特殊金額欄 (例えば、仕入帳の現金欄、現金出納帳の仕入欄) からは、元帳の当該勘定口座には転記しないのである (in such case, omit to post the column from one of the books, but post it from other)。この簿記書では、以下の雛形 (Set) では、この方法によっている。

Set III. Wholesale and Retail Hardware Business. では、Day-Book 日記帳と Cash-Book 現金出納帳とをともに仕訳帳として用いる複合仕訳帳制を採用している。いわゆる改良イタリア式簿記である。Set III. の序論で、次のようにいう。

The design of this set is to introduce the Cash-Book as principal book, and to show the method of journalizing from it as the close of each day's business.

Set IV. Executor's Book, Estate of Thomas W. Parter, etc. 省略 (帳制は Set III. と同じ)。

Set V. General Commission and Shipping Business. では、仕訳日記帳 (The Journal Day-Book) と現金出納帳による複合仕訳帳に加えて補助簿としての仕入帳、売上帳、売上手数料記入帳を説明している。この仕訳日記帳の金額欄は貸借二欄式であり、その他の様式等にも今日の簿記テキストの定型を完成している。

Set VI. 単式簿記…… (省略)

Set VII. Wholesale Produce Business. では、出資者二名の組合事業で、単式簿記から複式簿記への転換を解説している。仕訳帳は、商品・現金・諸口を区別した6桁式の多桁式仕訳帳である。

Set VIII. Domestic Dry Goods Commission Business. では、仕訳帳 (普通仕訳帳) と元帳に加えて、補助簿兼仕訳帳 (特殊仕訳帳) として仕入帳、現金出納帳 (多桁式)、当座預金出納帳、売上帳および売上勘定書記入帳を採用している。本格的な複合仕訳帳制である。

Set IX. Cotton and Wool Commission Business. では、日記帳、売上手数料記入帳および現金出納帳を兼仕訳帳として (books of original entry) 用い、月次に仕訳する帳制を採用している。

Set X. Flour and Grain Commission Business. では、仕訳日記帳と元帳の主要簿のほかに、荷受帳、現金出納帳 (多桁式)、売上手数料記入帳を補助簿とする帳制を採用している。

Set XI. Inporting and Jobbing Dry Goods House.

Set XII. Foreign Shipping, Ship Broke-

rage, and General Commission Business. (仕訳日記帳と現金出納帳によるいわゆる改良イタリア式簿記。補助簿として備忘帳、支払明細帳、仕切状、売上勘定書記入帳)

Set XⅢ. General Wholesale, Importing, Commission, and Jobbing Business. (仕訳日記帳、現金出納帳、売上帳、売上手数料記入帳からなる複合仕訳帳制、加えて補助簿として仕切状、手形記入帳等)

以上が272頁までである。以下に、銀行業 (Banking) の簿記 (pp. 273~376) と株式・金融仲介業の簿記 (pp. 377~448) が解説してある。

#### エルスワースの簿記書

1868年 (邦暦で明治元年) に、エルスワース (Henry William Ellsworth, 1837—1924) の簿記書がニューヨークで刊行された。手許にあるのは1873年版である。そのタイトルは次掲のとおりであった。

Ellsworth's Single and Double Entry Book-Keeping and Business Manual, for Schools, Academies, Business Colleges or Private Instruction. By H. W. Ellsworth, etc., New York : 1873.

一般的な「教則」に相当する「序論」について、第1編「単式簿記」、第2編「複式簿記」という構成であり、両編は、Set形式で、業種別に帳簿雛形を用いて記帳の解説をしている。第1編はSet I.~V. であり、第2編はSet I.~IV. である。

以下、とくに第2編につき注目すべき諸点を指摘する。

第2編「複式簿記」のSet I. は「基礎編」(Initiatory) で、“recorded by Double Entry ; - Italian Method, in Three Books.”となっている。日記帳、仕訳帳、元帳の古典

的な3主要簿制 (*tre libri principali*) である。仕訳帳の開始記帳は、資本 (Capital) 勘定を相手科目として資産を借記し、負債を貸記するという伝統に忠実である。元帳の末尾には、損益勘定口座と“Resources and Liabilities”というタイトルの勘定口座が開設されている。後者は残高勘定口座に当るものである。「資産負債勘定」(the account of Resources and Liabilities) という勘定科目は、必ずしも一般的ではないように思う。

(Taken after Posting Transactions.) 第1試算表につづいて (Taken after the Transfer and Balancing Entries have been made.) 第2試算表を作るのは、他の米書の場合と同じ。第1部のX. 「第2試算表 (Second Trial Balance) について」を参照のこと。また、Balance Sheetは、米書の多くの場合は「精算表」のことであるが、この簿記書もその例外ではない。

Set II. - Wholesale Business. では、“recorded by Double Entry ; - Current Practice, in Five Books, with a Bill Book as Auxiliary.”となっている。この5帳とは、仕入帳、売上帳、現金出納帳、仕訳日記帳 (Journal Day Book) および元帳である。前の3帳は、いずれも多桁式のもので複合仕訳帳制を採用している。

Set III. - Commission Business. では、“recorded by Double Entry ; - Current Practice, in Three Books.”となっている。この3帳とは、多桁 (6桁) 式仕訳帳、Commission Sales Book および元帳である。多桁式仕訳帳では、借方に経費・現金・諸口、貸方に諸口・現金・商品の特殊金額欄を開設している。

Set IV. Company (Coal & Mining) Business. では、“Contains in Six Books.”となっている。この6帳とは、株式引受帳、株式預証控、株式譲渡帳、多桁式 (8桁) 仕訳帳、株式元帳および総勘定元帳である。

なお、Set II.~IV. では、元帳の雛形を省略している。

### ギールの簿記書

1882年(邦暦で明治15年)に、ギール(George P. Geer, 1814—1896)の簿記書がマサチューセッツのホリーオウク(Holyoke, Mass.)で刊行された。そのタイトルは次掲のとおりであった。

Geer's Analysis of the Science of Accountants, Its Theory, Principles and Practice, as adapted to Modern Book-Keeping, illustrating the old and new methods of keeping the Day-Book, Journal and Ledger, with explanations of the auxiliary books and forms. Designed for the use of Counting-Houses, Schools, Teachers, etc., etc. By George P. Geer, Holyoke, Mass. : 1882.

自ら40年におよぶ実務経験者と称している(a practical bookkeeper for forty years)著者の、この堂々たるタイトルのこの簿記書は、294頁の大型本である。その目次を参考のために掲示する。仕訳帳を中心とした帳制のバリエーションに従って、Set I., Set II., 等としていく定型は必ずしも充分でないが、第20章までのいわば基礎編、第21章以下の応用編と分けられ、よく体系化されている。

第1章 理論、原理および法則、第2章 勘定、第3章 勘定分類、第4章 帳簿：日記帳、第5章 仕訳帳、第6章 元帳、第7章 転記、第8章 試算表および元帳検証、第9章 締切記入および Balance Sheet、第10章 補助簿、第11章 仕訳帳の様式、第12章 帳簿の分類、Set No. 2、第13章 Hartshorne と Geer の 仕訳帳、第14章~第20章 勘定の解説、第21章 問屋業の簿記、第22章 特殊組合勘定、第23章 仕訳の解説、第24章 二組の帳簿雛形、第25章 仕訳帳の諸

様式と補助簿、第26章 組合事業と会社の簿記、第27章 株式会社の簿記、第28章 清算、第29章 General Estates and Income (信託財産の運用と利益)

巻頭の序論のサブ・タイトルは、Historical Sketch of the Science of Accounts. となっており、米書で簿記史を扱ったものとして珍しい。英書では、序論の一部で A short History of Book-keeping というタイトルで論じたケリー(Dr. Patrick Kelly)の簿記書(1801)、あるいはクロンヘルム(F. W. Cronhelm)の簿記書(1818)の場合の Sketch of The Progress of Book-keeping のような例がある。

ギールの Historical Sketch of the Science of Accounts は pp. 8~18 に及ぶものであるが、その冒頭にいう。

“how obscure is the origin, and how slight the traces of the development of those arts.”

そして、話は、紀元前1822年エジプトはメムノンの神殿、文字の発明にはじまり、アダムの子セツ、フェブライ法典、フェニキアの王子カドモス(久野注、Cadmus、テーベの建設者)、はたまた、詩人ホーマー、選民ユダヤ人と神、紀元前400年のイオニア文字、さらにギリシア文字に及び、つづいて、数の起源、ギリシアの哲学者タレス(久野注、七賢人の一人、Tales)、さては、ユークリッド、ピタゴラス、エウドクソス(久野注、Eudoxos、ギリシアの数学者で天文学者、近代数学の先駆者といわれる)、アラビア数字、古代フェニキアの港ツロの王Hiram、エルサレムの王ソロモンを論ずる。まことに風変わりといおうか、意図不明といおうか、はたまた術学的というべきか。これを要するに、何をいわんとするのか。つまりは、冒頭の見解を敷衍して、事物の起源(the origin)とその発展をあとづける(to trace)ことのむずかしさなのであろう。10頁に至って、次のようになりかえす。

“Like the story of the birth of many of its sisters of the exact Sciences, its origin is buried in the darkness and obscurity of fable and tradition.”

ついで、帳簿記録に関し、例のごとく博引旁証・古事来歴が颯々とつづき、ようやく15頁に至って、

“The First work on book-keeping was the production of an Italian teacher, one Lucas de Borgo, or Burgo, who, without knowing much of trade by his own experience, observed the manner in which intelligent merchants of his own country kept their accounts.” となる。また、簿記書としては、Lucas de Borgo の1495年の簿記書、英国で最初の1543年の簿記書（久野注、オールドカッセルの名は出していない）、James Peele の1569年の簿記書、ついでコリンズ（Collins, 1652）、Mair, Benjamin Booth（1789）、E. T. Jones（1821）を紹介している。全体として、ケリーやクロンヘルムの前掲書あたりが種本であろう。あるいは、彼等とともに同じ種本によったか、のいずれかであろう。先に、1495年とあるのは、1494年の誤りであるが、ケリーの場合も “about the year 1495, by Lucas de Burgo”（p. vi）とあり、クロンヘルムの場合も “at Venice, in 1495, from the famous Lucas Paciulus” とある。ケリー等の場合の1495年とある誤りは、その種本の M. De la Porte（Mathieu de La Porte）、*La Science des Negocians et tenuers de livre*……（1753年版、p.12）に由来している。英米書にこの誤りがそのまま踏襲されていく。また、Collins（1652）とあるのは、1653年の誤りであるが、ケリーの場合さらにフォスター（B. F. Foster, *The Origin and Progress of Book-Keeping*, 1852）の場合、いずれも1652年とあり同じ誤りがつづく。ここらあたり、コピーし合っているの

か、あるいは、同じ種本によっているのか、のいずれかである。Mair については、ギールは *Book-Keeping Methodiz'd*（1736）をあげないで、その補訂版である *Book-Keeping Moderniz'd*（1768）をあげている。ジョーンズ（He published a treatise on the subject in 1821）とあるが、正しくは、1796年であり、その翌年には米国版が出版されている。ついで、16頁以下になって、ようやく、“to its history in our own country” という事になるのだが、僅かに、ベネット（James Benett, *The American System of Practical Book-Keeping*, 1820）があげられているにすぎない。タイトルのせいかも知れぬ。

第1章の冒頭にいう。「勘定の科学（*The Science of Accounts*, この簿記書のタイトルでもある）は、商工業、流通業にかかわる諸活動によって、企業の各方面に生じている財産価値の変動の整理・分類・記録を司る」と。

ついで、**First~Fourth** の仕訳の（貸借の）ルールを、擬人的受渡説によつてのべている。

第3章の勘定分類では、伝統的な3勘定（**Real, Personal, Fictitious**）を採用しており、とくに、資本勘定と残高勘定について詳論している。残高勘定の目的は “for the purpose of ascertaining the exact state of business” と明示している。

第4章では、主要簿と補助簿を明確に区別して機能を認識しており、前者として、日記帳（*The Day-Book, Waste-Book, or Blotter*）、仕訳帳（*The Journal*）、元帳（*The Ledger*）を示している。

第5章では、仕訳帳の解説をしており、開始記帳は、資本金勘定を相手科目として、資産を借記、負債を貸記している。

第6章では、元帳を解説している。

第7章の転記、第8章の試算表につづく第

9章は、「締切記入および Balance Sheet」となっているが、ここでは、残高勘定と損益勘定との両集合勘定への振替手順を説明している。とくに Balance Sheet については解説していないが、この章の冒頭に、

“After the Ledger has been tested by the final Trial Balance, at the close of the year’s business, and found correctly and balanced, the next step is to make the Balance Sheet and close the Books.”とあることからみて、この “to make the Balance Sheet” とは、「貸借対照表の調製」ではなく、「残高勘定の開設」と解される。つまり、ギールにとって Balance Account と Balance Sheet とはまったく同義語に用いられているとしか理解しようがない。Balance Sheet について何も解説していないのも、おそらくはこのためであろう。

第13章では、とくに Hartshorne’s Journal と Geer’s Journal を解説しているが、その内容は、前者が諸口欄、現金欄、商品欄を区別した多桁式仕訳帳であり、後者が諸口欄、現金欄、商品欄、利息欄、手数料欄、諸掛り欄および資本金欄を区別した多桁式仕訳帳である。前者は1835年頃のもの、後者はポストン在住者 George P. Geer の工夫になると自称しているが、固有名詞を付するほどのものではない。多桁式の例はいくらかもある。Hartshorne（なる人物？）については目下のところ不明である。

第25章は、とくに、No. 1. ～ No. 6. の仕訳帳のバリエーションに関する雛形を示している。以下に概説する。

No. 1. Original Form（内容的には仕訳日記帳であり、摘要欄に取引の事実が小書してある。金額欄は右手に貸借二欄を区別して開設してある）

No. 2. Journal Formula and Titles（摘要欄は科目のみ。純然たる仕訳帳である）

No. 3. Day-Book and Journal Bound

Together, on Opposite Pages（左頁が日記帳で、右頁が中央から左右に貸借を区別して科目と金額とを対照記入する様式のもの）

No. 4. Journal Titles and Double Ruling（No. 3. のうちの仕訳帳の部分のみのもの）

No. 5. Hartshorne’s Journal（前出）

No. 6. Geer’s Journal（前出）

なお、32頁の注記に、“The old stanza, which contains Journalizing rules in epitome,”として、次の押韻の仕訳ルールが紹介されているが、これは P. Kelly (1801), P. Deighan (1807) の両英書あるいは、I. Mayhew (1851, 米書) にも示されているものである。ギールの場合、おそらく、P. Kelly の書物からの借用であろう。

“By Journal laws what you receive  
Is Debtor made to what you give ;  
Stock for your Debts must Debtor be,  
And Creditor by property ;  
Profit and Loss Accounts are plain,  
You Debit Loss and Credit Gain.”

#### イートン・バーネットの簿記書

1882年に、イートン (A. H. Eaton, 1840—1917) とバーネット (E. Burnett, 1840—1893) の簿記書がボルティモアで刊行された。そのタイトルは次掲のとおりであった。

Eaton & Burnett’s Bookkeeping embracing the Theory and Practice of Accounts, etc., by A. H. Eaton and E. Burnett, Baltimore, M. D. 1882.

序説にひきつづき、単式簿記 (pp. 9~25) と複式簿記 (pp. 26~166) とが、Set 形式の雛形にそくして解説してある。前者で Set 1 と Set 2, 後者では Set 1~Set 15 となっている。以下は、多桁式仕訳帳、単式から複式への転換手続、各種業務の簿記、商業算術、

SINGLE ENTRY BOOKKEEPING.

PROOF SHEET AND STATEMENT.

Folio.	Accounts in Ledger.	Face of Ledger.		Resources.	Liabilities.
		Dr.	Cr.		
1.	Proprietor . . . . .		2000		
1.	Bauld & Gibson . . . . .	900	1030 40		130 40
2.	John Murray . . . . .	21 63	12	9 63	
2.	W. R. Elliot . . . . .	7 21	5	2 21	
2.	E. D. King . . . . .	18 68	10	8 68	
2.	W. Anderson . . . . .	539 40	539 40		
2.	Mrs. M. J. White . . . . .	17 64		17 64	
	Excess of Credits, from D. B.	2092 24			
	Proof of Posting . . . . .	3596 80	3596 80		
	Cash in hand per C. B. . . . .			1046 80	
	Merchandise on hand per Invent'y . . . . .			1200	
	Bills Receivable, Note No. 1, per B. B. . . . .			389 40	
	Bills Payable, Note No. 1, " B. B. . . . .				350
	Excess of Resources, or Net Capital . . . . .				2193 96
				2674 36	2674 36
	Net Capital at Closing . . . . .		\$2193.96		
	" " " Starting . . . . .		2000.00		
	Net Gain, . . . . .		\$193.96		
	The net gain is transferred directly to the credit of the proprietor's account from this statement.				

The only method of proving Single Entry posting is by subtracting the difference between the debit and credit columns of Day Book, which must equal the excess of the face of Ledger, as shown above.

This method of proving will only apply to the first posting, and not where posting is continued under old balances. The form of statement is of general application.

In a Statement where there is a large number of personal accounts, each would not be individually named as above, but all would be taken in the aggregate—the total excess of debits being, "Personal Accounts," due us, and credits, "Personal Accounts," due others. The same plan is pursued in Trial Balances and Balance Sheets in Double Entry.

商用文、商業用語の解説とつづく。形式・内容ともに、19世紀の米国の典型的なテキスト(教材)である。

以下、単式簿記・複式簿記の解説につき、とくに注目すべき諸点を紹介する。

単式簿記の定義(内容)に関し、人名諸勘定口座を用いた債権・債務の記録(to keep accounts with the persons with whom we have dealings.)により、“financial condition”を把握せんとしている点が注目される。元帳面では資本(主)勘定口座が開設されて

おり、かつ、期末に“Proof Sheet and Statement”という名称で、上掲の計表を調製している。

資産・負債の欄には、元帳面の記録に追記して、現金出納帳による手許現金、商品棚卸高、手形記入帳による受取手形と支払手形の在 high が記入してあり、純計額としての Net Capital が示されている。「検証表」(Proof Sheet)であると同時に一種の「財務表」(Financial Statement)たる色合も認められる。

複式簿記に関して、まず注目されるのは勘定分類ととくに商品(混合)勘定の理解である。

伝統的の勘定分類は、實在(体) Real, 人名 Personal, 擬制(名目) Fictitious (Nominal) とする3分類であるが、本書の場合は、次のようになっている (p. 27)。

## CLASSIFICATION OF ACCOUNTS.

There are three principal classes of accounts, viz., Proprietary, Loss and Gain, and Resource and Liability Accounts.

I. *Proprietary Accounts* are those kept under the name or names of the owner or owners of the business, for the purpose of showing his or their financial condition.

II. *Loss and Gain Accounts* are those whose differences represent so much loss or gain to the business. This class includes—

1. All speculative property accounts, that is, all accounts of property bought and sold, such as Merchandise, Real Estate, Ships, Stocks, and speculations of all kinds.

2. Accounts of incidental losses and gains, such as Expense, Interest, Commission, Insurance, &c.

III. *Resource and Liability Accounts* are those whose balances are resources or liabilities. This class includes all personal accounts, Cash, Bills Receivable, Bills Payable, and others of a similar nature.

とくに注目されるのは、商品(混合)勘定およびこの勘定の原理を援用する不動産や船舶等の諸勘定を“Loss and Gain Accounts”(損益諸勘定)とみている点である。伝統的勘定分類がいかにも静(態)的であるのにくらべて、明らかに動(態)的である。さらに29頁では、商品勘定の目的につき、明快に次のようにいう。

“The object of this account is to arrive at the gains and losses on merchandise by recording its cost and proceeds.”

なお、期末棚卸高 by Inventory (商品, 不動産, 船舶, 有価証券) については、すべて「見積時価」(the present estimated value) を用いている。

Set 1. Journal は平凡な金額二欄式のものである。元帳の参照頁は筆者(久野)のいうJ型である。实在勘定には英米式決算法を用い、また、損益(集合)勘定口座への振替は、仕訳帳を経由していない。

Set 2. Day-Book は仕訳日記帳で、金額欄は内訳欄と本金額欄とよりなる。

Set 4. 以下には、損益表および資産負債表が登場する。この二表のほかに Statement of Investment が掲示されているが、内容は、出資者別の資本勘定の明細表である。

Set 10. の105頁以下では、補助簿が登場するとともに、これらを兼仕訳帳としても利用する複合仕訳帳制となり、とくに米書ではおなじみの、第1部のV. で紹介した図柄<sup>ダイアグラム</sup>がでている。

161頁から166頁に、187項にのぼる「簿記の目的」にはじまる質疑応答があり、学習には便利である。

### ブライヤントの簿記書

1882年(明治15年)に、ブライヤント(John Collins Bryant, 1821—1901)の簿記書の第8版がブアファローで刊行された。そのタイトルは、次掲のとおりであった。

Bryant's New Book-Keeping Elementary and Practical, containing a through explanation of the principles and practice of double and single entry, etc., By J. C. Bryant, M. D.

この J. C. ブライヤントは、例の Bryant

& Stratton の連鎖商業学校のひとつの Buffalo Business College の校長で、前出の H.B.ブライヤント(Henry Beadman Bryant, 1824—1892)とは別人である。

ベントレー・レオナードの『書目』(pp. 47~48)によると、J. C. ブライヤントは、この簿記書のほかに、*Bryant's book-keeping; a treatise on the science of accounts in two parts, etc.* (1869), *Bryant's new elementary book-keeping; etc.* (1876), *The new standard counting-house book-keeping, etc.* (1885), *The new standard commercial book-keeping, etc.* (1885), *The new standard elementary book-keeping, etc.* (1885), *The new standard practical and progressive book-keeping, etc.* (1893)を刊行している。数は多いが、おそらく、類似書であろう。

この簿記書は、その体裁、内容、構成等いかにも「教材」という感じのものである。その反面に、簡潔・明快な長所もある。

帳制としては、Set. Iのイタリア(ベニス)式の3主要簿制の解説からはじまるが、107頁以下では6桁式仕訳帳を、また121頁以下では *The Cash Journal System* を解説している。その定義にいう(p. 121)。

“the Day Book, Journal and Cash Book are combined, and called The Cash Journal.”

また、非現金取引の仕訳に関し、実に簡明に次のようにいう(p. 121)。

“When it is necessary to make an entry in which *no* Cash is received or paid out, the account to be *Debited* must be placed on the right-hand page, and the account to be *Credited* placed on the left-hand page. This will increase the footing of Cash Journal *equally* on each side, and therefore will not affect the Cash balance.”

まさに、現金(式)仕訳帳そのものである。

145頁以下では、*the most modern practical method as now used in the best business houses.* として、仕入帳、売上帳、現金出納帳および一般仕訳帳よりなる複合仕訳帳制を解説している。元帳への転記は、*posting directly from each of the other four books.* の方式である。

さらに、173頁から巻末312頁までは、銀行簿記である。最も注目されるのは、この銀行簿記での *The General Journal* (と名づけた帳簿)が現金(式)仕訳帳であることである。ただし、日本の銀行簿記の「日記帳」の場合のように、金額欄を、現金・振替・合計の3欄に区別する形式は採用していない。

勘定分類としては、伝統的な *Real, Personal, Nominal (or Imaginary, Fictitious)* の3分類によらず、資産・負債勘定群と損益勘定群とに2分している。前者には、現金、受取(支払)手形、人名諸勘定がふくまれ、棚卸法を適用する商品、不動産は後者(損益勘定群)にふくまれている。この分類にそくして、資産負債表(*Statement of Resources and Liabilities*)と損益表(*Statement of Losses and Gains*)とが作られるが、この両表は、いわゆる財務諸表ではなくて、残高・損益の両集合勘定口座への振替に際して、いっさい仕訳帳を経由しないことから、振替記帳の計算・確認・検証の手段として機能している。また、*Balance Sheet* (ex, p. 104)とあるのは、「精算表」のことである。先の両 *Statements* やこの *Balance Sheet* という用語法は、この当時の米書では、ごく一般的なものになっている。

#### ウィリアムス・ロジャースの簿記書

1882年に、ウィリアムスとロジャースの共著の簿記書がニューヨークで刊行された。手許にあるのは、その1889年改訂版である。ベントレー・レオナルドの『書目』で調べると、ウィリアムズとロジャースのフル・ネームは、



Louis Laffayette Williams (1841—1919),  
Fernando E. Rogers (1842—1920) である。  
この簿記書のタイトルは、次掲のとおりであ  
った。

**Theoretical and Practical Book-Keeping,  
by Double and Single Entry, for use in  
Business Colleges, etc., Revised 1889.**

各種の学校および自習用の教材である。冒  
頭から, Example No. 1 以下の詳細な仕訳  
記帳の例解が示されており, 後半は各業種別  
の簿記となっている。とくに注目すべき諸点  
を示そう。

(1) 米書では一般的であるが, この簿記書  
もまた, 精算表のことを **Balance Sheet** と  
称している。

(2) いわゆる「英米式決算法」を採用して  
おり, 例の「赤記」(**red ink**)・「黒記」  
(**black ink**) の方式で, 残高勘定口座は開設  
していない。

(3) 「締切り(る)」(**to close**) という概  
念につき, 実に明確な認識をもっている。損  
益(集合)勘定口座を開設し, この勘定に振  
替えることによって名目諸勘定を文字通り  
**to close** し, さらに資本(主)勘定に振替え  
た後に, 元帳面に残留している実在諸勘定に  
ついては, **The remaining accounts** (資産  
・負債・資本), **need not be closed for this  
purpose……They may be closed, however,  
to mark a period in the business, or for  
the purpose of causing each account to  
exhibit in a single amount, convenient  
for inspection, its exact net debit or exact  
net credit, as the case may be……For  
the purpose, however, of giving the pupil  
practice in the work of closing the ledger,  
all of the accounts may now be closed,  
as explained bellow. (p. 35)** とのべている。  
すなわち, 名目諸勘定の締切りの後に元帳面  
に残留している資産・負債および資本の実在

諸勘定については, 締切りの必要がないが,  
当期と次期との境界をはっきりさせる目的で,  
あるいは, 各勘定別に貸借の残高を測定・確  
認する目的で締切り(繰越し)をしてもよい。  
なお, このテキストでは, 元帳締切りの手続  
を生徒に学習させるための便宜の上から, 以  
下に解説するように, すべての勘定につき締  
切りを行うことにする, というのである。筆  
者(久野)は, **closing entry** 「締切記入」と  
は, 専ら名目諸勘定にあてはまる概念であり  
手続であること, 実在諸勘定については,  
**balancing and ruling entry** という概念を  
あてはめるべきであること, および, いわゆる  
英米式決算法に徹するならば, 実在諸勘定  
については, 締切りも繰越しも行なうべきで  
はなく(その必然性も必要性もなく), 次期への  
引きつぎにつき記帳の検証をしてその継続性  
の保障をすれば足りること(その手段としての  
繰越試算表の作成)をしばしば強調してきた。  
また, 各勘定別に貸借残高を測定うんぬんと  
ある点についていえば, これは元帳の様式が  
標準式のためであり, 残高式元帳なら, 残高  
(**net**) はコンスタントに測定・記帳されてい  
る筈である。締切・繰越とはかかわりがない。

なお, 1890年には, **Williams & Rogers  
Series** として, 次掲の簿記書を刊行してい  
る。

**The New Theoretical and Practical  
Complete Book-Keeping, by Double and  
Single Entry, for use in Business Colle-  
ges, etc., New York : Cincinnati : Chicago  
American Book Company.**

#### リリブリッジ・ルーズの簿記書

1888年(邦暦で明治21年)に, リリブリッジ  
(**D. R. Lillibridge, 1839—1896**) とルーズ  
(**F. F. Roose, A. M., 1855—?**) の簿記書  
の第2版(改訂)がネブラスカの州都リンカ

ーンで刊行された。初版は1886年である。そのタイトルは次掲のとおりであった。

**Modern Book-Keeping, Theoretical and Practical, Embracing Instruction and Practice in the Science of Accounts, and adapted to the Use of Business Colleges, Public and Private Schools, and Private and Self-Instruction, By D. R. Lillibridge, and F. F. Roose, A. M., Second Edition-Revised, Lincoln Neb. 1888.**

「まえがき」につづき **Accept.** にはじまる簡単な基本語集と、**A I-First Quality** にはじまる略語、**@-At.** にはじまる符記号が示れ、さらに、3頁にわたる貸借のルール (**Rules for Debiting and Crediting Accounts**) がつづく。内容は、資本 (主) 勘定、現金、商品、受取 (支払) 手形、人名諸勘定その他の貸借記入および締切・総括記入を示している。抽象化されたルール (**Rules**) とは違っている。末尾に「簿記の起源」について言及しており、「ある種の簿記」が古代 (ローマ) に存在したとし、キケロ (**Marcus Tullius Cicero, 106—43**) の話しが出てくるが、いともあやしげである。ついで **Kelly (1805)** から “**Lucas di Borgo prepared and published a treatise on this subject in 1495 at Venice**” を引用している。**Kelly (Dr. Patrick Kelly)** の簿記書は1801年に刊行されており、1805年は第3版である。なお、**Kelly** の **A short History of Book-keeping (p. vi)** は、 “**It was published in the Italian language at Venice, about the year 1495, by Lucas de Burgo,**” となっている。本書での引用部分は、どうも孫引きくさい。1494年ではなく1495年とする誤りが重なっていることは、いうまでもない。もともとは、**Kelly** が参照している種本の **M. De la Porte (Mahieu de La Porte), La Science des Negocians et teneurs de livre……(1753**

年版, p. 12) が1495年とあるためである。つづいて、例のジョーンズ (**E. G. Jones, 1796**)、ブース (**Benjamin Booth, 1879**)、ハミルトン (**Hamilton, 1820**)、ジョーンズ (**Jones' second edition in 1821**)、モリソン (**C. Morrison, 1823**) およびエディンバラの **W. & R. Chambers** の名前がでてくる。**E. G. Jones** とあるのは **E. T. Jones (Edward Thomas Jones)** の誤りである。ブースは1879年ではなくフランス大革命の年の1789年である。これは印刷上のミスかも知れぬ。ハミルトン (**R. Hamilton**) の場合は初版が1777年で、第2版が1788年である。1820年のものは **Elias Johnston** の改訂版である。**C. Morrison (1823)** とあるのは **Clerk Morrison** の簿記書 (**A complete system of practical book-keeping, etc.**) の第3版であり、初版は1820年である。『研究』で紹介した **James Morrison (1808年)** とは別人である。**W. & R. Chambers** とあるのは、おそらく **Chamber's Educational Course** を出版した **W. & R. Chambers, London and Edinburgh** のことであろう。そうだとすれば、この「教育叢書」の簿記書は、**W. Inglis** の **Book-Keeping by Single and Double Entry etc.** である。同書には刊行年次が印刷されていない。詳細は『研究』を参照されたい。**Clerk Morrison** や **W. & R. Chambers** 『教育叢書』のことは、何を種本としたものか不明である。彼等が自身で原典を検討したものでなく、孫引きであることだけは確かである。

前出の “**Jones' second edition in 1821**” とあるのが、どうもわからぬ。初版はたしかに1796年である。**Second American Edition** はニューヨークで1797年に出版されている。プリストルでの第2版は同年の1797年である。これらはいずれも **Jones's English System of Book-Keeping, etc.** である。この簿記書のほかに、**Edward Thomas Jones, Science**

of book-keeping, exemplified in Jones's English system etc. という簿記書がある。その第2版(ロンドン)は1831年に出版されている。この簿記書のことで、しかも1831年を1821年と誤った(ミスプリント)のであろう。諸般の点からみて、リブリッジ・ルーズのこの記述は、甚だ簡略であるのみならず、間違いが目立つ。いいかげんなものである。

なお、蛇足ながら、E. G. Jones (正しくは E. T. Jones) につき、“he devised a means for keeping books correctly.” とのべているのは、まったくの誤りである。“keeping books correctly” とジョーンズが自己宣伝したことは事実だが、ジョーンズの英国式簿記の実体が、いかにいいかげんなものであるかについては、別に『研究』を参照されたい。

以上で10頁を占め、11頁ないし152頁で、Part I. ~ Part V. の記帳練習 (Exercises for Practice) となり、これに「補遺」が8頁で全巻160頁の大型本となっている。以下、この記帳練習の内容につき注目すべき点を紹介する。

商品勘定(いわゆる混合商品勘定)の基本的な認識は、イートン・バーネットの場合と同様に、損益計算(系)の勘定とみる傾向が顕著である。ただし、the value of the unsold at closing を、イートン・バーネットの場合のように、「見積時価」で評価するかどうかは、必ずしもはっきりしていない。不動産(Real Estate)について、商品勘定と同じ原理、つまり inventorization 「棚卸法」を援用していることも、当時としては、まずポピュラーな方式であった。参考のために、資料として、商品勘定とともに掲示する。

MERCHANDISE.

On the Dr. side of this account is placed the value of the merchandise on hand at commencing business, and the entire cost of each subsequent purchase, including the charges for freight, drayage, and other outlays incurred in placing it in the store. On the Cr. side is placed the amount of each sale, and the value of the unsold at closing. The footing of the Dr. side shows the cost. The footing of the Cr. side shows the proceeds. An excess on the Dr. side shows a loss, and an excess on the Cr. side, a gain. Closed To or By, Loss and Gain.

EXERCISE No. 4.

April 1. Have Mdse. on hand, \$4500. 2. Sold Mdse., \$525. 3. Bought Mdse., \$1484. 14. 4. Sold A. W. Strong, Mdse., \$1406. 15. 5. Sold E. C. Shaffer, Mdse., \$1564. 6. Bought of J. M. Hamilton, on my note, at ten days, Mdse., \$408. 7. Sold O. P. Judd, Mdse., \$1843. 8. Sold Mdse. for cash, \$3000. 9. Bought of Robert Sickles, on account, at thirty days, Mdse., \$543. 10. Sold D. R. Lillibridge, on account, Mdse., \$414. 08. 11. Mdse. unsold, \$400. Required, the gain or loss on merchandise.

Dr. BOUGHT.			MERCHANDISE, NO. 4.			SOLD. Cr.		
DATE	PAGE	AMOUNT	DATE	PAGE	AMOUNT			
188... Apr. 1	12	\$4500	188... Apr. 2	12	\$ 525			
3	12	1484 14	4	12	1406 15			
0	12	408	5	12	1564			
0	12	543	7	12	1843			
		414 08	8	12	3000			
		To Loss and Gain	10					
				12	414 08			
					400			
					9182 23			
		9182 23						

REAL ESTATE.

This account is Dr. for the value of real estate on hand at the commencement, the entire cost of each subsequent purchase, and all taxes, repairs, and costs of every kind; and Cr. for the entire proceeds from sales or rents, and the value of the unsold at closing. The difference between the two sides of the account shows a gain or loss on conditions specified under merchandise. Closed, To or By Loss and Gain.

Part I. では、主要な勘定について解説し、Part II. では、雛形による「仕訳の練習」(journal exercises), Part III. では、Part I. と II. の基礎知識にもとづく、日記帳、仕訳帳、元帳の Model の説明を行なっている。ここでとくに注目されるのは、

- (i) Model Ledger の摘要欄に、仕訳の相手科目等の記入がいつさいないこと(もっとも後の別例ではこれらを記入した雛形もあるが)。
- (ii) 各口座の参照頁欄は、仕訳帳の頁(J. F.)を記入している。筆者(久野)のいうJ型である。

(i) 損益・残高の両集合勘定への記帳は、すべて、例の、red ink, black ink による直接口座間振替を行なっている。そこで、この両勘定口座の参照欄は、すべて(L. F.)であり、元帳面の各口座の頁数が記入される。そして、この場合は、すべて、摘要欄には科目が記入されている。その実況を、右に示す。

なお、とくに58頁に、次のように注記している。

“The Balance account in the Ledger may be omitted, etc.”

その実況を Set VI. (pp. 68~70) で示している。こうなると、いわゆる「英米式決算法」という形をとることになる。

MODEL LEDGER—SET I.

Dr.				Student.				Cr.					
188..	Jan. 30	J. F.	47	37	40	188..	Jan. 1	J. F.	45	6000			
	31		65	7815	43		31		65	1862	89		
				7852	83					7852	88		
							Feb. 1					1815	48

*Cash.*

Dr.				Cr.						
188..	Jan. 1	J. F.	45	8000	188..	Jan. 2	J. F.	45	3000	
	" 6		45	515	50	" 9		45	1000	
	" 13		45	600		" 17		45	448	20
	" 15		45	75		" 20		45	4000	
	" 16		45	436	06	" 22		45	56	
	" 18		45	1250		" 23		47	17	38
	" 19		45	1260		" 26		47	145	
	" 25		47	2710		" 29		47	37	40
	" 27		47	75		" 30		47	131	12
	" 31		47	1000		" 31	Balance.....	55	4035	48
				12870	88				12870	88
Feb. 1	Balance.....			4035	48					

*Merchandise.*

Dr.				Cr.						
188..	Jan. 2	J. F.	45	3000	188..	Jan. 4	J. F.	45	800	
	" 3		45	800		" 5		45	1350	
	" 17		45	6000		" 8		45	1015	60
	" 31	Loss and Gain.....	55	1752	50	" 10		45	350	
						" 11		45	800	
						" 13		45	1100	
						" 18		45	3250	
						" 21		45	1500	
						" 31	Inventory.....	55	1000	
				10552	50				10452	50
Feb. 1	Balance.....			1090						

MODEL LEDGER—SET I.—CONTINUED.

*Expense.*

Dr.				Cr.					
188..	Jan. 29	J. F.	47	145	188..	Jan. 31	J. F.	45	145
							Loss and Gain.....		

*Loss and Gain.*

LOSSER.				GAINS.						
188..	Jan. 31	J. F.	54	12	188..	Jan. 31	J. F.	51	1752	50
	" 31	Discount.....	54			" 31	Merchandise.....	51	75	
	" 31	Expense.....	55	145		" 31	Real Estate.....	51	154	
	" 31	Student.....	61	1852	88		Ship. to Hastings.....	54	116	50
							Commission.....	54	111	
				1858	00				1806	00

*Balance.*

RESOURCES.				LIABILITIES.						
188..	Jan. 31	J. F.	61	1000	188..	Jan. 31	J. F.	52	100	
	" 31	Merchandise.....	51	4000		" 31	D. R. Lillibridge..	52	9400	
	" 31	Real Estate.....	51	4035		" 31	Bills Payable.....	51	435	
	" 31	Cash.....	55	800		" 31	A. H. Church.....	51	7815	
	" 31	Bills Receivable.....	53	860		" 31	Student.....	51	1115	48
	" 31	F. S. Harrison.....	53	75						
	" 31	F. D. McCusky.....	53	200						
	" 31	L. W. Becker.....	53	400						
	" 31	O. P. Judd.....	54	1115						
				4750	48				4750	48

Set XI. は現金式仕訳帳 (The Cash-Journal) である。

Set XII. は6桁式の多桁式仕訳帳 (Six Colum Journal) である。商品・現金・諸

口を区別している。

Set XXII. では、The Cash-Journal を採用した銀行簿記を解説している。

ダドレーの簿記書

1903年に、ダドレー (A. W. Dudley) の簿記書がアイオアの州都 デイモイン (Des Moines, Iowa) で刊行された。そのタイトルは次掲のとおりであった。

Modern Commercial Bookkeeping, A Logical, Teachable, Scientific Presentation of Accounting as practiced in Progressive Business Institutions etc., By A. W. Dudley, Des Moines, Iowa, 1903.

タイトルの一部に “Designed for use in High Schools, Commercial Colleges, Academies, Colleges, and for Private Learners” とあるように、典型的なテキスト (教材) である。

一般原則と定義、借方と貸方、主要簿 (日記帳、仕訳帳、元帳)、資産と負債、勘定科目といった基礎的解説につづいて、「仕訳の練習」を中心とした記帳の解説が行なわれている。

とくに注目すべき点を指摘しておこう。

「単式簿記」の定義 (内容) について、これを人名勘定による債権・債務の記帳に限定して、極めて明確に、次のようにいう。

“a simple method of keeping accounts with persons only.”

仕訳の解説ないし練習について、今日のテキストの定型を確立している。例えば、次のようである。

(取引)	(仕訳)
190年8月3日, ミラー商会より、現金で20ブッシェル(単価5ドル)の小麦を仕入れる。100,000ドル	商品…… 100,000 現金……100,000

資産・負債・資本の勘定の締切・繰越につき、いわゆる「英米式決算法」を採用している。例の赤記入 (By Balance), 黒記入 (To Balance) の方式によっており、かつ、元帳面に残高勘定口座は開設していない。

26・27頁には、Financial Statement (or Yearly Statement) 「財務表」・「年次表」につき、次掲のような注目すべき解説と雛形を示している。その実況は、次のとおりである。

*Statement Feb. 28, 190-*

<i>Resources</i>			
Cash		1666.65	
Merchandise		222.00	
Expenses		55.40	
Expenses		177.95	
	<i>Total Resources</i>		2518.00
<i>Liabilities</i>			
Bills Payable		216.62	
	<i>Total Liabilities</i>		216.62
	<i>Net Capital</i>		2301.38
<i>Losses</i>			
Merchandise		262.25	
	<i>Total Losses</i>		262.25
Freight		17.20	
Expenses		74.40	
Expenses		47.75	
	<i>Total Losses</i>		139.35
	<i>Net Basis</i>		2162.03
<i>Investment</i>			
C. J. Foster		2518.00	
	<i>Total Investment</i>		2518.00
	<i>Net Capital</i>		2301.38

FINANCIAL STATEMENT

135. FIRST PART. The Statement showing the condition and results of the business is made after the Ledger is closed by collecting under the heading RESOURCES a list of all property owned by the business, and of all debts due the business. These are found in the debit (black ink) balances in the Ledger.

136. Then collect under the heading LIABILITIES a list of all debts owed by the business. These are found in the credit balances. The difference between the total resources and total liabilities is the Proprietor's Net Capital. Why? Because the difference between these two amounts

is what will be left after paying all your debts (Total Liabilities) out of what you have to pay from (Total Resources). This difference must agree with the proprietor's balance after his account has been closed.

137. SECOND PART. Collect under the heading GAINS, all the gains. These are shown on the credit side of Loss & Gain account.

138. Collect all the losses under the heading LOSSES. These are shown on the debit side of Loss & Gain. The difference between the sum of these two is the Net Gain or Net Loss.

139. THIRD PART. Show the Proprietor's Net Investment to which add the Net Gain, or from which subtract the Net Loss, the result is the Proprietor's Net Capital, which must agree with the same in the first part. See form and ruling 140 and latter part of 86.

Every bookkeeper who is called upon to make a Financial Statement should do it in such a manner as to feel a degree of pride in submitting this important document to his employer. No better opportunity is afforded him to exhibit his neatness, exactness and thorough understanding of his books. The Financial Statement, variously called Yearly Statement, Test Statement and Statement, is naturally divided into three parts. The first and third parts show the same final result; that is, the net capital. The second part shows the net gain or net loss.

この Financial (or Yearly) Statement 「財務(年次)表」は、元帳の締切りの後 (after the Ledger is closed) に調製され、受託会計責任者たる簿記係 (bookkeeper)

から委託者たる雇い主 (his employer) に対して提出される重要な書類 (important document) であり、記帳の適切・正確なることを立証する最良の機会である (No better opportunity is afforded him to exhibit……) とされている。明らかに、会計責任 (accountability) に裏付けられた会計報告書、つまり受託会計責任者たる簿記係が、自らの会計責任を立証するための手段としての財務表 (別個に調製すれば、複数の財務諸表) である。

なお、家具、経費について、いずれも「混合勘定方式」による「棚卸法」を適用していることを付記する。

また、本書で Balance Sheet とあるのは、米(加)国簿記書での一般的な用語法に従っており、「精算表」のことである。

本書 (p. 28) での勘定分類は、実在 Real, 人名 Personal, 擬制(名目) Fictitious (Nominal), とする伝統的な3分類とは異なり、イートン・パーネットの簿記書(1882)の場合とはほぼ同じ主旨の、次頁上段のようなユニークな(動的な)ものである。

**Stock or Investment account** は、資本(主)勘定である。**Speculative account** は、損益(収益・費用)の勘定である。この範疇に入る Property には、商品(混合)勘定および商品(混合)勘定の原理つまり「棚卸法」を適用する家財や不動産、有価証券等がふくまれる。Property (財産) を損益(系)勘定とみるところがみそである。商人簿記の伝統に立つ動態観である。簿記的にみると、この **Speculative account** は、損益勘定に締切られる (is closed into Loss & Gain)。Non-Speculative account は、残高(勘定)に総括される (is closed "To" or "By Balance.")。

なお、棚卸法を専ら適用する商品(勘定)およびその他の財産 (Property) について、とくに、The debit side shows the cost. The credit side shows the value realized. (p. 29) とのべているところから推して、棚

OUTLINE OF ACCOUNTS

ACCOUNTS	PRINCIPAL CLASSES		EXAMPLES
	1. STOCK OR INVESTMENT		{ Proprietor or Partners.
	2. SPECULATIVE	SUB-CLASSES	
	3. NON-SPECULATIVE	{ Representative Property Personal Real	{ Expense, Int. & Dis., Freight, Cartage, Storage, Commission, Insurance, Adver- tising, etc. { Mdse., Fixtures, Horses and Wagons, Real Estate, Bank Stock, R. R. Stock, U. S. Bonds, Shipments, etc. { Persons, Firms, Corporations. { Cash, Bills Rec., Bills Pay., Mtgs. Rec., Mtgs. Pay., etc.
4. LOSS & GAIN			

卸類には、イートン・バーネット (1882) の場合と同様に、「見積売価」を適用することになろう。

(参考資料) : ウェストンの簿記書

1754年 (邦暦で宝暦4年, 家重の治世) に、ウェストン (William Weston) の簿記書がロンドンで刊行された。そのタイトルは、次掲のとおりであった。

The Complete Merchant's Clerk : or, British and American Counting-House. In Two Parts. etc., By William Weston, London : MDCCL IV

伝統的なイタリア簿記を踏襲しているが、テキストとしてはまとまりがよい。諸般の『書目』や一部の簿記史書等でもおなじみの簿記書である。長文のタイトルは恒例だが、それにしても、本書では極細の活字で第1部・第2部の内容目次に相当するものまでもタイトル頁に記載されている。

2部構成になっており、第1部 (Part I, First Part) では、当座帳, 仕訳帳, 元帳の解説にはじまり、試算表の作成から決算の説

明に及んでいる。補助簿については、殆んどふれていない。とくに「バランシングは、通常、毎年一回もしくは随時に行なわれる」(p. 17) とのべており、一年を会計期間とする定期決算制の普及がとくに目立つ。以上の本文26頁につづき、A雛形 (当座帳, 仕訳帳, 元帳) およびB雛形が示されている。

仕訳帳における開始仕訳は、財産目録にもとづき、資産と負債とにつき、資本 (金) Stock 勘定を相手科目として、資産諸口を借方に、負債諸口を貸方に、それぞれ仕訳している。この帳簿の様式は、左端の元帳丁数欄の記入様式  $\frac{.3}{.2}$  等に古典的イタリア簿記の慣習 (定型) をとどめており、また、金額欄は一欄式である。その実況を示す。

.3	Sherry £490 to James Jordan		
.2	For 14 Pipes at £35	490	

元帳面における損益勘定口座への振替には、仕訳帳を経由しているが、残高勘定口座への振替は、直接口座間振替である。参照丁数欄は、相手科目の口座丁数を記入しており、仕訳帳丁数ではない。筆者 (久野) のいうL型

であり、J型ではない。

B雑型がこれにつづき、さらに、**General Rules for Journalizing** (40頁) が設けられている。Rule 1. (商品を掛で仕入) からはじまり Rule. 45 までである。抽象化ないし公式化した仕訳のルールではなく、むしろ「例題解式」である。以上で第1部が終る。

第2部 (Part II, Second Part) のタイトルは、**Book-keeping in Factory** とある。*Factory* とは工場ではなく在外商館の意味である。帳簿雛形としては、3主要簿に先立ち、**Invoice Book** を示している。ウェストンは、とくに在外商館の簿記を取扱った点に関連している。

“I am surprised *all the Authors* who have hitherto wrote upon the Subject of Book-Keeping should omit so important

a Concern ; (Introduction, p. ii)

“In this Part of my Work, the Case is different ; I am here *attempting* what no one has done before me,” (part II., p. 2)

“This Branch of Book-keeping has been so long unattempted” (part II., p. 3)

巻末に26頁に及ぶ **Of Book-Keeping in a Wharf or Plantation** と補遺が付記されている。序文の一部で、ウェストンはアメリカ在留の書記に対して、**Wharf** (波止場) と **Plantation** (大規模農園) の簿記について言及すると予告している。当座帳ないし備忘帳に相当するものを **Wharf-Book** 陸掲帳 (波止場の) というなどと解説しているが、その内容は、簿記というよりむしろ事務手続の解説である。**Plantation-Books** も同様である。